

甲一行の字を書せん。汝道へ、之を見る時に當つて喚んで甚麼とか作さん。無對。後に師代つて曰く、「喚んで水牯牛と作さん」と。

問ふ、「未審し此の水牯牛還つて耕稼を解するや否や。」曰く、「灼然云く、「是れ甚麼の類ぞ。」曰く、「披毛戴角の者。」云く、「四時何の水草をか食む。」曰く、「口より入らざるもの。」云く、「如何なるか是れ水牯牛。」曰く、「證聖せず。」云く、「如何なるか是れ一莖草を含む。」曰く、「毛羽相似去る。」

問ふ、「是れ聖を超ゆるか、是れ類を超ゆるか。」曰く、「是れ超聖。」

問ふ、「如何なるか是れ水牯牛。」曰く、「冥冥朦朦。」云く、「如何なるか是れ一莖草を含む來る。」曰く、「古人道ひ了るなり、毛羽相似去る」と。又曰く、「一草と云ふは、祇だ是れ不變異を明し得たり。」

余曰く、「祖佛有ることを知らず、狸奴白牯御つて有ることを知る。」云く、「什麼としてか狸奴白牯御つて有ることを知る。」曰く、「祇だ是れ百く所解なし。」云く、「祇だ祖佛の如きは、甚麼として有ることを知らざる。」曰く、「祖は執印たり、佛は相似たり。」云く、「祇だ狸奴白牯の如きは、箇の甚麼をか有ることを知る。」曰く、「祇だ狸奴白牯有ることを知る。」云く、「如何なるか是れ狸奴白牯有ることを知る底の事。」曰く、「東西より來らず、三十二相に従はず。」

問ふ、「如何なるか是れ祖。」曰く、「上有。」云く、「如何なるか是れ佛。」曰く、「相似去。」

④ 四種異類

一には 往來異類と云ふは、今一切の聲言語階級地位捨父逃逝するが如き、盡く皆御つて向上の祖、又異類と爲すことを得たり。又天堂・地獄・餓鬼・畜生・修羅等も皆是れ異類。二には 菩薩同異類と云ふは、先づ自己を明めて然して後御つて生死異類の中に入つて他を攝す。已に涅槃の果を證し、生死の類を捨てず。自力自他にして、一切衆生皆成佛せしめ、末後より成佛せんと願ふ。大權の菩薩若し衆生を化さずんば、己の事、成辨することを得るに由無き所以なり。故に 南泉曰く、「先づ那邊を過ぎて有ることを知り、遮邊に卻來して行李す」と。菩薩は 六度萬行を具す。教に云く、「若し一衆生も未だ度せざる者あらば、吾れ終に正覺を成せず」と。誓願無邊なれば衆生も無邊なり。是の如く行持する故に、

⑥ 六處。處は六根六境の通稱、根境は識を生ずる依處なるが故に處といふ。

⑦ 正四。正因佛性のこと、これ諸法實相の理體にして、此の理體は正しく佛果の因となるが故に正四といふ、今正因を了達すとは、佛果を得るといふことなり。

⑧ 勝解。勝は「すぐる」と訓す、勝れたる解會の意、已到住着をいふ。

⑨ 耕稼。稼は苗稼と熟字し、田畑のこと、耕稼は田畑を耕すこと。

⑩ 灼然。分明なる貌。

⑪ 類。凡類の意。

⑫ 冥々。昏蔽なり。

⑬ 朦々。明かならざること。

⑭ 四種異類。此の四種の自在な有せざる者は、本分の納僧と稱することを得ず、四種とは、菩薩同異類、沙門異類、

宗門異類、往來異類。

⑮ 往來異類。學者が、一切の聲言語より自己の地位階級、

父母をも盡く放捨して只だ道を求めて、天堂地獄餓鬼等の異類に往きて問答往來するをいふ。

⑯ 菩薩同異類。先づ自己の心地を明め、而して後却つて他の異類中行つて衆生を教化して他をして涅槃を證せしむる菩薩利他の行をいふなり。

⑰ 大權。權は方便の義、種々の方便を以て衆生を接化するをいふ、大は尊稱。

⑱ 成就。成就といふほどの意なり。

⑲ 南泉曰く云々。此れ傳燈には見えず、宏智錄第一に出づ。遮邊。遮は這に通ず。「此方の義」

⑳ 行李。李は履に通ず、行李は往來の意。

菩薩同異類と名づく。三には沙門異類と云ふは、先づ自分の事あることを知り了つて、今時の一切凡聖因果功行を喪盡して、始めて就體一般なることを得るを、名づけて獨立底の人と爲す、亦沙門稱斷の事と名づく。始めて表裏情忘じ、三世の事盡くことを得。遺漏なきことを得て、佛邊の事と名づくることを得たり。亦一手天地を指すと云ひ、亦大沙門を具すと云ふ。沙門稱斷邊の事を轉卻して諸聖の報位に入らざるを、始めて名づけて沙門の行と爲すことを得。亦沙門の轉身と云ひ、亦披毛戴角と云ひ、亦喚んで水牯牛と作す。恁麼の時節始めて異類に入ることを得るも、亦色類邊の事と云ふ。所以に古人「頭の長さ三尺、頸の短さ二寸と道ふは、祇だ是れ這箇の道理なり。別に會することを得ざれ」と。四には宗門中の異類と云ふは、南泉の曰ふが如き、智不到の處、切に忌む道著すること。道著すれば頭角生ず。喚んで如如と作すも早く是れ變せり。直に須らく異類中に向つて行いて、異類中の事を道取すべし。洞山曰く、「此の事直に須らく妙會すべし。事は其の妙にあり、體は妙處に在り」と。余自ら道ふ、「此の事直に須らく一位を處にして的無かるべし。觀面兼帶して始め

①の六度。六波羅密のこと、即ち布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。萬行は一切の善行と云ふこと、此の六度は一切の善行の根本となるが故に、開けば一切萬行となり、合すれば六度に攝す、故に六度萬行といふ。
②の教に云く云々。悲華經第八大悲菩薩の語。
③正覺。邪を離るゝを正といひ、妄に背くを覺といふ、即ち妄を斷盡したる妙覺の佛果を稱するなり。
④今時。那邊に對す、這邊といふも同じ、現象差別界のこと。
⑤就體一般。就體は「體に就く」と訓み、本體に合するをいふ。一般は一つの意、今體用一致をいふなり。
⑥稱斷。名稱斷滅の意。
⑦如々。常住不變の義、如は不變不異の義、世に如如は不動の形容詞なり。
⑧作家語。伶俐なる人の語の意。
⑨木に逢ふては云々。塵化自在なるをいふなり。
⑩囑々は叮嚀付屬の義。
⑪觸淨。觸は淨に對し、淨は觸に對していふ、淨穢といふに同じ。
⑫非時。非時食のこと。

て得ん。是の如きことを、作家語は偏にあらず正にあらず、有にあらず無にあらず、呼んで異類中此の事を處にすと爲す。直に須らく作家身を横へて、木に逢ふては木に著き、竹に逢ふては竹に著くべし。須らく觸犯を護すべし。囑囑囑囑。

(人有り余に問ふ、「如何なるか是れ異。」曰く、「我れ若し汝に向つて道はば、驢年にも異を得んや否や。所以に人有り、南泉に問ふ、「百年の後甚麼の處に向つつか去る。」泉曰く、「山下檀越の家に一頭の水牯牛と作り去らん。」云く、「某甲和尚に隨つて去り得んや否や。」泉曰く、「爾若し我れに隨はゞ一莖草を含み來れ」と。余曰く、「此の水牯牛は沙門の水牯牛に同せざれ。直に須らく子細にして始めて得べし。時候に迷はざれ。」)

問ふ、「如何なるか是れ往來異類。」余曰く、「未だ自己有ることを知らず。」又曰く、「一切言語聲色是非總て是れ往來異類なり。」云く、「如何なるか是れ同中の異類。」余曰く、「其の身を擇ばず。」云く、「如何なるか是れ披毛戴角。」余曰く、「觸淨を立せず、又非時觸に答へば即ち觸淨に遇ふては即ち淨。」如何なるか宗門中の異類。」余曰く、「頭を要せば則ち斫り將ち去れ。」

(洞山先師因に僧沙門の行を問ふ、先師答へて曰く、「頭の短さ三尺、頸の短さ二寸」と。又余に問ふ、

「此の意如何」と。余曰く、「勝句妙句。」僧云く、「什麼を喚んでか勝句妙句と作す。」余曰く、「勝句妙句に三種あり、一には諸佛出世して四十九年の施設方便、^①十二分教、百千の三昧、妙門、箇箇穿究するに、盡く是れ勝句妙句なり。此れは是れ出世邊の説。二には凡より聖に入り、自己に^②洞達して佛と異なるなく、遺漏無きことを得て、始めて通身なることを得て、始めて喚んで一塵一念^③十方婆伽梵一路涅槃門と作す。恁麼の時節に到つて正位に處せず。其の身を擇ばず、卻つて異類中に入つて披毛戴角して異念なし。故に云ふ、「一切の物類^④比況すること得ざれ、諸佛諸祖^⑤計校成せず」と。所以に古人道く、「沙門の語は尺寸の語をも人に與ふることを得ざれ」と。故に喚んで勝句妙句となす。此れは是れ色類邊の語。三には一切所有底の物、比すること得ざるを始めて呼んで勝句妙句となす。所以に古人道く、「千般も比すること得ず、萬物も況すること成らず、智者も知ること能はず、上根も亦識らず」と。亦曰く、「來本相似なし、故に勝句妙句なり、勝句妙句とは天上人間測度し得ざる底の事なり。故に古人曰く、「喚んで始終を超ゆるの句となす。此を借つて語類邊の説行となす。」

①施設。施は施行、設は設置等と熟字し、事を作爲するの意、これより方便と同義に用ひらる。
 ②十二分教。新譯に十二分經と云ふ、佛陀の所説を十二種に分類せるものなり、一に、修多羅、二に、祇夜、三に、和伽羅、四に、伽陀、五に、尼陀那、六に、優陀那、七に、伊帝目多、八に、闍多那、九に、毘佛略、十に、阿浮達磨、十一に、阿婆陀那、十二に、優波提舍なり。
 ③三昧。梵語、三摩提、三摩地等に作る、定、等持、正受、止息、寂靜等と譯す、心を一境に住せしめて不動ならしめ、心を正しうして妄念を離るゝを云ふ。
 ④洞達。分明に通達するの義。
 ⑤十方婆伽梵一路涅槃門。婆伽梵は梵語にして世尊又は佛と譯す、涅槃は梵語にして寂滅無爲と譯す、迷妄を破して證得する不生不滅の眞理をいふ。諸佛の妙法は法界に充滿す、然るに衆生此の法に迷ふが故に、生死に入り此の法を悟れば、不生不滅の涅槃界に入る、此の佛の妙法こそ生死涅槃に入るの門なり。
 ⑥比況。比較に同じ。
 ⑦計校。計ははかる、校はくらぶる、種々の思慮分別をつひやす。
 ⑧先師。洞山を指す。
 ⑨給。供給の意。
 ⑩業。身口意より生ずる行爲を

稠布襦問ふ、「如何なるか是れ色類。」余曰く、「披毛戴角。」云く、「如何なるか是れ語類。」余曰く、「曹山只だ一雙の眉あり。」又問ふ、「如何なるか是れ水牯牛。」余曰く、「朦朦睡睡。」云く、「此の意如何。」余曰く、「天地有ることを知らず。」稠又舉す、「上座、雲居に問ふ、先師言へること有り、少より一箇の兒子に養はる、頭の長さ三尺、頸の短さ二寸と、如何なるか是れ少より養ひ得る底の兒子。」居曰く、「日に給して忘じ難し。」云く、「如何なるか是れ頭の長さ三尺。」居曰く、「奈何ともせず。」云く、「如何なるか是れ頸の短さ二寸。」居曰く、「今に至つて還つて奈何にして得てんや否や。」云く、「如何なるか是れ日に給して忘じ難き。」居曰く、「常在則ち是。」云く、「如何なるか是れ常在。」居曰く、「違背せざれば則ち是。」云く、「如何なるか是れ奈何ともせず。」居曰く、「恁麼の時に到つて甚麼人か奈何にして得てん。」云く、「今に至つて還つて奈何せん、此の意如何。」居曰く、「三世の諸佛も奈何ともせずと云ふことを。」余に問ふ、「如何なるか是れ頭の長さ三尺、頸の短さ二寸。」余曰く、「是れ從來底の事にあらず。」云く、「如何なるか是れ從來底の事。」余曰く、「喚んで甚麼とか作さん。」問ふ、「沙門箇の甚麼の行をか行す。」余曰く、

境に住せしめて不動ならしめ、心を正しうして妄念を離るゝを云ふ。
 ②洞達。分明に通達するの義。
 ③十方婆伽梵一路涅槃門。婆伽梵は梵語にして世尊又は佛と譯す、涅槃は梵語にして寂滅無爲と譯す、迷妄を破して證得する不生不滅の眞理をいふ。諸佛の妙法は法界に充滿す、然るに衆生此の法に迷ふが故に、生死に入り此の法を悟れば、不生不滅の涅槃界に入る、此の佛の妙法こそ生死涅槃に入るの門なり。
 ⑥比況。比較に同じ。
 ⑦計校。計ははかる、校はくらぶる、種々の思慮分別をつひやす。
 ⑧先師。洞山を指す。
 ⑨給。供給の意。
 ⑩業。身口意より生ずる行爲を

「畜生の行。」云く、「如何なるか是れ畜生の行。」余曰く、「披毛戴角。」云く、「如何なるか是れ沙門。」余曰く、「物物間斷せず。」云く、「不間斷底の事如何。」

云ふ、業には善惡あり、今は惡業のことをいふ。

余曰く、「始めて行を得たり。」云く、「如何なるか是れ披毛戴角底の人。」余曰く、「業を懼れず。」云く、「甚麼と爲てか恁麼地に到る。」余曰く、「若し業を懼れざれば、甚麼の處にか到らざらん。問ふ、「凡より聖に入ることは則ち問はず、聖より凡に入る時如何。」余曰く、「水牯牛。」云く、「如何なるか是れ水牯牛。」余曰く、「朦朦瞳瞳。」云く、「此の意如何。」余曰く、「但だ水草を念じて餘は所知無し。」云く、「箇の甚麼邊の事をか成得ず。」余曰く、「祇だ是れ箇の草に逢ふては草を喫し、水に逢ふては水を飲む。」

(又曰く、「這箇の語力有り。力有ることを知らんと欲せば此の人沙門邊の事を執らざれ。亦諸聖報位に入らざれ。便ち是れ異類に入れ、是の異類は是れ披毛戴角なり。喚んで沙門の行と作し、亦喚んで沙門行李の所と作し、亦喚んで頭の長さ三尺、頸の短さ二寸と作す。此の意を知らんと欲せば沙門の行に到る時、尺寸を將つて親疎を分つとを欲せざれ。張三李四に説くことを得ざれ。○又頭の長さ三尺とは、只だ小より大に至つて今日功成することを得。恁麼の時に到るを得て、喚んで勝句妙句となす。頸の短さ二寸とは、是れ沙門の位に坐せず、亦諸聖の報位に處せず。故に頸の短さ二寸と爲す。恁麼の時稱と不稱とを。説著することを得ざれ。所以に道ふ、「尺寸を將ち來つて這裏に向つて思量せざれ」と。然も此の如くなりとも雖も、猶ほ是れ類邊の事。須らく知るべし、異類中の事

有ることを。道ふことを見すや、「智不到の處、説著することを得ざれ」

と。説著すれば即ち頭角生すと。喚んで如如と作す、早く是れ變せり、須らく異類中に向つて行くべし。喚んで一位を虚にすと作す、喚んで靛面兼帯と作すも、全く的無し。云く、「如何なるか是れ類。」余曰く、「披毛戴角。」云く、「如何なるか是れ異。」余曰く、「作麼作麼。」云く、「如何なるか是れ行。」余曰く、「頭を要せば則ち斫り將ち去れ」と。

(云く、「只だ異類の如き、箇の甚麼邊の事をか成得ず。」余曰く、「此の事に二種の異類あり。一には沙門の異類。二には事上の異類。事上の異類とは、狸奴白牯是れなり。沙門の異類とは、觸處自由を得、始めて不變異なることを得て、那箇に同じからず。先師余に問ふ、「甚麼の處にか去る。」余曰く、「不變異の處に去る」と。此の不變異の事に二種あり。一には人々盡く自分の事有り。二には有ることを知る底の人、一切の聲色是非を捨てず。一切の物物上に於て滯らざるを呼んで、一切處不易と爲す。亦喚んで披毛戴角と作し、亦喚んで泥に入り水に入ると作し、亦喚

①説著。著は語を強むる助字、單に説くといふに同じ。

②觸處。到る處といふに同じ。

③澆。人に同じ。

④諸聖。聖とは佛祖を指す、三世歴代の佛祖を指して諸聖といふなり。

⑤八要玄機。玄々微妙にして言途を以て測るべからざる機川を云ふ。

⑥大過三三。衆に曰く、「大過は獲獲む、往く攸有るに利し。」象傳に曰く、「澤木を滅するは大過なり、君子以て獨立して懼れず世を避れて固なし。」

⑦中學三三。衆に曰く、「中學は豚魚吉なり、大川を渉るに利し、真に利し。衆傳に曰く、「中學は柔内に在つて剛中を得、説びて巽ふは孚なり、乃ち邪を化す、豚魚吉とは信豚魚に及ぶなり、大川を渉るに利

んで行李底の 漢と作す。」

云く、「如何なるか是れ泥に入り水に入る。師曰く、「不變異。」云く、「身を轉するや否や。」余曰く、「身を轉せず。」云く、「此の人屋裏の事如何。」余曰く、「諸聖も測ることを得ず。」云く、「甚麼としてか測ることを得ざる。」余曰く、「是れ伊れ諸聖に同じからず。」云く、「此れ猶ほ是れ類邊の事、還つて向上の事有りや否や。」余曰く、「有り。」云く、「如何なるか是れ向上の事。」余曰く、「汝に向つて道は、恐らくは類邊に落ち去らん」と。

八要玄機

回互、不回互、宛轉、傍參、樞機、密用、正按、傍提、

五位旨訣

正中來は 太過なり。全身獨露、萬法の根源、咎無く譽無し。偏中至は 中孚なり。物に随つて礙へられず。木舟中虛、虛通自在。正中偏は 巽なり。虚空破片、處々圓通、根塵、寂爾、偏中正は 兌なり。水月鏡像、本生滅無し、豈に蹤跡有らんや。兼中到は 重離なり。正は必ず虚ならず、偏は必ず實ならず。背無く向無し。又曰く、「心機泯し、色空

しとは木に乗りて舟楫なり、中孚以て貞に利し、乃ち天に應ず。」

②巽三。象に曰く、「巽は小し亨る、往く攸あるに利し、大人を見るに利し。」象傳に曰く、「重巽以て命を申べ、剛中正に巽ふて志行はる、柔皆剛に順ふ、是を以て小し亨、往く攸あるに利し、大人を見るに利し。」

①寂爾。靜かなる貌。

②兌三。象に曰く、「兌は亨る、貞に利し。」象傳に曰く、「兌は説ぶなり、中を剛うし、外を柔かにす、説びて以て貞に利し、是を以て天に順ふ、而も人に應ず云々。」

③重離三三。象辭に云く、「離は貞に利し、亨る、牝牛を畜ふに吉。」象傳に曰く、「離は麗なり、日月は天に麗き、百穀草木は土に麗き、重明にして以

忘じ、更に覆藏無し、全體露現是を正中偏と曰ふ。山は是れ山、水は是

れ水、人の安名無し、物の比倫に堪へたる無し、是を偏中正と曰ふ。⑤

淨裸赤洒洒、面目堂堂、盡天盡地、獨尊無二、是を正中來と曰ふ。

宛も 寰中の天子の如し。禹湯堯舜の令を借らず、眼に見、耳に聞く。

終に他の力を借らず。耳の聲中に入らず、聲の耳根を塞がらず、裏頭才に

身を轉じ、塵中名を帯せず、是を兼中至と曰ふ。是れ心にあらす、是れ境

にあらす、是れ事にあらす、是れ理にあらす、從來名狀を離れ、①天真

にして性相を忘す、是を兼中到と曰ふ。」

て正に麗く、以て天下を化育す。

⑤淨裸々赤洒洒。赤體寸衣を纏けず、ありのまゝの意。

⑥堂堂。盛なり、明顯なり。

⑦寰中。寰は五畿内をいふ、即ち天子の治めらるゝ土地のこと。

⑧天真。天然自然にして人為に汚らざるをいふ。

國譯撫州曹山本寂禪師語錄卷下 終

曹山語錄序

古人有言曰：意不在言，又曰：得意忘言。意者旨也，言者標也。旨乎不易得之，標乎不難得之。所以假易得之標，得難得之旨，苟得其旨，忘標可也。若失其旨，標其安用？故古人爲唯執其標者，謂之葛藤也。又謂之敲門瓦子也。雲州禪者契宜默得，荷玉大師語於郭正中之五宗錄，又得慧霞、廣暉、晦然等所著陳編校讎同異辨驗真譌，題曰曹山語錄。附向者所刊洞山語錄，以廣其傳。大哉志于其自隗始，然予未嘗知之。果其得意者乎？抑又執言者乎？將以爲敲門瓦子者乎？請質之禪者，是歲寬保辛酉之春，鷹峯源光主人請詢和南拜稽首譔焉。

曹洞語錄序

荆山之璞非逢明世與和氏則空藏荆石之中燦然連城之美豈得顯乎哉玉寶不乏明世與和氏實難相逢而已新豐荷玉之語錄初先是往盛行于世魚目淆珠純金在沙宜默上座傷其弊深矣就郭氏五宗錄暨群籍之中取其精舍其麤錄終成矣余與上座方外之交甚厚俾寄余讀之余曰上座也其豐玉之和氏乎雖有和氏復非逢明世則何以能至於斯哉於戲懿哉吾大東文明之徵至於有今日之美孔門之徒豈何敢不美其美喜乎哉新豐之錄彫粹已成荷玉之錄今亦成不佞書其所以美而喜俾大方之人知上座之正法眼也

元文庚申八月望

郡山柳澤里恭公美書于綠竹書室南窓

重集曹山元證大師語錄自序

語錄者何荷玉大師元證之所說也其所說也存乎古存乎今自其存乎今者而校其存乎古者則古者可也今者未可也若其取之抑取古而可乎將取今而可乎寧並取今古而可乎嗚呼何取何舍不如校讎今古而取其可也大凡稱大師語錄而行于世者率屬譌誤如夫作上堂示徒者或如四禁頌加助辭以作上堂曰者其所譌誤可以知矣洞曹語錄之於支那郭黎眉所輯錄也是亦今而古則未也雖然非全璧光潤亦非燕石之屬也於是不佞拔出荷玉之教於五宗錄中取其所取舍其所舍或陳編以補其闕語錄成矣於戲古人垂教後世負其志者爲之前焉微垂其教居後之世負其志者安得前焉不佞所以欲撰撫古人之機語校正古今之真譌廣傳其教而歷歷也敢請居後之世負其志者爲之前焉爲之入焉爲之體焉若其如此可謂吾與祖師同乘一轡泛泛乎游泳於深池之中矣豈不愉快乎

元文五年庚申之冬

大日本國沙門宜默玄契和南拜撰

撫州曹山本寂禪師語錄卷上

無地地主人郭凝之編集

師諱本寂，泉州莆田黃氏子，少業儒，年十九往福州靈石出家，二十五登戒，尋謁洞山，洞山問：「閣黎名甚麼？」師曰：「本寂。」山曰：「向上更道。」師曰：「不道。」山曰：「爲什麼？」不道。師曰：「不名本寂。」洞山深器之。《僧寶傳》師名耽章，燈錄所載，遂仍之。自此入室，盤桓數載，乃辭去。洞山遂密授洞上宗旨，復問云：「子向甚麼處去？」師曰：「不變異處去。」洞山云：「不變異處豈有去耶？」師曰：「去亦不變異。」遂往曹谿禮祖塔，回吉水，衆嚮師名，乃請開法。師志慕六祖，遂名山爲曹，尋值賊亂，乃之宜黃，有信士王若一，捨何王觀，請師住持，師更何王爲荷玉，由是法席大興，學者雲萃。洞山之宗，至師爲盛。師示衆曰：「凡情聖見，是金鎖玄路，直須回互。夫取正命食者，須具三種墮：一者披毛戴角，二者不斷聲色，三者不受食。時稠布祿問曰：「披毛戴角，是甚麼墮？」師曰：「是類墮。」《古本作沙門墮》云：「不斷聲色，是甚麼墮？」師曰：「是隨墮。」《古本作隨類墮》云：「不受食，是甚麼墮？」師曰：「是尊貴墮。」《五宗錄》雖載此三墮語，非全文，且傳會後人語，故取問答，餘刪于此。

師因僧問五位君臣旨訣，師曰：「正位卽空界，本來無物，偏位卽色界，有萬象形，正中偏者背理就事，偏中正者舍事入理，兼帶者冥應衆緣，不墮諸有，非染非淨，非正非偏，故曰虛玄大道，無着真宗，從上先德，推此一位，最妙最玄，當詳審辯明，君爲正位，臣爲偏位，臣向君是偏中正，君

視臣是正中偏。君臣道合是兼帶語。僧問：如何是君？師曰：妙德尊寰宇，高明朗太虛。云：如何是臣？師曰：靈機弘聖道，真智利群生。云：如何是君？師曰：不墮諸異趣，凝情望聖容。云：如何是君？師曰：妙容雖不動，光燭本無偏。云：如何是君？師曰：道合師曰：混然無內外，和融上下平。師又曰：以君臣偏正言者，不欲犯中，故臣稱君，不敢斥言是也。此吾法宗要，乃作偈曰：學者先須識，自宗莫將真際雜。頑空妙明體盡知，傷觸力在逢緣不借中。出語直教燒不著，潛行須與古人同。無身有事超岐路，無事無身落始終。復作五相。○偈曰：白衣須拜相，此事不爲奇。積代簪纓者，休言落魄時。○偈曰：子時當正位，明正在君臣。未離兜率界，烏雞雪上行。○偈曰：欲裏寒冰結，楊花九月飛。泥牛吼水面，木馬逐風嘶。○偈曰：王宮初降日，玉兔不能離。未得無功旨，人天何太遲。○偈曰：渾然藏理事，朕兆卒難明。威音王未曉，彌勒豈惺惺。

師行腳時，問烏石觀禪師：如何是毘盧師法身主？烏石曰：我若向爾道，卽別有也。師舉似洞山，洞山曰：好箇話頭，祇缺進語，何不問爲甚麼？不道。師卻去進前語，烏石曰：若言我不道，卽癡卻我口。若言我道，卽塞卻我舌。師歸舉似洞山，洞山深肯之。

雲門問：如何是沙門行？師曰：喫常住苗稼者是。雲門云：便怎麼去時？如何？師曰：爾還畜得麼？雲門云：畜得。師曰：爾作麼生畜？雲門云：著衣喫飯，有甚麼難？師曰：何不道披毛戴角？雲門便禮拜。師示衆曰：諸方盡把格則，何不與他道一轉語，令他不疑去？雲門在衆出問：密密處爲甚麼？不知有？師曰：只爲密密，所以不知有。雪竇別云：達磨來也。雲門云：此人如何親近？師曰：莫向密密處親近。雲門云：不向密密處時，如何？師云：始解親近。雲門云：諾諾。妙喜云：濁油更著黑燈

心。

雲門問：不改易底人來，師還接否？師曰：曹山無恁麼閑工夫。

師因米和尚至，未相見，米遂坐卻禪牀，師更不出，米便去。主事遂問和尚：禪牀爲什麼被別人坐卻？師曰：去後卻還來，米果回與師相見。

智炬到參，問師云：古人提持那邊人，學人如何體悉？師曰：退步就已，萬不失一。炬於言下頓忘玄解。

師問金峯志曰：作甚麼來？金峯云：蓋屋來。師曰：了也未？金峯云：這邊則了。師曰：那邊事作麼生？金峯云：候下工日，白和尚。師曰：如是如是。

僧清銳問某甲孤貧，請師拯濟。師曰：銳聞黎近前來，銳近前。師曰：泉州白家三盞酒，喫後猶道未沾唇。玄覺云：甚麼處是與他酒喫？

鏡清問清虛之理，畢竟無身時如何？師曰：理卽如此，事作麼生？鏡清云：如理如事。師曰：設曹山一人卽得，爭奈諸聖眼何？鏡清云：若無諸聖眼，爭麼得箇不恁麼？師曰：官不容針，私通車馬。大

鴻喆云：曹山雖然善能切磋琢磨，其奈鏡清玉本無瑕，要會麼？不經敏手，終成廢器。師問德上座菩薩在定，聞香象渡河，出甚麼經？僧云：出涅槃經。師曰：定前開定後開？僧云：和尚流也。師曰：道也大殺道，始道得一半。僧云：和尚如何？師曰：灘下接取。

紙衣道者來參，師問：莫是紙衣道者否？云：不敢。師曰：如何是紙衣下事？道者云：一裘纔挂體，萬法悉皆如。師曰：如何是紙衣下用道者？近前應諾，便立脫。師曰：汝祇解恁麼去，何不解恁麼來。

道者忽開眼問云：一靈真性，不假胞胎時如何？師曰：未是妙道者云：如何是妙？師曰：不借借道者珍重，便化。師示頌曰：覺性圓明無相身，莫將知見妄疎親。念異便於玄體昧，心差不與道爲隣。情分萬法沈前境，識鑿多端喪本真。如是句中全曉會，了然無事昔時人。

僧舉陸亘大夫問南泉，姓甚麼？南泉曰：姓王。亘云：王還有眷屬也無？南泉曰：四臣不昧。亘云：王居何位？南泉曰：玉殿苦生。問師：玉殿苦生意旨如何？師曰：不居正位。僧云：八方來朝時如何？師曰：他不受禮。僧云：何用來朝？師曰：達則斬。僧云：達是臣分上，未審君位如何？師曰：樞密不得旨。僧云：怎麼則變理之功，全歸臣相也？師曰：爾還知君意麼？僧云：外方不敢論量。師曰：如是如是。僧問：學人通身是病，請師醫。師曰：不醫。僧云：爲甚麼不醫？師曰：教汝求生不得，求死不得。

僧問：師，古人曰：吾有大病，非世所醫，未審是甚麼病？師曰：攢簇不得底病。僧云：一切衆生還有此病也無？師曰：人人盡有。僧云：和尚還有此病也無？師曰：正覓起處不得。僧云：一切衆生爲甚麼不病？師曰：一切衆生若病，卽非衆生。僧云：未審諸佛還有此病也無？師曰：有。僧云：既有爲甚麼不病？師曰：爲伊惺惺。

僧問：沙門豈不是具大慈悲底人？師曰：是。僧云：忽遇六賊來時如何？師曰：亦須具大慈悲。僧云：如何具大慈悲？師曰：一劍揮盡。僧云：盡後如何？師曰：始得和同。

僧問：師，眉與目還相識也無？師曰：不相識。僧云：爲甚麼不相識？師曰：爲同在一處。僧云：怎麼則不分也？師曰：眉且不是目，目且不是眉。僧云：如何是目？師曰：端的去。僧云：如何是眉？師曰：曹山卻疑。僧云：和尚爲什麼卻疑？師曰：若不疑，卽端的去也。

僧問：五位對賓時如何？師曰：汝卽今問那箇位？僧云：某甲從偏位中來，請師向正位中接。師曰：不接。僧云：爲甚麼不接？師曰：恐落偏位中去。師卻問僧：祇如不接，是對賓是不對賓？僧云：早是對賓了也。師曰：如是如是。

僧問：萬法從何而生？師曰：從顛倒生。僧云：不顛倒時，萬法何在？師曰：在。僧云：在甚麼處？師曰：顛倒作麼。

僧問：不萌之草，爲甚麼能藏香象？師曰：闍黎幸是作家，又問曹山作麼。

僧問：三界擾擾，六趣昏昏，如何辨色？師曰：不辨色。僧云：爲甚麼不辨色？師曰：若辨色卽昏也。

師聞鐘聲，乃曰：阿哪阿哪。僧問：和尚作甚麼？師曰：打著我心。僧無對。（五祖戒代云：作賊人心虛。）

師問：維那，甚處來？云：牽醋槽去來。師曰：或到險處，又作麼生牽？維那無對。雲居代云：正好著力。疎山代云：切須放卻始得。

師一日入僧堂，向火。有僧云：今日好寒。師曰：須知有不寒者。僧云：誰是不寒者？師笑，火示之。僧云：莫道無人好。師拋下火。僧云：某甲到這裏，卻不會。師曰：日照寒潭，明更明。

僧問：不與萬法爲侶者，是甚麼人？師曰：汝道洪州城裏，如許多人，甚麼處去。

僧問：如何是無乃劍？師曰：非淬鍊所成。僧云：用者如何？師曰：逢者皆喪。僧云：不逢者如何？師曰：亦須頭落。僧云：逢者皆喪，則固是不逢者爲甚麼頭落？師曰：不見道：能盡一切。僧云：盡後如何？師曰：方知有此劍。

僧問於相何真師曰卽相卽真僧云當何顯示師提起托子。

僧問幻本何真師曰幻本元真法眼別云幻本不真僧云當幻何顯師曰卽幻卽顯法眼別云幻卽無當僧云怎麼則始終不離于幻也師曰覓幻相不可得。

僧問卽心卽佛卽不問如何是非心非佛師云兔角不用無牛角不用有。

問如何是常在底人師曰恰遇曹山暫出云如何是常不在底人師曰難得。

僧問擬豈不是類師曰直是不擬亦是類僧云如何是異師曰莫不識痛痒。

人問古人曰人人盡有弟子在塵蒙還有也無師曰過手來乃點指曰一二三四五足。

僧問魯祖面壁用表何事師以手掩耳。

僧問承古有言未有一人倒地不因地而起如何是倒師曰肯卽是僧云如何是起師曰起也。

僧問子歸就父爲甚麼父全不顧師曰理合如是僧云父子之恩何在師曰始成父子之恩僧

云如何是父子之恩師曰刀斧斫不開。

問靈衣不挂時如何師曰曹山孝滿云孝滿後如何師曰曹山好顛酒。

問承教有言大海不宿死屍如何是海師云包含萬有僧云爲什麼不宿死屍師曰絕氣者不

著僧云既是包含萬有爲甚麼絕氣者不著師曰萬有非其功絕氣有其德僧云向上還有事

也無師云道有道無卽得爭奈龍王按劍何。

問具何知解善能對衆問難師曰不呈句僧云問難箇甚麼師曰刀斧斫不入僧云能怎麼問

難還更有不肯者也無師曰有僧云是什麼人師曰曹山。

僧問世間甚麼物最貴師曰死貓兒頭最貴僧云爲甚麼死貓兒頭最貴師曰無人著價。

僧問無言如何顯師曰莫向這裏顯僧云向甚麼處顯師曰昨夜牀頭失卻三文錢。

僧問日未出時如何師曰曹山也曾怎麼來僧云日出後如何師曰猶較曹山半月程。

師問僧作甚麼僧云掃地師曰佛前掃佛後掃僧云前後一時掃師曰與曹山過報鞋來五祖

戒代僧語云和尚是何心行。

僧問抱璞投師請師雕琢師曰不雕琢僧云爲甚麼不雕琢師曰須知曹山好手。

僧問如何是曹山眷屬師曰白髮連頭戴頂上一枝花。

僧問古德道盡大地惟有此人未審是甚麼人師曰不可有第二月也僧云如何是第二月師

曰也要老兄定當僧云作麼生是第一月師曰險。

僧問學人十二時中如何保任師曰如經蠱毒之鄉水不得沾著一滴。

僧問如何是法身主師曰謂秦無人僧云這箇莫便是否師曰斬。

僧問親何道伴卽得常聞於未聞師曰同共一被蓋僧云此猶是和尙得聞如何是常聞于未

聞師曰不同于木石僧云何者在先何者在後師曰不見道常聞于未聞。

僧問國內按劍者是誰師曰曹山法燈別云汝不是怎麼人僧云擬殺何人師曰但有一切

總殺僧云忽逢本父母又作麼生師曰揀甚麼僧云爭奈自己何師曰誰奈我何僧云爲什麼

不殺師曰無下手處。

僧問家貧遭劫時如何師曰不能盡底去僧云爲甚麼不能盡底去師曰賊是家親。

問、一牛飲水、五馬不嘶、時如何、師曰、曹山解忌口、又別曰、曹山孝滿、
僧問、常在生死海中沉沒者、是甚麼人、師曰、第二月、僧云、還求出離也、無、師曰、也求出離、只是
無路、僧云、出離什麼人、接得伊、師曰、擔鐵枷者、

僧問、雪覆千山、爲甚麼孤峰不白、師曰、須知有異中異、僧云、如何是異中異、師曰、不墮諸山色、
僧舉、藥山問僧、年多少、云、七十二、山曰、是七十二麼、云、是、山便打、此意如何、師曰、前箭猶似可、
後箭射入深、僧云、如何免得此棒、師曰、王勅既行、諸侯避道、

僧問、香嚴、如何是道、香嚴曰、枯木裏龍吟、僧云、如何是道中人、香嚴曰、獨體裏眼睛、僧不領、乃
問、石霜、如何是枯木裏龍吟、石霜曰、猶帶喜在、僧云、如何是獨體裏眼睛、石霜曰、猶帶識在、又
不領、乃舉似師、師曰、石霜老聲聞作這箇見解、因示頌曰、枯木龍吟真見道、獨體無識眼初明、
喜識盡時消息盡、當人那辨濁中清、僧遂又問師、如何是枯木裏龍吟、師曰、血脈不斷、云、如何
是獨體裏眼睛、師曰、乾不盡、云、未審還有得聞者麼、師曰、盡大地人、未有一人不聞、云、未審枯
木裏龍吟、是何章句、師曰、不知是何章句、聞者皆喪、

問、如何是佛法大意、師曰、填溝塞壑、

僧問、如何是師子、師曰、衆獸近不得、僧云、如何是師子兒、師曰、能吞父母者、僧云、既是衆獸近
不得、爲甚麼卻被兒吞、師曰、豈不見道、子若哮吼、祖父俱盡、僧云、盡後如何、師曰、全身歸父、僧
云、未審祖盡時、父歸何所、師曰、所亦盡、僧云、前來爲甚道、全身歸父、師曰、譬如王子能成一國
事、又曰、闍黎此事不得孤滯、直須枯木上更撒些子花、

問、纔有是非紛然、失心時如何、師曰、斬斬、

師讀杜順傳、大士所作法身偈、乃曰、我意不欲與麼道門弟子請別作之、既作偈、又註釋之、其
詞曰、渠本不是我、非我、我本不是渠、非渠、渠無我即死、仰汝取活、我無渠即餘、不別有、渠
如我是佛、要且不是佛、我如渠即驢、二俱不立、不食空王俸、若遇御飯、直須吐卻、何假雁
傳書、不通信、我說橫身唱、爲信喝、君看背上毛、不與爾相似、乍如謠白雪、將謂是白雪、猶
恐是巴歌、傳此句無註、

僧問、明月當空時如何、師曰、猶是塔下漢、僧云、請師接上塔、師曰、月落後來相見、趙州語錄同
此、今並存之、

師垂語曰、有一人、向萬丈崖頭、騰身直下、此是甚麼人、衆無對、道延出云、不存、師曰、不存箇甚
麼、延云、始得撲不碎、師深肯之、

僧舉西園一日自燒浴、次僧問、何不使沙彌、西園撫掌三下問師、師曰、一等是拍手撫掌、就中
西園奇怪、俱賤一指頭禪、蓋爲承當處不諦當、僧卻問師、西園撫掌、豈不是奴兒婢子邊事、師
曰、是、云、向上更有事也、無、師曰、有、云、如何是向上事、師叱曰、這奴兒婢子、

南州帥南平鍾王、雅聞師有道、遣禮致之、不赴、但書偈付使者曰、摧殘枯木倚寒林、幾度逢春
不變心、樵客見之猶不採、郢人何事苦搜尋、鍾氏請不起、但寫大梅山居頌答之、
師作四禁偈曰、莫行心處路、不挂本來衣、何須正恁麼、切忌未生時、

示學人偈曰、從緣薦得相應疾、就體消停得力遲、瞥起本來無處所、吾師暫說不思議、

示衆曰：僧家在此等衣線下，理須會通向上事，莫作等閒。若也承當處分明，卽轉他諸聖，向自己背後，方得自由。若也轉不得，直饒學得十成，卻須向他背後叉手，說甚麼大話。若轉得自己，則一切麤重境來，皆作得主宰。假如泥裏倒地，亦作得主宰。如有僧問藥山曰：三乘教中還有祖意也無？答曰：有。僧云：既有達磨，又來作麼？藥山曰：只爲有所以來，豈非作得主宰？轉得歸自己乎？如經云：大通智勝佛，十劫坐道場，佛法不現前，不得成佛道。言劫者，滯也。謂之十成，亦云。斷滲漏也。只是十道頭絕矣，不忘大果。故云：守住耽著，名爲取次承當，不分貴賤。我常見叢林好論一般兩般，還能成立得事麼？此等但是說向去事，路布汝不見。南泉曰：饒汝十成，猶較王老師一線道也。大難事到此，直須仔細始得明白自在。不論天堂地獄，餓鬼畜生，但是一切處不移易。元是舊時人，只是不行舊時路。若有忻心還成滯著，若脫得揀甚麼，古德云：只恐不得輪迴。汝道作麼生？只如今人說箇淨潔處，愛說向去事，此病最難治。若是世間麤重事，卻是輕淨潔病爲重。只如佛味祖味，盡爲滯著。先師曰：擬心是犯戒，若也得味，是破齋。且喚什麼作味？只是佛味祖味，纔有忻心，便是犯戒。若也如今說破齋破戒，卽今三羯磨時，早破了也。若是麤重貪嗔癡，雖難斷，卻是輕。若也無爲無事淨潔，此乃重無以加也。祖師出世，亦只爲這箇，亦不獨爲汝。今時莫作等閒，驚奴白牯，修行卻快，不是有禪有道。如汝種種馳求，覓佛覓祖，乃至菩提涅槃，幾時休歇或辨乎？皆是生滅心，所以不如驚奴白牯兀兀無知，不知佛不知祖，乃至菩提涅槃，及以善惡因果，但饑來喫草，渴來飲水，若能恁麼，不愁不成辨，不見道計較不成，是以知有，乃能披毛戴角，牽犁拽耒，得此便宜，始較些子，不見彌勒阿闍及諸妙喜等世界，被他向

上人喚作無慚愧懈怠菩薩，亦曰變易生死，尙恐是小懈怠。在本分事，合作麼生，大須仔細始得。人人有一坐具地，佛出世，他不得，恁麼體會修行，莫趁快利，欲知此事，饒令成佛成祖去，也只這是便墮三塗地獄六道去，也只這是雖然沒用處，要且離他不得，須與他作主宰始得。若作得主宰，卽是不變易。若作主宰不得，便是變易也。不見永嘉云：莽莽蕩蕩招殃禍，問如何是莽莽蕩蕩招殃禍？曰：只這箇總是問云：如何免得？曰：知有卽得，用免作麼？但是菩提涅槃煩惱無明等，總是不免，乃至世間麤重之事，但知有便得不要免，免卽同變易去也。乃至成佛成祖，菩提涅槃，此等殃禍爲不小，因甚麼如此？只爲變易。若不變易，直須觸處自由始得。師於天復辛酉夏夜問知事曰：今日是幾何日月？對云：六月十五。師云：曹山平生行脚到處，祇管九十日爲一夏。明日辰時，吾行腳去，及時焚香宴坐而化。閱世六十二臘，三十七葬，全身於山之西阿，證元證禪師塔曰福圓。

撫州曹山本寂禪師語錄卷上終

撫州曹山本寂禪師語錄卷下

日本沙門 玄契 編次

上堂僧問如何是大闢提人師曰不懼業僧云如何是無明人師曰始終不覺悟僧云此二人誰在前師曰無明者僧云闢提人爲什麼在後師曰向去者僧云恁麼則無明者不從今日去也師曰是僧云既不從今日去無明從何處來師曰光處不敢入僧云豈不是不明不暗師曰是僧云正恁麼時如何師曰不受觸師復曰闢提有多種一類者是殺父殺母出佛身血破和合僧毀壞伽藍此剋定實報受種種苦一類者亦所作如前此則爲殺無明父貪愛母不信有佛法僧可破有伽藍可壞計爲業心所得故墮亦受種種虛妄果報如前升降不同一類者知有自己本來事呼爲父母不因外得無修無證非因非果不因師受不從證行所得不起父見曰殺不起母見曰害卽是一切本分事不取不存故曰殺害縱有纖毫奉重得味不成知有自己事也故曰大闢提以此動撥妙力卽是從上宗乘體會家事承當要截玄道破諸迂曲卽如新豐老人所立示也

忠國師慕喚侍者侍者來立國師低頭侍者立多時出去國師喚侍者如是三度了曰將謂我辜負汝汝卻辜負我百丈舉問趙州國師三喚侍者意作麼生州曰如人暗裏書字字雖不成文彩已彰又後有人舉問師國師三喚侍者意作麼生師曰侍者第二徧回來云某甲不信和

尚喚

南泉曰未具胞胎時還有語也無有人舉問雪峯峯曰道有道無則喫三十棒又問招慶慶曰從他自道又舉問師師曰有云請和尚傍警師曰將什麼物聞云聾者還聞也無師曰聾者若得聞則具耳目云什麼人得聞師曰未具胞胎者

僧問師教云一句能吞百千萬義如何是一句師曰針筍不入
有一座主辭南泉泉問什麼處去對云山下去泉曰第一不得謗王老師對云爭敢謗和尚泉噴水曰多少座主便出去師曰賴也

潯山一日喚院主院主來山曰我喚院主汝來作什麼院主無對師代曰也知和尚不喚某甲又令侍者喚第一座第一座來山曰我喚第一座汝來作什麼師代曰若令侍者喚恐不來
有僧辭藥山歸鄉去藥山問有一人遍身紅爛臥在荆棘之中僧云恁麼則學人不歸去藥山曰但知歸去與爾休糧方問如何是休糧方山曰每日上堂不咬破一粒米也師曰只如古德有云遍身紅爛底人祇是醜陋底人一切人近不得無拈掇處更道臥在荆棘之中只道在如今日用也亦無作拈掇處護持保任邊事時有僧問師遍身紅爛時如何師曰荷負云荷負什麼人師曰勿紅爛到閻黎又問醜陋人與滿身紅爛底人阿那箇是重師曰大醜陋底人重師又舉問僧大保任底人保任箇什麼自代曰終日在背後不曾覩著

俱胝和尚凡有詰問唯舉一指後有童子因外人問和尚說何法要童子亦豎起一指胝聞遂以足踏其指童子負痛號哭而去胝復召之童子回首胝卻豎起指童子忽然領悟胝將順世

謂衆曰：吾得天龍一指頭禪，一生用不盡，言訖而寂。師曰：俱抵承當處，莽鹵只認得一機一境。洞山上堂：道無心合人，人無心合道。欲識箇中意，一老一不老。後僧舉問師：如何是一老師，曰：不扶持。云：如何是一不老，師曰：枯木。

僧問師：維摩默然文殊讚善，未審還稱得維摩意麼？師曰：懶還縛得虛空麼？僧云：恁麼則不稱維摩意也。師曰：他又爭肯？僧云：畢竟有何所歸？師曰：若有所歸，即同彼二公也。僧云：和尚又作麼生？師曰：待懶患維摩病始得。

洞山到稗樹，稗問曰：來作什麼？山云：親近和尚。稗曰：若是親近，用動兩片皮作麼？山無對。師曰：一子親得，僧問洞山：三身之中阿那身不墮？衆數山曰：吾常于此切。僧問師：先師道，吾常于此切，意作麼生？師曰：要頭便斫去。

洞山將圓寂，謂衆曰：吾有間名在世，誰人爲吾除得？衆皆無對。時沙彌出曰：請和尚法號。山曰：吾間名已謝。師曰：從古至今，無人辨得。

無着喫茶次，文殊拈起玻璃盞問：南方還有這箇麼？著曰：無。文殊曰：尋常將什麼喫茶？著無對。師代曰：久承大士按劍，爲什麼處在一塵。

師曰：謂然燈前有二種，一未知，有同於類血之乳，一知，猶如意未萌時得本物。此名然燈前一種，知有往來言語聲色是非，亦不屬正照用，亦不得記。同類血之乳，是漏失邊事，此名然燈後，直是三際事盡，表裏情忘得，無間斷，此始得名正然燈。乃云得記。

解釋洞山五位顯訣

〔夫先師所明偏正與兼帶等用先師本意，不爲明功進修之位兼涉教句，直是格外玄談，要絕妙旨，祇明從上物體現前，冥叶古聖之道。今見諸學士詮揀先師意度，似有誤彰，不免聊爲叙其差當，媿在不混其功於中，或有借位明功，借功明位，緣緒多端，功在臨時，看語來勢，不負來機，妙在佳致爾。〕

正位卻偏，就偏辨得，是圓兩意。

〔正位卻偏者，爲不對物，雖不對物卻具。○正中無用爲偏，全用爲圓，是兩意問如何是全，云：不顧者得底人也。此正位不明來也。若佛出世也，恁麼；若佛不出世也，恁麼。所以千聖萬聖，皆歸正位承當。○正中偏卻具，此一位第一不得動著。○如學士揀獨脫物外，起衆聖之前，云：是正位卻圓，其實屈正位也。此例語是古人道過跡尚存，猶未得語中無語，此復呼爲非正位也。爲語中有語故，此可呼爲有病兼帶，不得呼爲相兼帶來耳。〕

偏位雖偏，亦圓兩意，緣中辨得，是有語中無語。

〔爲用處不立的，不立的則真不常用也。○偏位雖偏亦圓者，用中無物不觸，是兩意，雖就用中明，爲語中不傷，此乃竟日道如不道，一般。又曰：偏位卻圓，亦具緣中不觸。〕

或有正位中來者，是無語中有語。

〔正中來者不兼緣，如樂山曰：我有一句子，未曾向人說。道吾曰：相隨來也。此是他妙會得，如湖南觀察使語，此例甚多，事須合出，不得混尊卑，呼爲無語中有語。又我有一句子，未曾向人說，此問答家，須就出不得乖觸，乖觸則不知有故。○句句無語不立尊貴，不落左右，故云。〕

正中來也。○正位來明正位不涉緣，又引語例者，如黑豆未生芽時作麼生，又如曰：有一人無出入息，又曰：未具胞胎時，還有言句也。無十方諸佛出身處也。此例喚作無語中有語。○又有借事正位中來者，此一位答家須向偏位中明其體物，不得入正位明也。此一句要知如先師問新羅僧，未過海時在什麼處，無對自代曰：祇今過海也。在什麼處，又如先師代愼微長老出拄杖語曰：如今出也。有人辨得麼，此例雖緣中認得不同，向去辨不得，恐後人收落功勳，將爲向上事。○如諸學士揀問祖師意，答待特牛生兒，則向汝道曰：此是正位中來，此一例語切不得呼爲正位中來，可曰：玄學路中間答俱然也。別是一路，又不得呼爲相兼帶，爲顯明故，縱賓主回互，祇得呼爲有病兼帶。

或有偏位中來者，是有語中無語。

〔偏位中來者則兼緣，如曰：即今底呼作什麼，即得無對，先師自代曰：不得不得，此例亦多，喚爲有語中無語也。○語從四大聲色中來，不立處所，是非故曰：緣中辨得是偏位中來也。引語例者，如曰：什麼物恁麼來，亦曰：光境俱忘，復是何物，亦曰：定慧等學，明見佛性，此例亦多，喚作有語中無語。○偏位中來者，就物明體，如曰：什麼物恁麼來，又光境俱忘，復是何物，此一例語，寄功明位，亦是余舊舉例，什麼物恁麼來，此一例語，雖緣中認得不同，向去，又定慧等學，明見佛性，此理如何，此一例語，亦余初舉例語，又如光境俱忘，爲是教中之則，不同玄學，只要於他教則出宗門中，玄學外事也。○祇如出息不依衆緣，入息不居羶界而住，此語全是功不同緣中認得，亦是予舊舉例，主家抽入正位，云：有一人無出入息，令渠知有正位。

○更有挾功極則淨潔位，亦得呼爲偏位中來，此難辨，須揀得出。○如學士揀問先師，如何是玄旨，師曰：如死人舌，又問：十二時中將何奉獻，曰：無物，曰：是偏位中來，此二例語，不得呼爲偏位中來，須各揀，若是玄旨一例語，可同於功勳也。此二例語，并不得呼爲偏位及兼帶也。前已明破了，是借功明位，借位明功，同於此也。

或有相兼帶來者，這裏不說有語無語，這裏直須正面而去，這裏不得不圓轉，事須圓轉。

〔相兼帶來者，爲語勢不偏不正，不有不無，如不全不似，虧不虧，唯得正面而去也。去則不立的，不立的則至妙之言，境不圓常情之事，如先師代文殊喫茶語，曰：借取這箇看得麼，亦如翠微曰：每日囉什麼。〕

然在途之語，總是病，夫當人，先須辨得語句正面而去，有語是恁麼來，無語是恁麼去，作家中不無言語，不涉有語無語，這箇喚作兼帶語，兼帶語全無的也。

〔相兼帶來者，不落有語無語，如藥山帶刀語，此是兼帶語，臨時看語來勢，或當頭正面而去，或異中虛，此若不妙會，則千里萬里也。○引相兼帶來語例者，如文殊喫茶語，及這箇人如今什麼處去也，雲巖曰：作麼作麼，又曰：即今作麼生，此例甚多。○亦有功勳中兼帶，似向上事，臨時辨取，如落淨妙之處，則須知有事在，要去則去，要止則止，千萬宛轉，不得莽鹵，夫問答兩家語勢相報，皆不出五位也，但語有麤細，答有淺深，所以先師於非言句中，強以言，皆爲對緣，而設斯要耳，如大無明底人，爲全體不同，闡提，闡提則知有事卻轉，雖轉卻成孝養，轉者不存祖佛及自己本分父母也，紅爛底人，爲不歸全擔荷，不立至尊，大保任底人，爲刺

腳入泥裡，非小小護持。○夫相兼帶來者，直須似文殊喫茶語，及先師答雲巖鉏盡語，并安和尙法堂語，及藥山淳布衲洗佛語，於中最妙兼帶，無過藥山答道吾帶刀語，及百丈下堂大衆欲散未散時，問云：「是什麼？」藥山遙聞此語，云：「在此。」便道：「暗頭兼帶，借功明物，借物明功，借過明功，借功明過等。」來若是藥山與新豐，并前諸德所出，超過入正位，是玄談奇特句已，次到小小得力者，則抽入正位。此例語常用也。吾緣住持多緒，不及子細，略明少分許。汝等諸人不須容易輕慢，若更有凝滯，旋當決了。直須勵力修行，令未來際不斷。此事不得慢洩，或值純朴者是奇器，亦不可隱耳。

他智上座臨遷化時，向人道：「雲巖不知有我，悔當時不向伊說。」雖然如此，且不違於藥山蔡子，看他智上座合作麼生老婆也。南泉曰：「異類中行，且密閣黎不知有。」

註釋洞山五位頌

正中偏（暗裏點頭）三更初夜月明前（黑白未交時辨取）○萌芽未生之時○只今是什麼時○此中無日月，不說前後去也。莫怪相逢不相識（忘卻也）○就也，又作麼劫中違背來，麼麼則俱拱手去也。隱隱猶懷舊日嫌（此兩句一意，終不相似）○又曰圓也。○又今日重什麼○又怎麼則不自欺得。

偏中正（緣中會也）失曉老婆逢古鏡（露也）○適來又記得，又是什麼模樣。○怎麼則別不呈色，分明觀面更無真（即今會也）○只者箇便是也。○失又怎麼，則未有真時，較些子，爭奈迷頭還認影（不是本來頭，又莫認影即是，又終不記得，又怎麼則改不得也）。

正中來（過也）無中有路出塵埃（無句中有句）○相隨來也，又從來事作麼生，怎麼則不相借也。○但能不觸當今諱，傍這箇。○早是傍也。○自是一般人。○怎麼則盡大地無第二人也。也勝前朝斷舌才（非默）○更切於這箇，又終不切齒。○怎麼則叮嚀不得者。

兼中至（有句中來）兩刃交鋒不須避（主客不相觸）○彼彼不傷也，箭箭相挂，脈脈不斷。○不相敵者，又怎麼則卻不相管。○好手猶如火裏蓮（壞不得）○誰是得便者。○弱於阿誰，又怎麼則終不作第二人也。○宛然自有衝天氣（不從人得，又怎麼則不借也）○非本有，又怎麼則已亦不存。○非己有。

兼中到（妙挾）不落有無誰敢和（不當頭）○他是作家。○正好商量，喚什麼作商量，道將來云：問人人盡欲出時流（皆欲出類）○有什麼出頭處，又動則死，又怎麼則隨處快活也。○折合還歸炭裏坐（一也，即可知也）將知合作麼生。○謾他不得，又怎麼則賴得是某甲。○此位中事總就正位為主，若是正位中兼無言說，亦無對賓底道理。若是對賓，偏位極則處，呼爲對賓也。若是兼帶等，總是臨時索喚不同，或時對，或時不對，亦呼爲有語中無語，無語中有語，廣如偏正位中所明，更有不入偏正位子語，方難爲人，須是明眼底人始得，不受指東劃西。

三等之墮

夫沙門取食有三等墮，作水牯牛，是沙門墮，不受食是尊貴墮，不斷聲色是隨類墮，只墮去，是甚麼人分上事。

（欲知則是入異類中，不認沙門邊事，所以古人權借水牯牛爲異類，祇是事上異類，非言語

中異類

若是言語中異類則是往來言語盡是類所以南泉道智不到處切忌道著道著則頭角生喚作如如早是變也直須向異類中行如今須向異中道取異中事夫語中無語始得若是南泉病時有人問和尚百年後向甚麼處去泉曰我向山下檀越家作一頭水牯牛去云某甲擬隨和尚去還得麼泉曰若隨我舍一莖草來

〔這箇是沙門轉身語所以道汝擬近舍一莖草來親近渠是呼爲無漏始堪供養渠〕

又曰隨類墮者祇今於一切聲色物物上轉身去不隨階級喚作隨類墮又曰尊貴墮者法身法性是尊貴邊事亦須轉卻是尊貴墮祇如露地白牛是法身極則亦須轉卻免他坐一色無辨處並是稱斷供養邊事欲須供養須得此食所以無味之味亦曰無漏是堪供養並餘觸汚之食非無漏解脫之食也有人問百丈以何爲食曰無漏爲食雲巖曰莫將以味爲供養道吾曰知有保任處盡是供養

夫取正命食者須具三種墮時有僧問披毛戴角是甚麼墮不斷聲色是甚麼墮不受食是甚麼墮余曰披毛戴角是沙門墮不斷聲色是隨類墮不受食是尊貴墮不受食尊貴墮者是本分事知有不取故曰尊貴墮披毛戴角沙門墮者不執沙門邊事及諸聖報位也不斷聲色隨類墮者爲初心知有自己本分事回光時擯出諸色聲香味觸法得寧謐則成功後不執六塵墮而不味任之無礙故曰外道六師是汝師彼師所墮汝亦隨墮可以食食者則是正命食也亦本事也祇是就六根門頭見聞覺知不被染汚呼爲墮不同向前怕也本分事猶不取況其

餘

〔沙門取食有三種墮作水牯牛是甚麼墮代曰不處正位不揀其身始喚作沙門墮不斷聲色是甚麼墮代曰凡情得盡聖量亦忘聲色塵中不應更斷乃可取食是爲隨類墮又曰彼

師所墮汝亦隨墮乃可取食沙門墮者亦不無其行亦不無其間雖有其間常無其間雖有其行常無其行其中此事切須知時節莫東西

問如何是彼師所墮曰田舍翁入聚落眼耳鼻舌身意俱失卻云如何是隨類墮曰不斷聲色又曰不失香味云如何是彼師曰六處云如何是汝亦隨墮曰存云存箇甚麼曰不得動著又不離聲色

問不受食甚麼墮曰了達正因不存勝解故曰尊貴墮也

又澆山曰我百年後作一頭水牯牛左脇上書澆山僧某甲一行字汝道當見之時喚作甚麼無對後師代曰喚作水牯牛

問未審此水牯牛還解耕稼否曰灼然云是甚麼類曰披毛戴角者云四時食何水草曰不入口者云如何是水牯牛曰不證聖云如何是舍一莖草曰毛羽相似去

問是超聖是超類曰是超聖

問如何是水牯牛曰冥冥朦朦云如何是舍一莖草來曰古人道了也毛羽相似去又曰一草者祇是明得不變異也

余曰祖佛不知有狸奴白牯卻知有云爲什麼狸奴白牯卻知有曰祇是百無所解云祇如祖

佛爲甚麼不知有，曰：祖爲執印，佛爲相似，云：祇如狸奴白牯，知有箇甚麼，曰：祇知有狸奴白牯，云：如何是狸奴白牯，知有底事，曰：不從東西來，不從三十二相，問：如何是祖，曰：上有云，如何是佛，曰：相似去。

四種異類

一者往來異類者，如今一切聲色言語階級地位捨父逃逝盡皆卻向上祖，又得爲異類，又天堂地獄餓鬼畜生修羅等皆是異類，二者菩薩同異類者，先明自己，然後卻入生死異類中攝他，已證涅槃之果，不捨生死類，自利利他，願一切衆生皆成佛，從末後成佛，所以大權菩薩若不先化衆生，已事無由得成，辨故南泉曰：先過那邊，知有卻來遮邊，行李菩薩具六度萬行，教云：若有一衆生未度者，吾終不成，正覺誓願無邊，衆生無邊，如是行持，故名菩薩同異類，三者沙門異類者，先知有本分事了，喪盡今時一切凡聖因果功行，始得就體一般，名爲獨立底人，亦名沙門稱斷事，始得表裏情忘，三世事盡，得無遺漏，得名佛邊事，亦云：一手指天地，亦云：具大沙門，轉卻沙門稱斷事，不入諸聖報位，始得名爲沙門行，亦云：沙門轉身，亦云：披毛戴角，亦喚作水牯牛，怎麼時節始得入異類，亦云：色類邊事，所以古人道：頭長三尺，頸短二寸，祇是這箇道理，不得別會，四者宗門中異類者，如南泉曰：智不到處，切忌道著，道著則頭角生，喚作如如，早是變也，直須向異類中，行道取異類中事，洞山曰：此事直須妙會，事在其妙，體在妙處，余自道：此事直須虛一位，全無的也，靦面兼帶始得，若是作家語，不偏不正，不有不無，呼爲異類中虛，此事直須作家橫身逢木著木，逢竹著竹，須護觸犯，囑囑囑。

有人問余：如何是異，曰：我若向汝道，驢年得異否，所以有人問南泉：百年後向甚麼處去，泉曰：山下檳榔家作一頭水牯牛去，云：某甲隨和尚去得否，泉曰：爾若隨我舍一莖草來，余曰：此水牯牛不同沙門水牯牛，直須子細始得，不迷時候。

問：如何是往來異類，余曰：未知有自己，又曰：一切言語聲色是非，總是往來異類，云：如何是同中異類，余曰：不擇其身，云：如何是披毛戴角，余曰：不立觸淨，又非時答觸，即觸，遇淨即淨，云：如何是宗門中異類，余曰：要頭則斫將去。

洞山先師因僧問沙門行，先師答曰：頭長三尺，頸短二寸，又問余：此意如何，余曰：勝句妙句，僧云：喚什麼作勝句妙句，余曰：勝句妙句有三種，一者諸佛出世，四十九年施設方便，十二分教，百千三昧，妙門箇箇穿究，盡是勝句妙句，此是出世邊說，二者從凡入聖，洞達自己，與佛無異，得無遺漏，始得通身，始喚作一塵一念十方婆伽梵，一路涅槃門，到恁麼時節，不處正位，不擇其身，卻入異類中，披毛戴角，無異念，故云：一切物類比況不得，諸佛諸祖計校不成，所以古人道：沙門語不得，將尺寸語與人，故喚作勝句妙句，此是色類邊語，三者一切所有底物，比不得，始呼爲勝句妙句，所以古人道：千般比不得，萬物況不成，智者不能知，上根亦不識，亦曰：本來無相似，故勝句妙句，勝句妙句者：天上人間測度不得底事，故古人曰：喚作超始終句，借此爲語類邊說行。

稠布褙問：如何是色類，余曰：披毛戴角，云：如何是語類，余曰：曹山只有一雙眉，又問：如何是水牯牛，余曰：朦朦睡睡，云：此意如何，余曰：不知有天地，稠又舉上座問雲居先師有言：自少養一

箇兒子頭長三尺頸短二寸，如何是自少養得底兒子。居曰：日給難忘。云：如何是頭長三尺，居曰：不奈何。云：如何是頸短二寸，居曰：至今還奈何得否。云：如何是日給難忘，居曰：常在則是。云：如何是常在，居曰：不違背則是。云：如何是不奈何，居曰：到恁麼時，甚麼人奈何得。云：至今還奈何，此意如何，居曰：三世諸佛不奈何，問余：如何是頭長三尺，頸短二寸，余曰：不是從來底事。云：如何是從來底事，余曰：喚作甚麼，問沙門行箇甚麼行，余曰：畜生行。云：如何是畜生行，余曰：披毛戴角。云：如何是沙門，余曰：物物不間斷。云：不間斷底事如何，余曰：始得行。云：如何是披毛戴角底人，余曰：不懼業。云：爲甚麼到恁麼地，余曰：若不懼業，甚麼處不到，問從凡入聖，則不問從聖入凡時如何，余曰：水牯牛。云：如何是水牯牛，余曰：朦朦睡睡。云：此意如何，余曰：但念水草，餘無所知。云：成得箇甚麼邊事，余曰：祇是箇逢草喫草，逢水飲水。

〔又曰：這箇語有力，欲知有力，此人不執沙門邊事，亦不入諸聖報位，便是入異類。是異類是披毛戴角，喚作沙門行，亦喚作沙門行李處，亦喚作頭長三尺，頸短二寸，欲知此意，到沙門行時，不欲將尺寸分親疎，不得說張三李四。○又頭長三尺者，只得從小至大，今日功成，得到恁麼時，喚作勝句妙句，頸短二寸者，是不坐沙門位，亦不處諸聖報位，故爲頸短二寸。恁麼時不得說著稱與不稱，所以道不將尺寸來向這裏思量也。雖然如此，猶是類邊事，須知有異類中事，不見道，智不到處，不得說著，說著卽頭角生，喚作如如，早是變也，須向異類中行，喚作虛一位，喚作觀面兼帶，全無的也。〕

云：如何是類，余曰：披毛戴角。云：如何是異，余曰：作麼作麼。云：如何是行，余曰：要頭則斫將去。

〔云：只如異類，成得箇甚麼邊事，余曰：此事有二種異類，一者沙門異類，二者事上異類。事上異類者，狸奴白牯是也。沙門異類者，觸處得自由，始得不變易，不同那箇先師問余，甚麼處去，余曰：不變易處去。此不變易事有二種，一者人人盡有本分事，二者知有底人，不捨一切聲色是非，於一切物物上不滯，呼爲一切處不易，亦喚作披毛戴角，亦喚作入泥入水，亦喚作行李底漢。〕

云：如何是入泥入水，師曰：不變易。云：轉身也否，余曰：不轉身。云：此人屋裏事如何，余曰：諸聖測不得。云：爲甚麼測不得，余曰：是伊不同諸聖。云：此猶是類邊事，還有向上事否，余曰：有。云：如何是向上事，余曰：向汝道，則恐落類邊去。

八要玄機

回互不回互，宛轉傍參，樞機密用，正按傍提。

五位旨訣

正中來者太過也，全身獨露，萬法根源，無咎無譽，偏中至者中孚也，隨物不礙，木舟中虛，虛通自在，正中偏者巽也，虛空破片，處處圓通，根塵寂爾，偏中正者兌也，水月鏡像，本無生滅，豈有蹤跡，兼中到者重離也，正不必虛，偏不必實，無背無向，又曰：心機泯，色空忘，更無覆藏，全體露現，是曰正中偏，山是山，水是水，無人安名，無物堪比，倫是曰偏中正，淨裸裸，赤洒洒，面目堂堂，盡天盡地，獨尊無二，是曰正中來，宛如寰中天子，不借禹湯堯舜令，眼見耳聞，終不借他力，耳之不入聲，中聲之不塞耳根，裏頭才轉身，塵中未帶名，是曰兼中至，不是心，不是境，不是事，不

是理從來離名狀。天真忘性相。是日兼中到。

撫州曹山本寂禪師語錄下終

國譯天童覺和尚頌古

解題

天童覺和尚頌古百則は又の名を宏智禪師頌古とも稱し、宋代に於ける曹洞の耆宿明州天童山の宏智正覺禪師の著述にして、臨濟の佛果圓悟禪師の著碧巖集と并せて、禪門の雙璧と稱せらる。後元の初め燕京報恩寺の萬松行秀禪師、即ち雪竇の頌古百則に對して圓悟禪師が垂示、評唱、著語せられし如く、宏智の頌古百則に對して垂示、評唱、著語を加へて從容庵錄と稱して世に傳ふ。從容とは蓋し報恩寺内の庵號なり。行秀晩年に到りて此の庵に退居し、門下湛然居士從源の強請に依つて筆を執りしに因んで書名とせり。

本書の初めて我が邦に傳はりし時代は、未だ詳かならずと雖も、元文中已に刊行せられしを見れば、其の以前より盛んに流行せしや明かなり。而して現今流布せるものに數本ありて、書名も亦各々異なり。上州茂林寺の梵丁和尚、從容錄筆削を著し、常陸安祥寺の太淳和尚、之を校訂して單に從容錄と稱す。世に之を雲山藏版と云つて最も多く流布す。又靈瑞本と稱するは、尾州萬松寺靈瑞和尚の考閱になるものにして、宏智禪師頌古報恩老人著語と名づく。又信濃盛泉寺の古田梵仙和尚、靈瑞本を

臺本とし、之に冠註を増補して明治十九年に刊行せしものあり、是れ近年に至つて盛んに行はる。本書は以上略述せるが如く宗門に鴻補ありて後學を開發すること頗る大なり。故に古來苟も參禪學道に志ある者は、碧巖集と共に必讀の書とせり。而して天童宏智禪師の略傳と萬松行秀禪師の略傳とは、本書卷首に國譯して附したれば、今此に掲げず。

國譯天童宏智禪師傳略

明州の^①天童の^②宏智^③正覺禪師は隰州李氏の子なり。^④母夢むらく、^⑤五臺の一僧、環を解き與へて其の右臂に環すと、乃ち孕む、遂に齋戒す。^⑥生るゝに及んで右臂特起して環の狀の若し。七歳にして日に數千言を誦す。^⑦祖の寂、父の宗道、久しく佛陀の遜禪師に參す。嘗て師を指して其の父に謂ふて曰く、「此の子^⑧道韻勝るゝこと甚だし、塵埃中の人に非ず、苟も出家せば必らず法器と爲らん。」十一にして淨明の本宗に得度す。十三にして^⑨五經七史に通す、十四にして晋州慈雲寺の智瓊和尚に^⑩具戒す、十八にして^⑪遊方す。其の^⑫祖に訣して曰

國譯天童宏智禪師傳略

①天童宏智禪師傳の參考書は、五燈會元十四、普燈錄九、宏智語錄四、伯痒の勸誡宏智禪師行業記等なり。
 ②天童とは山號にして太白山とも云ふ。
 ③宏智とは南宋高宗帝よりの勸諡號なり。
 ④正覺とは師の諱を云ふ。
 ⑤母は趙氏と云ふ。
 ⑥五臺山は文殊の道場として尊崇せらる。
 ⑦齋戒とは「ものいみ」にして、過中不食等を云ふ。
 ⑧師の誕生は寂年より逆算して考ふるに、宋の哲宗元祐六年辛未にして、我が朝の堀河帝寛治五年に當る。即ち大正九年を去る八百二十九年前の事に屬す。
 ⑨祖とは俗の祖父を云ふ。
 ⑩道韻とは「なりふり」のこと、即ち道行の崇高なる氣韻を云ふ。
 ⑪五經七史とは當時必讀の漢書を云ふ。
 ⑫具戒とは具足戒にして、比丘の大戒たること二百五十戒を守るを云ふ。
 ⑬遊方とは諸國を行脚して、諸禪匠を歴訪參究するを云ふ。
 ⑭祖父に訣別し、誓言を云ふこと。
 ⑮大事了畢にして、悟道を透徹するを云ふ。

く、「若し大事を發明せずんば誓つて歸らず。」
汝州香山に至るに及んで、成枯木一見して深
く器重せらる。一日、僧の蓮經を誦するを
聞いて、「父母所生眼、悉見三千界」といふに
至り愕然として省あり、即ち方丈に詣りて所
悟を陳す。山、臺山の香合を指して曰く、「裏面
是れ甚廢物ぞ。師曰く、「是れ甚廢の心行ぞ。」山
曰く、「汝が悟處又作廢生。」師手を以て一圓相を
畫して之を呈し、復た後に抛向す。山曰く、
「泥團を弄する漢、甚廢の限りか有らん。」師曰
く、「錯。」山曰く、「別に人に見えて始めて得
ん。」師應諾す。即ち丹霞に造る、霞問ふ、
「如何なるか是れ。」空劫已前の自己。」師曰く、
「井底の蝦蟆月を吞卻す、三更借らす夜明簾。」
霞曰く、「未在更に道へ。」師擬議す、霞打つこと

①香山寺の枯木法成禪師にし
て、芙蓉道楷禪師の法嗣。
②法器たることを知つて、尊重
するの意。
③蓮經とは妙法蓮華經、略して
法華經の事を云ふ。
④法華經法師功德品の偈、父母
所生の肉眼を以て、この三千
大千世界を透見するの意。曹
洞宗常濟大師も始め此の偈に
參究せし結果、平生心是道に
依りて開悟すと云ふ。
⑤方丈とは禪僧の居間、維摩經
より出づ、即ち香山寺法成禪
師の居室を指す。
⑥馬鹿な眞似を爲す奴と云ふ程
の意。
⑦他日別人の處に行き、大に實
參究せよとの意。
⑧鄂州丹霞山の千淳禪師を云
ふ、芙蓉道楷禪師の法嗣にし
て、洞山第九世の正嫡、天童
宏智禪師は實に此の人の法嗣

なり、今その法系を示せば左
の如し。
洞山良价―雲居道膺―同安道
丕―同安觀志―澗山緣觀―大
陽賢玄―投子義青―芙蓉道
楷―丹霞子淳―天童宏智。
⑨世界の起滅に成住壞空の四劫
あり、空劫とは廿小劫の間、
全然空虛となり居る時期にし
て、是れより世界起るの意。
空劫已前の自己とは自己本来
の面目と云ふが如し。
⑩一切衆生同一法性にして、自
己の光明は蓋天蓋地なること
を示す。
⑪唐朝には錢を失へば罪に遣ふ
と云ふ、即ち錢を失ふた上に
罪過を得るとは引き合はぬと
の意より出づ。
⑫師この時二十三歳なり。
⑬版とは紙なり、履記とは今の
書記に當る。
⑭首座にして、この時宣和三年

一拂子して曰く、「又道へ借らす」と。師言下に
釋然たり、遂に作禮す。霞曰く、「何ぞ一句を道
取せざる。」師曰く、「某甲今日失錢遭罪。」霞曰
く、「未だ汝を打得するに暇あらず、且く去れ」と。
霞、大洪を領す、師履記を掌る。後に命
じて衆に首たらしむ。得法の者已に數人、
四年にして圓通を過りし時、眞歇初めて長蘆
に住す。僧を遣して邀へて至らしむ、衆出で、
迎へ、其の衣寫穿弊するを見て、且く之れを
易へんとす。眞歇、侍者をして易ふるに新履を
以てせしむ。師卻けて曰く、「我れ鞋の爲に來ら
んや。」衆聞いて心服す。説法を懇求して第一座
に居す、六年にして出で、泗州の普照に住す。
次に太平、圓通、能仁及び長蘆を補す。天童
屋廡湫隘なり、師至つて創開して一新す。

師三十一歳なり。
①全梁の智、實の宗、保福の
悟、鳳山の劍等を指す。
②眞州長蘆山の眞歇清了禪師に
して、宏智禪師の師兄、綿州
の人、俗姓は雍氏、少にして
成都に學び、蜀に出で、丹霞
禪師の法を嗣ぐ。
③師の衣は破れ、その香も繁れ
て、一見非人の如き相なりし
を云ふ。寫はくつ。
④宣和六年甲辰、師三十四歳に
して、泗州の普照寺に住す。
⑤建炎元年丁未、師三十七歳に
して、舒州の太平寺に住し、
又江州の圓通寺、能仁寺及び
長蘆山等に歴住せらる。
⑥當時の天童山は幾々として振
はず、寺内極めて狹隘、衆二
百を越ゆること能はざりき。
⑦宏智禪師一新せらるるや四方
の雲衲争ひ集りて一千二百に
及ぶ、實に天童中興の開山と

云ふべし、師の天童に在るこ
と前後殆んど三十年、三十間
に二十八間の大僧堂を建築
し、諸堂完備すと傳ふ。
⑧紹興二十七年丁丑、師六十七
歳の時なり。
⑨此の世の暇乞、即ち永別を云
ふ。
⑩徑山の大慧宗杲禪師は宣州の
人、俗姓は奚氏、初め曹洞の
禪流に浴し、更に臨濟の諸徳
に歴參して、終に圓悟佛果禪
師の法嗣となる。後人は宏智
の黙照、大慧の看話と云ひて
相反目せるが如く云ふも決し
て然らず、大慧禪師は師の遷
化を惜んで、知音更に誰かあ
ると驚歎し、常に天童老古鐘
と尊崇せりと、師の後事を大
慧禪師に托するを以ても知る
べし。
⑪師の遷化は大正九年を去るこ
と七百六十三年以前のこと

裕子争ひ集る、云云。紹興丁丑九月、郡の僚及び檀越に謁し、次に越帥趙公令謁に謁して之れと別を言ふ。十月七日山に還る、翌日辰巳の間、沐浴して衣を更へ、端坐して衆に告げ、侍者を顧み、筆を索めて書を作り、育王の 大慧禪師に遺して後事を主らんことを請ふ。仍つて偈を書して曰く、「夢幻空華、六十七年、白鳥煙に没し、秋水天に連る」と、筆を擲つて逝す。龕留むること七日、顔貌生けるが如し。全軀を奉じて東谷に塔す。僧臘五十三、其の生前遺す所の髮齒 設利、之れを綴ること珠の如し。宏智と諡す、塔を妙光と曰ふ。會元第十四、普燈第九に詳かなり。

して、我が朝の後白河帝保元二年に當る。
設利とけ舍利を云ふ。

國譯 萬松行秀禪師傳略

順天府報恩寺萬松行秀禪師は河内の人、族は蔡氏、氣骨凡ならず、幼にして便ち超然として出世の志あり、父母之れを難かる。然れども終に世を以て相奪ふべからざることを知つて、因つて携へて刑州の淨土寺に送る。贊允を禮して落髮して具を兼る。後、力を決して參究し、囊を擔ひ 燕を距り、潭柘を歴て慶壽を過り、勝默老人に參す。老人曰く、「此の道を學するは金を鍛ふるが如し、滓穢不淨なるときは精金顯れず、君が眉宇の間を觀るに、大いに物の在る有り、此の物 一番寒骨に徹するに非ずんば放下すること能はず。子後、自ら見よ、老僧

①順天府の報恩洪濟寺、萬松行秀禪師は、宏智禪師寂後十年、即ち南宋孝宗乾道二年丙戌に生る、吾朝の六條帝仁安元年に當り、大正九年を去ること七百五十四年以前の事に屬す。師と宏智禪師の法系に於ける關係を圖示すれば左の如し。

- ① 順天府の報恩洪濟寺、萬松行秀禪師は、宏智禪師寂後十年、即ち南宋孝宗乾道二年丙戌に生る、吾朝の六條帝仁安元年に當り、大正九年を去ること七百五十四年以前の事に屬す。師と宏智禪師の法系に於ける關係を圖示すれば左の如し。
- ② 世俗の事を云ふ。
- ③ 覆子を云ふ、即ち行脚道具を指す。
- ④ 燕京と云ふ都名。
- ⑤ 潭柘の慶壽山勝默禪師を云ふ。
- ⑥ 滓とは糞とか垢とか云ふべき汚穢のものを云ふ。
- ⑦ 諸縁を放謝して大死一番するを云ふ。
- ⑧ 湖南長沙の鹿苑寺景岑禪師は南泉普願禪師の法嗣。
- ⑨ 是れ勝默老人の活手段なり。
- ⑩ 玄沙は雪峰義存禪師の法嗣師備禪師を云ふ、師嘗て靈雲見

が多言に在らず。且つ長沙自己を轉じて山河大地に歸するの話を看せしむ。半載所入なし。

默曰く、「我れ只々懶が、遅く會せんことを願ふ。」之れを久しうして、一日忽ち省あり、玄沙未徹の語に於て尙ほ未だ透らず。次に雪巖の滿に磁の大明に參す、言下に忽ち悟つて曰く、「慙麼に近きことを得たり、從前の伎倆一火にして燼く、始めて勝默爲人の處を知る。」雪巖に依ること二年、盡く其の底蘊を得、巖、衣偈を付し、勉むるに大法を流通せんことを以てす。

是れより兩河三晋皆師の名を欽す。是に於て法門隱然として倚つて以て重きを爲す。尋で淨土に歸り、萬松庵を寺中に構へ、者宿敦く開法を請ふ、師之れに應ず。次に中都の萬壽に住す。

金の明昌癸丑、章宗詔して禁庭に入れて

障塵せしむ。帝躬ら迎禮し、法を聞いて感悟し、錦綺の大僧伽衣を賜ふ。永安丁巳、詔して大都仰山棲隱寺に住せしめ、以て開山玄冥頭の席を繼がしむ。次に錫を報恩の洪濟に移す。元の太宗庚寅、復た勅を奉じて中都の萬壽に主たり。晩年に從容庵に退居す。數々鉅利に遷り、大いに洞上の宗を振ふ。道化極めて盛なりと稱す。嘗て宏智の百頌を拈擧して從容庵録と曰ふ。又請益録を著す、碧巖の後塵を躡ぎ、寶鏡の重垢を開き、甚だ宗門に補有り。師天資敏利、百家の學淹通せざることなし。三たび大藏を閲し首尾熟貫す、祖燈錄六十二卷、辨宗說等若干卷有り。淨土、仰山、洪濟、萬壽の四刹皆録あり、世に行ふ。元の定宗元年丙午、後の四月五日を以て疾を示す、七日偈を書して曰く、「八十一年、只此一語、珍重諸人、切莫錯舉」と、遂に逝く。世壽八十一、宋の乾道二年丙戌に生る、僧臘六十、通玄門外に茶毘す。舍利無數、諸方の門人分つて塔す、續燈正統第三十五に詳かなり。

桃の偈を瀉山に擧し、緣より入る者は永く退失せずの語を聞いて、請益なることは甚だ諦當、敢保す、老兄の猶ほ未徹在なることを云ふ、今之を唱へて公案となすにあり。

佛祖綱目には雪巖法瑞に作る、今は續傳燈、及び會元續略等に依りて、雪巖滿禪師となす。

勝默老人爲人垂手の親切を云ふ。

六十以上を書と云ひ、八十以上を宿と云ふ、即ち老人の徳高き人を尊崇するの語。

金の章宗皇帝明昌四年にして、南宋の光宗紹熙四年に當る、時に師年二十七歳なり。

南宋寧宗慶元三年に當り、時に師三十二歳なり。

南宋理宗紹定三年に當り、時に師六十五歳なり。

洞山真价禪師の宗風、即ち曹洞宗を云ふ。

請益録は二卷あり。

碧巖録を指す、即ち雪巖の百頌に對して、圓悟禪師が垂示、評唱、著語せられし如く、萬松老人が宏智の百頌に對して垂示、評唱、著語せられしを云ふ。

寶鏡三昧を指す、作者に就いて議論あれど、洞山真价を以て定説となす、是れ請益録の體裁内容にい就て云ふ。

南宋理宗淳和六年に當り、時に師年八十一歳なり。晉が朝後嵯峨帝寛元四年、大正九年を去ること六百七十四年以前の事に屬す。

出家してよりの年齢を云ふ。

火葬のことを云ふ。

得法の門人百二十と云ふ中にも林泉從倫、雪庭福裕最も著る。

國譯萬松老人評唱天童覺和尚頌古從容庵錄序

昔、予京師に在りし時、禪伯甚だ多し、唯り聖安澄公和尚、神氣嚴明にして言辭磊落たり、予獨り之を重んず。故に嘗て訪ふに、祖道を以てす。屢古昔の尊宿語録の中を得る所の者を以て之を叩く。澄公間に許可する者あり、予も自ら亦得たりと以爲へり。憂患に遇ふに及んでより以來、功名の心をば之を束ねて高く聞きて、祖道を求むること愈亟かなり。遂に再び前事を以て諸を聖安に訪ふに、聖安翻案して所見を然りとせず、予甚だ惑へり。聖安從容として予に謂つて、曰く、「昔、公位要地に居せり、又儒者多く佛書を誦信せず、惟だ語縁を搜摘して以て談柄を資く。故に予敢て苦に鉛錠を加へざるのみ。今君の心を揣るに果して本分の事の爲に以て予に問ふ、予豈に猶ほ前愆に襲ふて苦口を爲さざることを得んや。予老いたり、素より儒に通せず、子に教ふること能はず。萬松老人といふ者あり、儒釋兼ね備り、宗說精通して辯才無礙なり、君之に見ゆべけんや。」予

① 單に從容錄と云ふ、具には萬松老人評唱天童覺和尚頌古從容庵錄と云ふべし、或は天童覺和尚頌古報恩老人著語とも、或は略して安智禪師頌古とも云ふ。上州茂林寺梵丁和尚、從容錄筆削を著し、常陸安祥寺太淳和尚、校訂して單に從容錄と呼ぶ、世に之を雲山藏版と云ひて最も多く流布す。また靈瑞本と呼んで、萬松老人の評唱を除けるもの行はる、即ち尾州萬松寺靈瑞和尚の校閱にして、安智禪師頌古、報恩老人著語と云ふ、今は即ち此の靈瑞本に依つて國譯す。

② 聖安寺の澄公と云ふべきか、

既に萬松に謁してより、人跡を杜絶し、家務を屏斥して、祁寒大暑と雖も日として參せずといふこと無し。膏を焚いて晷に繼ぎ、寢を廢し餐を忘るること幾ど三年、誤つて法恩に被り、謬つて子印に膺る、湛然居士從源を以て之に目く。其の參學の際、機鋒測ること罔く、變化窮り無し。巍巍として萬仞峯の攀仰すべきと莫きが若く、滔滔然として萬頃の波の涯際を能くすると莫きが若し。之を瞻るに、前かとするれば忽焉として後に在り。平昔の所學を廻視すれば、皆塊礫なるのみ。噫、東山に登つて魯を小とし、泰山に登つて天下を小なりといふ者、豈に虚語ならんや。其れ未だ閩域に入らざる者、是の語を聞かば、必らず予を本を忘れて異を好むと謂はん。唯だ屏山、閑閑と其れ相照さんか。爾後命を奉じて行在に赴き、西征に扈從す、師と相隔つること其の幾千里なるを知らず。師の平昔の法語偈頌は皆法兄隆公の收むる所なり、今復た其の藁を得ず。吾が宗に天童といふ者の頌古百篇あり、號して絶唱と爲す。予萬松に此の頌を評唱して、後學を開發したまはんことを堅請すること前後九書なり。關を問つること七年、方に寄せらるゝことを蒙る、予西域に伶仃すること數載、忽ち是の書を受く、

其の傳未詳。

③ 人生の一大變事に遭遇して、世の無常を感じ、只管功名營利を捨て、求法の念起りしを云ふ。

④ 諸縁を放下して、専ら道の爲に實參せしを云ふ。

⑤ 東山と云ひ、泰山と云ふを禪の境界に比し、平昔の所學の塊礫に等しきを云ふ。

⑥ 屏山は李子純、字は純甫と云ひ、自ら屏山と號す、弘州の人、章宗承安年間の進士にして、博覽強記、殊に文才あり、且つ三十歳前後に佛書を偏讀し、感ずるところありて、佛儒道三家を合して一となし、書を著して唱道集説と云ふ、中州集四に傳あり。

⑦ 閑閑は趙秉文、字は周臣、自ら閑閑と號す、滄州の人、幼にして賢明穎悟、大定二十五年に進士となる、中州集三に

醉ひて醒むるが如く、死して甦るが如し。踴躍歡呼して東に望んで稽顙し、再四披釋し、卷を撫して歎じて曰く、「萬松西域に來るか」と。其の片言隻字も咸く指歸あり、結款眼を出して高く今古に冠たり、萬世の模楷と爲すに足る。人天の師範となり造化に權衡となる者に非ずんば、孰か能く此に與らんや。予行宮の數友と、旦夕此の書を游泳す。大寶山に登り、華藏海に入つて、互珍奇物、廣大悉く備り、左に逢つて右に遇ひ、目富んで心飮くが如し。豈に世間の語言を以て其の萬一を形容すべけんや。予敢て獨り其の美を擯にせず、天下と之を共にせんことを思へり。京城に唯りの法弟、從祥といふ者あり、僕と忘年の交を爲す。謹んで書を致して世に刊行して、以て來者に貽さんことを請ふ。廻り之に序して曰く、「佛祖諸師、根を千丈に埋む、機縁百則見世に苗を生ず、天童不合にして枝を抽んづ、萬松那ぞ蔓を引くに堪へん。湛然枝蔓上に向つて更に芒索を添へて、香を尋ね氣を逐ふ者の鼻孔を穿過し、玄を行じ妙を體する底の脚跟を絆倒す。向去若し脚跟地に點じ、鼻孔擦天ならんことを要せば、卻つて須らく這の葛藤裏に向つて、穿過して始めて得べし。」

傳あり。

隆公の傳未詳、蓋し法兄とあれば同參にして、萬松老人の法嗣か。

從祥の傳未詳、蓋し法弟とあれば同參にして、萬松老人の法嗣か。

佛祖諸師の機縁に對して、天童萬松湛然等が種々なる穿索を加へたりと云ふも、要は實參實究にありと結ぶ。

南宋寧宗嘉定十七年は元の太祖十九年にして、大正九年を去ること六百九十六年以前なり。

中元とは七月十五日を云ふ。

移刺は姓、楚才は字、晉卿は號、始め姓を耶律と云ひしかども、後金の臣となり、移刺と改姓す、萬松老人に參じて湛然居士從源と云ふ、理宗の淳祐四年甲辛五十五歳を以て逝す、依つて此の序を著さし

甲申(南宋寧宗嘉定十七年) 中元日

漆水の移刺、楚才晉卿、西域の阿里馬城に叙す

甲申には年三十五歳の夏なりき。

國譯評唱天童從容庵錄寄湛然居士書

我が宗に^①雪竇、天童あるは猶ほ^②孔門に游、夏あるがごとし。二師の頌古は猶ほ^③詩壇の李、杜のごとし。世に雪竇に翰林の才ありと謂ふ。蓋し我が華を採つて我が實を撫はざるなり。又萬里の地を行かず、萬卷の書を讀ますんば^④工部が詩を閲ること毋れと謂ふは、其の博瞻を言ふなり。諸を天童老師の頌古、片言隻字、皆佛祖の淵源より流出して、學者測ること罔きに擬す。^⑤柏山大隱集は其の事迹を出す、間疎濶にして類せざる者あり、拈提に至つては、苟簡にして但だ款に據るのみ。萬松昔評唱す、兵革より以來、其の祖業を廢す。邇來、燕京の報恩に退居して、旋蝸舎を築いて榜して從容庵と曰ふ。舊緒を成さんことを圖る、適湛然居士の勸請に値うて之を成す。老眼昏華、多く口占に出づ、門人筆受す。其の間繁く機縁の事迹を載す。一には則ち天童の學海の波瀾と附會の巧便とを旌す、二には則ち學人檢討の功を省く、三には則ち萬松述して作らず、感斷に非ざることを露すなり。竊かに佛果の碧巖集に比し

①雪竇重顯禪師、字は隱之、遂寧府の人、俗姓は李氏。雪門文傑。香林澄遠。智門光祚。雪竇重顯。師は碧巖集の頌古百則を著す。

②孔子の門人の子游、子夏を云ふ。

③詩壇の李白、杜甫を云ふ。

④工部とは杜甫の官名。

⑤柏山大隱とは本錄第二十則、第八十四則の兩處に大隱和尚の語を引く、蓋し大隱集と名づくべき書、當時流布せしもので、この傳未詳。

て、則ち篇篇皆示衆有つて備と爲す。竊かに^⑥圓通の覺海錄に比し、則ち句句未だ嘗て支離せずして完を爲す。著語に眼を出し、筆削するの際に到つては、亦機に臨んで讓らす。^⑦壬午の歳の抄、湛然居士の書至つて、堅く拈出せんことを要す。家醜を外に揚げ、吾れを累し、汝を累すことを免れざるなり。

⑥圓通の覺海錄は今は無し。本錄第十六則已下往々に圓通善國師の語を引く、蓋し當時は覺海錄ありしならんか。

⑦嘉定十五年の暮を云ふ。

⑧嘉定十六年三月三日を云ふ。

癸未年(嘉定十)上巳日

萬松野老風に因つて附寄す 不宣

國譯宏智禪師頌古目次

第一則	世尊	陸地	第二則	達磨	廓然	第三則	東印
第四則	世尊	指地	第五則	青原	米價	第六則	馬祖
第七則	藥山	陸地	第八則	百丈	野狐	第九則	南泉
第十則	臺山	婆子	第十一則	雲門	兩病	第十二則	地藏
第十三則	臨濟	瞎驢	第十四則	廓侍	過茶	第十五則	仰山
第十六則	麻谷	振錫	第十七則	法眼	毫蓋	第十八則	趙州
第十九則	雲門	須彌	第二十則	地藏	親切	第二十一則	雲巖
第二十二則	巖頭	拜喝	第二十三則	魯祖	面壁	第二十四則	雪峰
第二十五則	鹽官	犀扇	第二十六則	仰山	指雪	第二十七則	法眼
第二十八則	護國	三懺	第二十九則	風穴	鐵牛	第三十則	大隨
第三十一則	雲門	露柱	第三十二則	仰山	心境	第三十三則	三聖
第三十四則	風穴	一塵	第三十五則	洛浦	伏膺	第三十六則	馬師

第三十七則	馮山	業識	第三十八則	臨濟	真人	第三十九則	趙州
第四十則	雲門	白黑	第四十一則	洛浦	臨終	第四十二則	南陽
第四十三則	羅山	起滅	第四十四則	興陽	妙翅	第四十五則	覺經
第四十六則	德山	覺畢	第四十七則	趙州	柏樹	第四十八則	摩經
第四十九則	洞山	供真	第五十則	雪峰	甚麼	第五十一則	法眼
第五十二則	曹山	法身	第五十三則	黃檗	白龜	第五十四則	雲巖
第五十五則	雪峰	飯頭	第五十六則	密師	白龜	第五十七則	嚴陽
第五十八則	剛經	輕賤	第五十九則	青林	死蛇	第六十則	鐵磨
第六十一則	乾峰	一畫	第六十二則	米胡	悟不	第六十三則	趙州
第六十四則	子昭	承嗣	第六十五則	首山	新婦	第六十六則	九峰
第六十七則	嚴經	智慧	第六十八則	夾山	揮劍	第六十九則	南泉
第七十則	進山	問性	第七十一則	翠巖	眉毛	第七十二則	中邑
第七十三則	曹山	孝滿	第七十四則	法眼	質名	第七十五則	瑞巖
第七十六則	首山	三句	第七十七則	仰山	隨分	第七十八則	雲門
第七十九則	長沙	進步	第七十九則	龍牙	過板	第八十一則	玄沙

第八十二則	雲門聲色	第八十三則	道吾看病	第八十四則	俱胝一指
第八十五則	國師塔樣	第八十六則	臨濟大悟	第八十七則	疎山有無
第八十八則	楞嚴不見	第八十九則	洞山無草	第九十則	仰山謹白
第九十一則	南泉壯丹	第九十二則	雲門一寶	第九十三則	魯祖不白
第九十四則	洞山不安	第九十五則	臨濟一畫	第九十六則	九峯不肯
第九十七則	光帝幘頭	第九十八則	洞山常切	第九十九則	雲門鉢桶
第一百則	瑯琊山河				

國譯宏智禪師頌古目次終

國譯天童覺和尚頌古

(報恩老人著語)

第一則 世尊陞座

①【衆に示して云く】 門を閉ちて打睡して上上の機を接し、^②顧瞻頻呻曲げて中下の爲にす、^③那ぞ曲親木上に鬼眼睛を弄するに堪へん。箇の傍に背はざる底あらば出で來れ、^④也た伊を怪むことを得ず。

【擧す】 世尊一日 陞座。(今日便を著す。) 文殊白槌して云く、^⑤諦觀法王法、法王法如是。^⑥(知んぬ、佗は是れ何の心行ぞ。) 世尊便ち下座。(別日に再び商量せん。)

【頌に云く】 一段の眞風見るや也た廢や。(眼に懸入せしむること莫れ、特地に出づること還つ

國譯天童覺和尚頌古

①從容錄は碧巖集と同じく、垂示、本則、頌、着語、評唱の五段あれど、今は垂示、本則、頌のみを國譯して注解す。本則とは禪宗歴代の高僧中より逸話問答を擧げたるもの、頌は本則に對して宏智禪師が偈を作つて門人に示されたるもの、垂示、着語、評唱は共に萬松老人の作にして、門人への示業を垂示と云ふ、碧巖集には垂示と云ふ、今は示業と云ふ、同じ意なり。

②上根に接して正念打坐工夫するを云ふ。
③中下根に接して種々なる方便を以て説法することを云ふ。
④馬鹿な事にて、實に見て居れぬとの意。
⑤暗に本則の文殊に掛けて云ふ。
⑥説法の座に登られしを云ふ。
⑦大衆に報告する時に鳴らす道具、説法の始めと終りとに鳴らす。
⑧明かに法王の法を觀すれば、法王の法は是の如しと云ふて、説法の終りに唱ふべき證明の文なり、此れは文殊が間違へたるに非ず、不説の說、不問の問とも云ふべきか、仔細に實究せざるべからず。

て難し。①綿綿として②化母③機梭を理む。(參差蹉了緒を交ふ。織り成す古錦春象を含む。大巧は拙の若し。東君の漏泄を奈何ともすること無し。(陰陽曲げて狗ふることなし、節氣相饒さす。)

第二則 達磨廓然

【衆に示して云く】①卞和三獻未だ刑に遭ふことを免れず、②夜光人に投ず劍を按せざる鮮し。③卒客に卒主無し。④假に宜しうして眞に宜しからず。差珍異寶、用不著、⑤死猫兒頭拈出す看よ。

【擧す】①梁の武帝 達磨大師に問ふ。(清且に起き來つて曾て市に利あらず。如何なるか是れ 聖諦第一義。且く第二頭に向つて問へ。)

磨云く、①廓然無聖。(劈腹剜心。帝云く、朕に對する者は誰ぞ。鼻孔裏に牙を認む。磨云く、不識。腦後に腮を見る。帝契はず。方木圓竅に入らず。遂に江を渡つて 少林に至り、面壁九年。(家に滯貨無ければ富ます。)

【頷に云く】廓然無聖。(一廻水を飲んで、一廻噎を著。來機還庭。(面の赤きは語の直きに如かず。得は鼻を犯すに非ずして斤を揮ひ、好手中好手に誇る。失は頭を廻さずして甌を墮す。(已往を咎めず。寥寥として少林に冷座し、老いて心を歇めず。默黙として 正令を全提す。(獨り自ら兵機を説く。秋清うして月、霜輪を轉じ、高く眼を著けて看よ。河淡うして斗、夜柄を垂る。誰か敢て承攬せん。繩繩として 衣鉢兒孫に付す。(莫妄想。此れより人天、藥病と成る。(天行已に過ぐ、使者須らく知るべし。)

第三則 東印請祖

【衆に示して云く】①劫前未兆の機、②烏龜火に向ふ。③教外別傳の一句、

①化母とは造化主、人々木具の化母を指す。
②機ははた、梭はなき、即ち織物の道具。
③東君とは春の神を云ふ。
④韓非子に出づる故事にして、卞和が荆山の崑岡谷に於て璞を得、楚の靈王に獻せしに、石なりと云ひて刑し、また武王に獻せしも同じく刑せられ、文王に及んで哭して璞を抱く、即ち見る目を持たぬ王の爲に却つて刑せられしを云ふ、故に本則に就いて考ふる時は達磨の法を知らざる武帝に對しての言葉と見よ。

⑤深夜に夜光の珠を投ぐれば、人驚いて劍を按ずるの意、即ち武帝に就いて云ふ。
⑥卒は倉卒輕卒の意、俗に客と主人と氣の合はぬこと。
⑦假は有爲權假、眞は無相眞實、即ち武帝は權に通じて實に達せざるの意。
⑧死猫兒頭とは價の付かぬ貴きもの、即ち會元十三曹山の答に出づ。
⑨梁の武帝、姓は蕭、名は衍、字は叔達、漢の蕭何二十五世の孫、初め梁公に封ぜられ、又梁王となりて高祖武帝と稱し、篤く佛法に歸依す。
⑩達磨大師は禪宗の初祖、初めて印度より支那へ來りし時の問答商量なり。
⑪聖諦第一義とは、佛法中の第一眞理と云ふこと。
⑫無相眞實のところ、凡もなく聖もなき意。
⑬揚子江のこと。
⑭魏の國に在り。
⑮來機は武帝にして、達磨と非常の間隔のあること、話にならぬことを云ふ。
⑯莊子徐無鬼の篇に出づる故事、達磨の武帝に答へしこと。

①廓然とは絶えざる貌。
②衣鉢とは僧伽梨衣と鉢盂、即ち受戒嗣法の信據。
③機は未だ兆せざる劫の前とは、父母未生已前とか一機未發の時とかに同じ意。
④烏龜とは盲目の龜、火に向ふとは思慮分別もなき非思量の境界を云ふ。
⑤名相言句に拘らず、無言無説の宗旨を云ふ。

確皆に花を生ず。且く道へ、還つて受持讀誦の分ありや也た無しや。
【擧す】 東印土の國王、二十七祖般若多羅を請じて齋す。(往往に口債を償ひ去れり。)王問うて曰く、「何ぞ看經せざる。」(功無くして祿を受くれば、寢食安からず)祖云く、「貧道入息 陰界に居せず、出息衆縁に涉らず、常に如是經を轉すること百千萬億卷。」(上來の講讀、限り無き勝因。)

【頰に云く】 雲崖、月を玩んで璨として輝を含む。(暗に一線を通ずれば、文彩已に彰る。)木馬春に遊んで駿にして羈されず。(百花叢裏に過ぐれども、一葉身を沾さず。)眉底一雙碧眼寒じ、(曾て虻蜂の隊を趣はず。)看經那ぞ牛皮を透るに到らん。(過也。)明白の心、曠劫を超え、(威音前の一箇)英雄の力、重圍を破る。(兩重の關を射透す。)妙圓の樞口靈機を轉す。(何ぞ曾て動著せん。)寒山來時の路を忘卻すれば、(暫時も在らざれば、死人に如同す。)拾得相將のて手を携へて歸る。(須らく是れ當郷の人なるべし。)

第四則 世尊指地

【衆に示して云く】 一塵纔かに擧つて大地全く收る。匹馬單槍、驢を開き士を展ぶることは便ち可なり。處に隨つて主と作り、縁に遇うて宗に即する底、是れ甚麼人ぞ。

【擧す】 世尊、衆と行く次、(他の脚跟に隨つて轉す。)手を以て地を指して云く、「此の處宜しく、梵刹を建つべし。」(太歲頭上、土を動すべからず。)帝釋、一莖草を將て地上に挿んで云く、「梵刹を建つること已に竟んぬ。」(修造易からず。)世尊微笑す。(賞罰分明。)

【頰に云く】 百草頭上、無邊の春。(夾山猶は在り。)手に信せ拈じ來つて用ひ得て親し。(荒田に入りて揀ばす。)丈六の金身功德聚。(不審し。)等閑に手を携へて紅塵に入る。(場に逢ふて戯を作す。)塵中能く主と作る。(一朝權手に在り。)化外自ら來賓す。(令行の時を看取せよ。)觸處生涯分に隨つて足る。(人従り得ず。)未だ嫌はず伎倆の人に如かざることを。(面に慚づる色なし。)

第五則 青原米價

①石春の引手に花を生ずとは、意路不到、無分別の端的を云ふ。

②別傳の那一經に就いて云ふ。

③東印度の堅固王。

④不如密多の法嗣、達磨の正師にして、東印度婆羅門種、幼にして父母を失ひ、出家して不如密多の法を傳ふ。

⑤尊者の自稱。

⑥五蘊皆空の意、陰は五蘊、界は十八界。

⑦如是經とは法爾常恒不斷展轉の經典を云ふ。

⑧塵とは形水牛の如きもの、古人の句に「塵は月を翳ぶに因つて紋角を生ず」とあり。

⑨木馬は體操場の馬にあらずして、駿馬の意、これ等は皆般若多羅の境界に就いて云ふ。

⑩寒山詩の意に依りて云ふ、即ち東印度王を寒山に喻へ、般若多羅を拾得に喻ふ。

⑪高法歸一、一即高法の意。
⑫一匹の馬、一箇の槍にて自在に使ふこと。
⑬梵刹とは寺のこと。
⑭帝釋とは忉利天の主、須彌山の頂に居す、常に佛法を守護する慈悲柔順の神。
⑮百草頭上とは全世界の意、夾山の言葉にして、會元第五に出づ。
⑯手に任せて一莖草を取り來るを云ふ。
⑰意外の處より帝釋の出て來たこと。
⑱天童の見識にして、梵刹建立など人に頼みはせぬとの意。
⑲大報恩經に出づ、須闍太子の半養にして、善に善相なきを云ふ。
⑳增阿含經に出づ、提婆達多の惡心にして、惡に惡相なきを云ふ。
㉑妄想分別を云ふ。

【衆に示して云く】 開提肉を割いて親に供するも、孝子の傳に入らず、調達山を推して佛を壓するも、豈に忽雷の鳴るを恐れんや。 荆棘林を過得し、梅檀林を斫倒して、直に年窮歳盡を待て。 舊に依つて孟春猶ほ寒し、佛の法身甚廢の處にか在る。

【擧す】 僧 青原に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」(小官は多く律を念ふ。)原云く、「盧陵の米作廢の價ぞ。」(老将は兵を論せず。)

【頌に云く】 太平の治業に象無し。(旆頭星現するや也た未だしや。)野老の家風至淳なり。(爭か如かん、我が這裏に田を種る飯を搏めて喫せんには。)只管に村歌社飲。(窮鬼子、快活不徹也。)那ぞ舜德堯仁を知らん。(始めて忠孝を成す。)

第六則 馬祖白黑

【衆に示して云く】 口を開き得ざる時、無舌の人語ることを解す、脚を擡げ起さざる處、無足の人行くことを解す。若し也た 他の殻中に落ち句下に死在せば、豈に自由の分あらんや。 四山相逼る時、如何が透脱せん。

【擧す】 僧、馬大師に問ふ、「四句を離れ百非を絶して、諸師某甲に西來意を直指せよ。」(若し這の僧の問頭を識らば、人の多少の心力を省かん。)大師云く、「我れ今日勞倦す、汝が爲に説くこと能はず、(已に缸中の月有り。) 智藏に問取し去れ。」(更に帆上に風を添へ。)僧、藏に問ふ。(卻つて人の處分を受く。)藏云く、「何ぞ和尚に問はざる。」(好本多同。)僧云く、「和尚教へ來つて問はしむ。」(可煞だ靈利。)藏云く、「我れ今日頭痛す、汝が爲に説くこと能はず、海兄に問取し去れ。」(我れ馬師の弟子と作り得ずんばあるべからず。)僧、海に問ふ。(苦瓠は根に連りて苦し。)海云く、「我れ這裏に到つて卻つて不會。」(甜瓜は蒂に徹して甜し。)僧、大師に擧示す。(草鞋錢を索取せよ。)大師云く、「藏頭白、海頭黒。」(更に參せよ三十年。)

【頌に云く】 藥の病と作る。(胡人乳を飲んで返つて良醫を怪む。)前聖に鑒む。(師多ければ脈亂る。)病の醫と作る。(藥を以て藥を下し、毒を以て毒を去る。)必らずや其れ誰ぞ。(是れ天童なること莫しや。)白頭黒頭兮 克家の子。(一密に燒就す。)有句無句兮 截流の機。(更に瀉山をして笑轉た新な

- ①菩提悟處を云ふ。
- ②開先寺の蓮禪師の問答の語、會元十五に出づ、即ち年窮歳盡とは大死底のこと、孟春とは活來自在のこと。
- ③青原行思禪師、吉州安城の人、俗姓は劉氏、祖惠能大師の上首。
- ④盧陵とは國の名、恐らくは僧この盧陵より來りしものならん。
- ⑤佛法の臭味もなく無事太平を歌ふて餘蘊なし。
- ⑥已下の二句は向上の宗旨に就いて猶子本分の行狀を云ふ。
- ⑦他とは師家の首句を云ふ。
- ⑧馬祖道一禪師、漢州の人、俗姓は馬氏、容貌奇異、牛行虎視、南嶽懷讓禪師の法嗣。
- ⑨四句も百非も共に妄想を云ふ。
- ⑩西來意とは、達磨の東土より支那に來りし意志にして、俗

- ①佛法の第一義とて、師家の安心とか云ふこと。
- ②西堂智藏禪師、虔化の人、姓は塞氏、八歳にして出家し、遂に馬祖の印記を得、馬祖評して「經は藏に入る」と。
- ③百丈懷海禪師、福州の人、馬祖に南康に參じ、得法の後、洪州大雄山に居る、馬祖評して「師は海に歸す」と。
- ④智藏の頭白く、懷海の頭黒しとは如何、人々の參究を勸む。
- ⑤易の蒙の九二にあり、家を克く與す孝子にして、智藏懷海を指す。
- ⑥毗耶は毗耶離城の維摩居士、默不二に就いて笑ふの意。
- ⑦老古錘とは圭角の取れた老熟圓滿の宗師。
- ⑧眉毛は一能もなくして上位に居ることを云ふ。
- ⑨擧者とは藥山を指す、天下の四民は各々その務に忙殺せら

らしむ。堂堂として坐斷す舌頭の路。(一死再活せず。應に笑ふべし。毗耶の老古錫。(只だ一槓と得たり。)

第七則 藥山陸座

【衆に示して云く】眼耳鼻舌各一能有つて、眉毛は上に在り。士農工商各一務に歸して、拙者常に閑なり。本分の宗師如何が施設せん。

【擧す】藥山久しく陸座せず。(動は静に如かず。院主白して云く、「大衆久しく示誨を思ふ、請ふ和尚、衆の爲に說法したまへ。」(重に便して輕に便せず。山、鐘を打せしむ、衆方に集る。(頭を聚め相を作して、那事ぞ悠悠たる。山、陸座、良久して、便ち下座して。方丈に歸る。(一場の話覇。主後に隨つて問ふ、「和尚適來、衆の爲に說法せんことを許す、云何ぞ一言を垂れざる。」(大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。山云く、「經に經師あり、論に論師あり、爭か老僧を怪み得ん。」(惜むべし、龍頭蛇尾なることを。)

【頷に曰く】癡兒意を刻む。止啼錢。(何の用を作すに堪へん。良馴追風影鞭を顧みる。(踢起して便ち行く。雲長空を掃ふとき月に巢ふ鶴。(樹下底一場の懷懼。寒清骨に入つて眠りを成さず。(眼を開いて夢を作す。)

第八則 百丈野狐

【衆に示して云く】箇の元字脚を記して心に在かば、地獄に入ることを箭を射るが如し。一點の野狐涎、嚙下すれば、三十年吐不出、是れ西天の令嚴なるにあらず、只だ默郎の業重きが爲なり。會て悞犯の者有りや。

【擧す】百丈上堂、常に一老人あつて法を聴く、衆に隨つて散じ去る。(關中に靜を取る。一日去らず。(從來這の漢を疑着す。丈乃ち問ふ、「立つ者は何人ぞ。」(事交を解せざれども、客來らば須らく待すべし。老人云く、「某甲過去。迦葉佛の時に於て、曾て此の山に住す。(元是れ當家の人。學人有つて問ふ、「大修行底の人、還つて因果に落つるや也た無しや。」(但だ好事を行じて、前程を問ふこと莫れ。他に對へて道く、「不落因果」と。(一句合頭の語、萬劫の繫驢橛。野狐身に墮すること五百生。(彌因果に落ちすと道ふ。今請ふ、和尚一轉語を代れ。甚の來由をか著ん。丈云く、「不昧因果。」(一坑に埋卻せん。老人言下に於て大悟す。(狐涎猶ほ在り。)

るも、藥山は安閑無事、心中難念なきを云ふ。
① 方丈とは禪僧の居室、維摩經より出づ。
② 院主、大衆を指して云ふ。
③ 涅槃經嬰兒行品に出づ、嬰兒の啼哭を止めんが爲め、父母黃葉を以て示す、黃葉實は黃金に非ず、唯だ嬰兒の啼哭を止めんとする方便のみ、即ち藥山の老婆親切を云ふ。
④ 世の良馬は鞭影を見て走るものを、鈍漢は致方がない。
⑤ 已下の二句は藥山の境界を歌ふ。

① 文字言句の葛藤を云ふ、碧巖錄第二十八則の頷の下語を見よ。
② 直指の號令にして、他の業に非ざることを。
③ 默は癡、即ち癡漢にして、人の分別妄想の業の重きことを云ふ。
④ 迦葉佛とは釋尊已前に出世せられし過去七佛の一人、釋尊の師に當る。

【頰に云く】一尺の水一丈の波。(幸に自ら河清海晏。)五百生前奈何ともせず。(早く今日の事を知らば、悔らくは當初を慎まざることを。)不落不味、商量せり。(頑涎断せず。)依然として挿入す葛藤窠。(頭に纏ひ脚に激ふ。)阿呵呵。(笑ふに堪へたり、悲むに堪へたり。)會すや也た麼や。(牛頭を按じて草を喫せしむ。)若し是れ備、灑灑落落たらば、蟲の木を禦むが如し。我が爾として文を成す。神歌社舞自ら曲を成す。(拍拍是れ令。)手を其の間に拍して、哩囉を唱ふ。(細末にし將ち來れ。)

第九則 南泉斬猫

【衆に示して云く】 滄海を踢翻すれば、大地塵のごとくに飛び、白雲を喝散すれば、虚空粉のごとくに碎く。嚴に 正令を行するも、猶ほ是れ半提、大用全く彰はる。如何が施設せん。
【擧す】 南泉一日、東西の兩堂、猫兒を争ふ。(人平かにして語らず、水平かにして流れず。)南泉見て遂に提起して云く、「道ひ得ば即ち斬らじ。」誰か敢て鋒に當らん。衆對ふる無し。(直に雨の頭に淋ぐを待て。)泉、猫兒を斬却して兩段と爲す。(刀を抽いて鞘に入れず。)泉、復た前話を擧して 趙

- ① 不落と云ふも不味の云ふも、共に言句葛藤の商量なり。
- ② 修行の處に到達して居るの意。
- ③ 哆哆は修行の相、和和は言語の聲、即ち多言の意。
- ④ 哩囉は小兒の語、水分に違すれば何を言ふとも法に合する意。
- ⑤ 師家の活機用を示す。
- ⑥ 正法の號令。
- ⑦ 萬松老人の活眼より看來れば未だ十成ならずと云ふ義。
- ⑧ 南泉普願禪師、鄭州新鄭の人、姓は王氏、初め教相毘尼の學を究め、後、馬道一禪師に

州に問ふ。(再來半文に直らす。)便ち草鞋を脱して、頭上に戴いて出づ。
【好し】一刀兩段を與ふるに。泉云く、「子若し在らば、恰も猫兒を救ひ得ん。」(心斜なれば口の喝を覺えず。)

【頰に曰く】 兩堂の雲水悉く 紛拏す。(理有ることは高聲に在らす。) 王老師能く正邪を驗む。(明鏡臺に當つて、物來れば斯に鑑む。)利刀斬斷して俱に像を亡す。(龍王多少の風を消ひ得たり。) 千古人をして作家を愛せしむ。(一人有つて肯はず)此の道未だ喪びず。(死猫兒頭何の用を作すにか堪へん。) 知音嘉す可し。(無と道はず只だ是れ少し。) 山を鑿つて海に透すことは、唯り 大禹を尊とす。(功浪りに施さず。) 石を鍊つて天を補ふことは、獨り女媧を賢とす。(一を闕いては不可なり) 趙州老生涯有り。(手に信せて拈じ來つて不是なし。) 草鞋頭に戴いて此此に較れり。(且く一半を信ず。) 異中來や還つて明鑑。(褫子は謾じ難し。) 只だ箇の 眞金沙に混せず。(是れ眞に滅し難し。)

第十則 臺山婆子

- ① 等じて法を嗣ぐ。
- ② 趙州從諗禪師、曹州鄆郡の人、姓は郝氏、南泉の法を嗣いで遷に北地を化し、趙州の觀音院に住す。
- ③ 紛は紛亂の義、拏は持擲の義。
- ④ 王老師とは南泉和尚を云ふ、姓王氏なるが爲めなり。
- ⑤ 南泉の作家を愛する意。
- ⑥ 南泉の知音趙州を指す。
- ⑦ 大禹は南泉に喩へ、女媧は趙州に喩ふ。
- ⑧ 十分ではないと抑下す。
- ⑨ 趙州和尚は猫でも犬でも、良く腹中を見抜いて居るとの意。
- ⑩ 眞金とは趙州の別生涯を指す。
- ⑪ 作家の把住放行自由自在の活手段を説く。
- ⑫ 干木とは拄杖子、即ち禪師の用ふる杖を云ふ、宗旨上に應用す。

【衆に示して云く】 收あり放あり、干木身に隨ふ、能殺能活、權衡手に在り、塵勞魔外、盡く指呼に付し、大地山河、皆戯具と成る。且く道へ、是れ甚饑の境界ぞ。

【擧す】 臺山路上一婆子あり。(傍城庄家、道を夾むの免。)凡そ僧ありて、臺山の路什麼の處に向つて去ると問へば、(一生行脚して去る處も亦知らず)婆云く「蕤直去。」(未だ好心に當らず)僧纔かに行く。(賊を著ることども也)た知らず。婆云く「好箇の阿師、又恁麼にし去れり。」(備早く侯白)僧、趙州に擧似す。(人平かにして語らず)州云く「待て與に勘過せん。」(水平かにして流れず)州亦前の如く問ふ。(陷虎の機)來日に至つて上堂に云く「我れ汝が爲に婆子を勘破し了れり。」(我れ更に候黒)【頌に云く】 年老いて 精と成る 謬つて傳へず。(切に忌む)人家の男女を魔魅すること。(趙州古佛南泉に嗣ぐ)鎮州端の大羅刹を出す。(枯龜命を喪ふ)ことは鬪象に因る。(靈鬼靈神、返つて羅網に遭ふ)良驥追風 纏牽に累さる。(驟風驟雨も羈韁を免れず)勘破了や老婆禪。(幾箇の男兒か是れ丈夫)人前に説向すれば 錢に直らず。(根、聖ならざることを知る。)

第十一則 雲門兩病

【衆に示して云く】 無身の人疾を患ひ、無手の人藥を合す、無口の人服食し、無受の人安樂なり。且く道へ 膏肓の疾、如何が調理せん。

【擧す】 雲門大師云く「光透脱せざれば、兩般の病有り。(還つて口乾き舌縮むを覺ゆる麼)一切處明ならず、面前物ある是れ一つ。(白日に鬼を見る、是れ眼花なること莫しや)一切の法空を透得するも、隱隱地に箇の物有るに似て相似たり。亦是れ光透脱せざるなり。(早く是れ結習、那ぞ喉閉づるに堪へん)又 法身にも亦兩般の病あり。(禍單に行はれず)法身に到ることを得るも法執忘せず、己見猶は存するが爲に、法身邊に墮在す是れ一つ。(唯だ邪祟のみにあらず、更に家親有り)直饒ひ透得するも 放過せば即ち不可なり。(病を養ひて軀を喪す)子細に點檢し將ち來れば、甚麼の氣息か有らんといふ、亦是れ病なり。(醫博未だ門を離れざるに、又早く痼病發す)【頌に云く】 森羅萬象 崢嶸に許す。(聽他ばあれ何ぞ汝を碍へん、識得す)

- ① 權衡とは秤の分銅を云ふ。
- ② 煩惱妄想、天魔外道を盡く自己の掌中に入れ、指頭を以て自由自在に取り廻すの意。
- ③ 山河大地も胸中に入りて、何等障礙せぬとの意。
- ④ 五臺山は太原府にあり、文殊の居處として祀る。
- ⑤ 堪道へ廻らず前進せよとの意。
- ⑥ 精とは精魅、即ち怪物なり、趙州も年老いて怪物となつたとの意。
- ⑦ 莊子外物篇に出づる故事、長命せし白龜が人の夢に物語りせしため、殺されてトせらる。是れ口のために招ける禍にして婆子に當る。
- ⑧ 良馬のこと、婆子の尋常一擧に非ざることを云ふ。
- ⑨ 趙州に依りて良馬も纏牽せられしを云ふ。
- ⑩ 何の役にもならぬとの意。

- ① 任運無功用の作用を云ふ。
- ② 膏肓とは左傳に出づ、難治の大病を云ふ。
- ③ 雲門文偃禪師、姑蘇嘉興の人、俗姓は張氏、雲峰義存禪師の法嗣にして雲門家の祖。
- ④ 光とは自己を指す、透脱せざるは分別心の意、兩般とは空有二境のこと。
- ⑤ 隱隱地とは物影暗く、不分明の意。
- ⑥ 法身毘盧遮那如來、即ち自己の心性を徵見せしもの。
- ⑦ 是れで良いと腰を下すこと。
- ⑧ 崢嶸とは山の高き貌、即ち山は山として其の儘に見、何等取捨を用ひざるの意。
- ⑨ 空を忘ぜざるが故に斯く云ふ。
- ⑩ 雲門の境界を歌ふて餘蘊なし。
- ⑪ 前の二句を向上の境とすれば、已下二句は雲門の爲人底

れば冤を爲さず。透脱無方なるも、眼睛を凝ふ。(閃棒楯樑に著けん。)彼の門庭を掃ふ誰か力有る。(迹を拂へば痕を成し、隠さんと欲すれば彌々露る。)人の竹次に隠れて自ら情を成す。(心疑はゞ暗鬼を生ず。)船は野渡の秋を涵して碧なるに横へ、(死水浸御す。)棹は蘆花の雪を照して明なるに入る。(岸に住して御つて人を迷す。)串錦の老漁市に就かんことを懐ひて、(本を著けて利を圖る。)飄々として一葉浪頭に行く。(流に随つて妙を得。)

第十二則 地藏種田

【衆に示して云く】才子は筆耕し、辯士は舌耕す。我が衲僧家、露地の白牛を看るに備し、無根の瑞草を顧みず、如何が日を度らん。

【擧す】地藏、脩山主に問ふ、「甚れの處より來る。」(來處を知らずと道ひ得てん麼。)脩云く、「南方より來る。」(好し與に下載するに。)藏云く、「南方近日佛法如何。」(行説好話するに。)脩云く、「商量浩浩地。」(低聲。)藏云く、「爭か如かん我が這裏、田を植ゑ飯を搏めて喫せんには。」(少賣弄。)脩云く、「三界を爭奈何せん。」(猶ほ這箇の在る有り。)藏云く、「爾甚麼を喚んでか三界と作す。」(南方は猶ほ可なり、北方は更に隠だし。)

の境、即ち向下の境界を云ふ。
①大乘の極地、一點の煩惱妄想なきところ。
②微妙なる禪の悟邊を指す。
③地藏桂琛禪師、玄沙師備禪師の法嗣にして、雪峰の法孫に當る。
④龍齊紹修禪師にして、地藏の法嗣。
⑤三界とは欲界、色界、無色界を云ふ。

【頌に云く】宗説般般盡く強ひて爲す。(今日便を著す。)耳口に流傳すれば便ち支離。(衆僧怪む莫れ。)田を植ゑ飯を搏む家常の事。(別に有るべからず。)是れ飽參の人にあらすんば知らず。(知らんことを要して作麼せん。)參じ飽いて明かに知る所求無きことを。(更に須らく天童に請益すること一遍すべし。)子房終に封侯を貴ばず。(也た是れ靈龜尾を曳く。)機を忘じ歸り去つて魚鳥に同じうす。(流に随つて妙を得。)足を濯ふ滄浪煙水の秋。(受用不盡。)

第十三則 臨濟瞎驢

【衆に示して云く】一向に人の爲にして己あることを知らず、直に須らく法を盡して民無きことを管せざるべし。須らく是れ木杖を拗折する惡手脚なるべし。行に臨むの際、合に作麼生。

【擧す】臨濟將に滅を示さんとして、三聖に囑す。(老婆死に臨んで三回別る。)
「吾れ遷化の後、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ。」(甚の死急をか著けたる。)
聖云く、「爭か敢て和尚の正法眼藏を滅却せん。」(小心を伴れども故に大膽。)
濟云く、「忽ち人有つて汝に問はゞ、作麼生か對へん。」(虎口裏に身を横ふ。)
聖、便ち喝す。(機に當つて父に譲らず。)
濟

①地藏和尚は宗通、説通の二方面を、無理に止むことを得ずして行ふたとの意。
②支離滅裂の意にして、離れ離れの修山に當る。
③史記に出づ、子房とは漢の高祖に仕へし張良にして、齊の三萬戸の封侯を貴ばず、却つて留地に甘じて無爲に暮せしを云ふ。
④師家分上の爲人を云ふ。
⑤脊梁骨を堅起すること。
⑥臨濟惠照禪師、曹州の人、俗姓は邢氏、黃髮希運禪師の法嗣にして、機鋒峻烈、一代を

云く、「誰か知らん吾が正法眼藏、這の 瞎驢邊に向つて滅卻することを。」
(重賞の下、必らず勇夫有り。)

【頰に云く】 信衣半夜 盧能に付す。(賊兒賊智。)
【上梁 正しからず。】 臨濟一枝の正法眼(半明半暗、全く今朝に在り。)
瞎驢滅卻して人の憎みを得たり。(心甜く口苦し。)
漢。祖祖燈を傳ふ。(壁を鑿ちて光を偷む。)
鷓鴣洲を踢蹴す。(鷓鴣を變化す。手を翻せば是れ雲、手を覆せば是れ雨。)
只だ箇の名言比擬し難し。(猶ほ少きを嫌ふこと、在り。)
太都そ手段驢 臆を解す。(正法眼藏猶ほ在り。)

第十四則 廓侍過茶

【衆に示して云く】 探竿手に在り、影草身に隨ふ。
【廓侍者、】 德山に問ふ、「從上の諸聖什麼の處に向つてか去る

風塵す、臨濟宗の祖。
② 三聖惠然禪師、臨濟に従ひて法を嗣ぐ。
③ 釋迦の傳の正法の眞髓。
④ 盲目坊主の意、三聖に對して抑下す。
⑤ 六祖惠能禪師を指す、性は盧氏なるがため、常に盧行者と號す、釋尊より嫡々相承せる傳法衣を半夜、五祖弘忍大師より受くるを云ふ。
⑥ 飛擡は交亂の意、黃梅は五祖弘忍大師の處。
⑦ 海嶽は迷悟凡聖に喩ふ。
⑧ 莊子に出づ、魚の大なるを鰲と云ひ、鳥の大なるを鷓と云ふ。
⑨ 師家の學者を試験する様子を云ふ。
⑩ 内外の相違を云ふ、是れ師家の作略なり。
⑪ 山より取り出したばかりの石。

や。」(備が鼻孔裏に在り。) 山云く、「作麼作麼。」(迅雷耳を掩ふに及ばず。)
廓云く、「飛龍馬を勅點すれば、跛鼈出頭し來る。」(家富んで兒驕る。)
山使ち休し去る。(饒人はれ癡なるにあらず。)
來日、山、浴より出づ。
廓、茶を過して山に與ふ。山、廓が背を撫すること一下す。(斷送して竿頭に上す。)
廓云く、「這の老漢力に始めて 警地。」(覆車轍を同じうす。)
山、又休し去る。(虎頭虎尾一時に收む。)
【頰に云く】 觀面に來る時 作者知る。(味者は覺らず。)
可の中石火電光 遲し。(已に新羅を過ぐ。)
機に輪く謀主に深意有り。(兵を埋めて 鬪を掉む。)
敵を欺く兵家に遠思無し。(深く虜庭に入る。)
發すれば必ず中る。(其の便を得るに慣ふ。)
更に誰をか謾せん。(賊を併せて捉獲す。)
腦後に腮を見て人觸犯し難し。(曾て蛇咬を経。)
眉底に眼を著けて 渠れ便宜を得たり。(伴りて知らざるを打つまねす。)

第十五則 仰山挿鉢

【衆に示して云く】 未だ語らざるに先づ知る、之を默論と謂ふ。明さ

① 興化法予、侍者とは德山の左右に隨侍して、日用の事を辨するもの。
② 德山宣鑑禪師、銀南の人、俗姓は周氏、龍潭崇信禪師の法嗣。
③ 左様々々の意。
④ 龍馬は名馬の異稱、跛鼈は鈍馬の異稱、故に此の一句の意は、從上の諸聖と勅點せしに驢の如きものが出て來て、誠に馬鹿らしいと云ふこと。
⑤ 警は一瞥として少し見る意、ちらりと見ること、地は助字。
⑥ 觀面とは眞正面と云ふこと。
⑦ 德山を指す。
⑧ 無言にして休し去る處は油斷がならぬ。
⑨ 德山の手中を云ふ。
⑩ 惡人の人相として傳ふ。
⑪ 廓侍者を指す。
⑫ 一言未發已前に學者の腹を見抜くこと。
⑬ 鴻山靈祐禪師、福州の人、俗

れども自ら顯る、之を暗機と謂ふ。三門前に合掌すれば、兩廊下に行道す。箇の意度あり、中庭上に舞を作せば、後門下に頭を搖す、又作糜生。

【擧す】 ① 瀉山、② 仰山に問ふ、「其麼の處よりか來る。」(是れ來處を知らざるにはあらず。)仰云く、「田中より來る。」(備甚としてか草に落つ。)山云く、「田中多少の人ぞ。」(只だ父子兩箇。)仰、鎌子を挿下して又手して立つ。(放去は較々危し。)山云く、「南山に大いに人有つて苜を刈る。」(草を打つて蛇を驚す。)仰、鎌子を拵じて便ち行く。(收來は太だ速かなり。)

【頌に云く】 ① 老覺情多うして子孫を念ふ。(婆心太だ切なり。) 而今慚愧して家門を起す。(三十年鹽醋少からず。) 是れ須らく南山の語を記取すべし。(貴人多く忘る。) 骨に鏝め肌を銘じて共に恩を報せよ。(恨心捨てず。)

第十六則 麻谷振錫

【衆に示して云く】 鹿を指して馬と爲し、土を握つて金と成す。舌上に風雷を起し、眉間に血刃を藏す。坐ながらに成敗を觀、立どころに死生を驗む。且く道へ、是れ何の三昧ぞ。

【擧す】 ① 麻谷、錫を持して章敬に到り、禪牀を遠ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。(可憐だ禪有り。) 敬云く、「是是。」(且く一半を信す。) 谷、又南泉に到り、禪牀を遠ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。(來朝更に楚王に獻じて看よ。) 泉云く、「不是不是。」(也た且く一半を信す。) 谷云く、「章敬は是と道ひ、和尚は何としてか不是と道ふ。」(棺木裏に睡眠す。) 泉云く、「章敬は即ち是、是れ汝は不是。」(雪上に霜を加ふ。) 此れは是れ 風力の所轉、終に敗壞を成す。(人を殺しては須らく血を見るべし。)

【頌に云く】 是と不是と。(細腰の鼓子兩頭打つ。) 好し、捲積を看るに。(頭を刺して裏許に在き了れり。) 抑するに似、揚するに似たり。(手擦手捺。) 兄たり難く弟たり難し。(頭高頭低。) 縦也彼れ既に時に臨む。(手を翻せば是れ雲。) 奪也我れ何ぞ特地ならん。(手を覆せば是れ雨。) 金錫一たび振うて太だ 孤標。(塵を脱して俗を離る。) 繩牀一たび遠つて閑りに遊戯す。(行に因つて臂を掉ふ。) 叢林擾擾として是非生ず。(矮子戯を看る。) 想像る 觸體前に鬼を見ることが。(家に白澤の圖有れば、必ず是の如きの妖怪なし。)

第十七則 法眼毫釐

姓は趙氏、年二十三にして百丈に參じ、遂に印記を受けて瀉山に住す、瀉仰宗の祖。

① 仰山惠寂禪師、韶州の人、俗姓は葉氏、瀉山に參じて法嗣し、共に瀉仰宗の祖となる。

② 人々自己の心田中を指す。

③ 瀉山を指す。

④ 瀉山も家門が衰へしを以て大いに慚愧し、子孫の爲に餘りに親切なること。

⑤ 秦の二世の時、趙高が鹿を呼んで馬と云ひし故事、今は師家分上の自由の手重を云ふ。

⑥ 麻谷寶徹禪師、馬祖道一禪師の法嗣。章敬も南泉も共に馬祖の法嗣なるが爲、麻谷とは同參の間なり。

⑦ 楞嚴經に出づ、此の身の妄縁を指す。

⑧ 續は續にも作る、落し牢(あな)の意、獸類を捕へるわざ、師家の學者を束縛するの意。

⑨ 放行にして章敬に當る。

⑩ 把住にして南泉に當る。

⑪ 已下麻谷に當りて云ふ。

⑫ 天下我れ一人と云ふ意。

⑬ 自己より種々持ち出して化生を見ることが、本來無一物の意。

【衆に示して云く】 ① 一雙の孤鷹、地を搏つて高く飛び、一對の鴛鴦、池邊に獨立す。② 箭鋒相拄ふことは且く致く、③ 鋸解秤錘の時如何。

【擧す】 ④ 法眼、⑤ 脩山主に問ふ、「毫釐も差あれば天地懸かに隔たる、汝作麼生か會す。」(誰か敢て動著せん。)脩云く、「毫釐も差あれば天地懸かに隔たる。」(百草を闢はしむること甚麼の難きことか有らん。)眼云く、「慙麼ならば又争か得ん。」(鐵山横はつて路に在り。)脩云く、「某甲只だ此の如し、和尚又如何。」(鼻頭を振轉す。)眼云く、「毫釐も差あれば天地懸かに隔たる。」(將に謂へり別に有りと。)脩、便ち禮拜す。(錯を將て錯に就く。)【頷に云く】 ⑥ 秤頭蠅坐すれば便ち敬傾す。(他の一星を護じ過さず。)萬世の權衡不平を照す。(斗満ちて秤錘住す。)片兩錘銖、端的を見るも、(錯つて認むること莫れ。)⑦ 終に歸して我が定盤星に輪く。(鈞頭の意を領取せよ。)

第十八則 趙州狗子

【衆に示して云く】 ① 水上の葫蘆、按著すれば便ち轉ず。② 日中の寶石、

① 宗師家の作略を云ふ。
② 作家と作家の商量を云ふ。
③ 解不得の俗語、即ち如何なる鼎も鐵錘を挽き切ること能はざるが如し。
④ 法眼宗の祖、清涼文登禪師を指す、羅漢院の地藏桂琛禪師の法嗣。
⑤ 前の十二則に出づ、法眼とは同參なり。
⑥ 三祖鑑智禪師の信心銘に出づ。
⑦ 秤竿の上に分別を入れること。
⑧ 權は秤玉、衡は秤竿、公案の秤を以て學者を試むこと。
⑨ 安智の定盤星、秤の目を一定の處に置いて、何物が來ても日方を知ると云ふ意。

色に定れる形無し。無心を以ても得べからず、有心を以ても知るべからず。沒量の大人、語脈裏に轉卻せらる。還つて免れ得る底有りや。

【擧す】 僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性の有りや也た無しや。」(街を闌り塊を趁ふ。)州云く、「有。」(也た曾て添へず。)僧云く、「既に有、甚麼と爲てか卻つて。這箇の皮袋に撞入するや。」(一欸に便ち招く、自領出頭。)州云く、「他の知つて故に犯すが爲なり。」(且く招承すること莫れ、是れ偏を道ふにあらす。)又僧有り問ふ、「狗子に還つて佛性有りや也た無しや。」(一母の所生。)州云く、「無。」(也た曾て滅せず。)僧云く、「一切衆生皆佛性有りと、狗子什麼としてか卻つて無なる。」(慈狗、鶴子を趁ふ。)州云く、「伊に業識の在り有るが爲なり。」(右具に前の如し、欸に據つて案に結す。)

① 嚴頭の語、師家の脚下を探ることとは不可能なる意。
② 師家の無所住の處を云ふ、即ち本則の趙州の境界を指す。
③ 狗子を指す。
④ 趙州或る僧に對しては有と答へ、或る僧に對しては無と答ふ、趙州の境界は到底常人の探ること能はざるところなり。
⑤ 姜子牙の故事、即ち普通の事では何の用にもならぬ、須らく命を捨て、初めて得べし。
⑥ 有と云へば有に執し、無と云へば無に著するを云ふ。
⑦ 喧しい貌、雜亂の義。
⑧ 已下趙州の境界を云ふ。
⑨ 秦王が簡相如の意を知らざりし如く、二人の僧も趙州の腹を知らずして、有無に執着するを云ふ。
⑩ 韶陽とは雲門大師を云ふ。
⑪ 第二義門に下りて學人のため

家初めを慎まざることを。(一言口より出で、驕馬も追ひ難し。)瑕疵を指
點して還つて壁を奪ふ。(白拈巧偷。)秦王は識らず蘭相如。(當面に蹉過
す。)

第十九則 雲門須彌

【衆に示して云く】 我は愛す 韶陽新定の機、一生人の爲に釘楔を抜く。
甚としてか有る時は也た門を開いて膠盆を掇出し、路に當つて陷穽を鑿
成す。試みに揀辨して看よ。

【擧す】 僧、雲門に問ふ、「不起一念還つて過有りや也た無しや。」(言清
く行濁る漢。)門云く、「須彌山。」(險。)

【頌に云く】 不起一念、須彌山。(一句に便ち了す。)韶陽の法施、意慳む
に非ず。(天童も也た少からず。)肯ひ來らば兩手に相分付せん。(只だ恐らくは爾が承當不下ならんこと
を)擬し去らば千尋攀づ可らず。(徒に斫額を勞す。)滄海濶く、(天を涵し日に浴し、涯岸無し。)白雲
閑なり。(鶴に伴ひ風に隨つて自由を得たり。)毫髮を將て其の間に著くること莫れ。(已に太多生。)假
鶏の聲韻我れを謾じ難し。(眞、偽を掩はず。)未だ肯て模胡して關を放過せず。(西天合殿なり。)

第二十則 地藏親切

【衆に示して云く】 入理の深談は、三を嘲り四を擲く、長安の大道は、七縦八横。忽然として口
を開いて説破し、歩を擧げて蹈著せば、便ち、高く鉢囊を掛け、拄杖を拗折すべし。且く道へ、誰か
是れ其の人ぞ。

【擧す】 地藏、法眼に問ふ、「上座何くにか往くや。」(人を羅織して作麼せ
ん。)眼曰く、「進運として行脚す。」(草鞋錢を索め去れ。)藏云く、「行脚
の事作麼生。」(果然として放不過。)眼云く、「不知。」(何ぞ早く恁麼に道は
ざる。)藏云く、「不知最も親切。」(就身打劫。)眼、豁然として大悟す。
(險んど盤纏を費さんとはす。)

【頌に云く】 而今參じ飽いて當時に似たり。(吾れ猶ほ昔人のごとくにして
昔人に非ず。)簾織を脱盡して不知に到る。(猶ほ這箇の在る有り。)短に
任せ長に任せて剪綴することを休めよ。(枉げて工夫を費す。)高きに隨ひ
下きに隨つて自ら平治。(心力を勞せず。)家門の豊儉時に臨んで用ふ。(鹽
醋を闕くことを得ず。)田地優游歩に信せて移す。(行かんと要すれば即ち行

に説法し、種々と試験するこ
とを云ふ。
① 前念後念少しも念慮なきこと
ろを云ふ。
② 須彌山、妙高山と云ふ高き山、
意識不到の處を云ふの意。
③ 史記に出づ、孟嘗君が秦のた
めに殺されんとせし時、夜半
に逃れて函谷關に来る、假鶏
の聲をなして長を報じ、關を
開いて通行することを得たり
と、即ち宏智が門番をして如
何に假鶏の聲韻をなすとも關
門を通行させじと云ふ意。模
胡はゆりちらしたといふ意な
れば、どんよりとして明かな
らずなり。似せ例である。

④ 第六十八則を見よ。
⑤ 人々自己の本家郷を指す。
⑥ 十年二十年實參實究せよとの
意。
⑦ 縦に行き、横に行く、即ち足
に任せて行脚すること。
⑧ 大悟しても當人は元來圓成、
少しも相違なきを云ふ。
⑨ 迷悟、凡聖、有無、得失を全
然解脱せしこと。
⑩ 長者は長法身、短者は短法
身。
⑪ 法眼の境界の無所得なるを云
ふ。

く。三十年前行脚の事。(思量すべき没し。)^①分明に辜負す一雙の眉。(舊に依つて眼上に在り。)

第二十一則 雲巖掃地

【衆に示して云く】 迷悟を脱し聖凡を絶すれば、多事無しと雖も、主賓を立て貴賤を分つことは別に是れ一家、材を量つて職を授くることは即ち無きにあらず。^②同氣連枝、作麼生か會せん。

【擧す】 雲巖掃地の次、(沙彌行童、氣力を得ず。)^③道吾云く、「太區區生。」(兵を埋めて鬪を挑む。)^④巖云く、「須らく知るべし、區區たらざる者有ることを。」(惜むべし話兩概と作る。)^⑤吾云く、「恁麼ならば即ち第二月ありや。」(豈に止だ第二のみならんや、百千萬箇。)^⑥巖、箒掃を提起して云く、「這箇は是れ第幾月ぞ。」(水晶宮裏より出頭し來る。)^⑦吾、便ち休し去る。(盡く不言の中に在り。)^⑧玄沙云く、「正に是れ第二月。」(一人虚を傳ふれば、萬人實と傳ふ。)^⑨雲門云く、「奴は婢を見て殷勤。」(邪に隨つて箒箕を撲つ。)

【頷に云く】 借り來つて聊爾として門頭を了す。(當處に發生し、)用ふるこ

① 悟らぬ前も眉毛は眼上にあり、悟つた後も眉毛は眼上にありとの意。

② 兄弟同參の商量に就いて如何と云ひ、本則の雲巖道吾を指す。

③ 雲巖曇嚴禪師、藥山惟嚴禪師の法嗣にして、洞山良价禪師の嚴師なり。

④ 道吾圓智禪師、藥山惟嚴禪師の法嗣にして、雲巖と同參なり。

⑤ コモくとして掃除を勤めるとの意。

⑥ 區區と區區たらざるものと二つあること。

⑦ 玄沙師備禪師、雪峯義存禪師の法嗣。

とを得て宜しきに隨つて即便ち休す。(隨處に滅盡す。)^①象骨巖前蛇を弄するの手。(他人を道はんと欲せば、)兒の時の做處老いて差を知るや。(先づ自己を治めよ。)

第二十二則 巖頭拜喝

【衆に示して云く】 人は語を將て探り、水は杖を將て探る。撥草瞻風は尋常用ふる底なり。忽然として箇の^②焦尾の大蟲を跳出せば、又作麼生。

【擧す】 巖頭、徳山に到る。門に跨つて便ち問ふ、「是れ凡か是れ聖か。」(這の賊。)^③山、便ち喝す。(獨體を裂破す。)^④頭、禮拜す。(未だ好心に當らず。)^⑤洞山聞いて云く、「若し是れ^⑥豁公にあらずんば大いに承當し難からん。」(幣を厚くし、言を甘にす。)^⑦頭云く、「洞山老漢、好惡を識らず。(卻つて又著忙す。)^⑧我れ當時一手擦一手捺。」(我れ豈に知らんや。)

【頷に云く】 來機を挫き、(風行けば草偃す。)^⑨權柄を總ぶ。(符到つて奉行す。)^⑩事に必行の威あり、(佛手も遮り得ず。)^⑪國に不犯の令あり。(誰か敢て當頭せん。)^⑫賓、奉を尙んで主驕り、(下は以て上を風刺し。)^⑬君、諫を忌

① 奴は象骨、婢は道吾に當る、話の下劣を云ふの意。

② 象骨巖とは雪峯の居處、象骨山の險峻よりして、響峰の氣鋒の高きを云ふ、此の一句は玄沙や雲門が出て來りて、響峰に戯れたと云ふ意。

③ 何子容の語に、「虎化して人となる、唯だ尾のみ化せず、依つて尾を燒くと云ふ、即ち大虎を指すも、今は本則の巖頭に當る。

④ 巖頭全養禪師、徳山宣鑑禪師の法嗣にして、響峰の師兄。

⑤ 洞山良价禪師、雲巖の法嗣、曹洞宗の祖。

⑥ 巖頭のこと。

⑦ 徳山に對して云ふ。

⑧ 巖頭に對して云ふ。

⑨ 賓は洞山に當り、主は巖頭に當る。

んで臣佞す。(上は以て下を風化する。)底の意ぞ巖頭、徳山に問ふ。(然も父子、師を興すと雖も、)一擽一捺、心行を看よ。(未だ干戈相待することを免れず。)

第二十三則 魯祖面壁

【衆に示して云く】 達磨九年呼んで壁觀と爲す。神光三拜、天機を漏泄す。如何が蹤を掃ひ跡を滅し去ることを得ん。

【擧す】 魯祖凡そ僧の來るを見れば、便ち面壁す。(相見了也。)南泉聞いて云く、「我れ尋常他に向つて、空劫以前に承當せよ。(考へざるに自ら招く。)佛未だ出世せざる時に會取せよと道ふすら、(和尚會すや、也た未だしや。)尙ほ一箇半箇を得ず。(只だ栓索を漏すが爲なり。)他恁麼ならば驢年にし去らん。(忙者は不會。)

【頌に云く】 淡中に味有り。(誰か懶をして鹽を添へ醋を著けしめん。)妙に情語を超ゆ。(別に再び商量せん。)綿綿として存するが如くにして分象の先なり。(已に第二に落つ。)兀兀として愚の如くにして分道貴し。(人の價を著る無し。)玉、文を雕つて以て淳を喪し、

① 達磨大師は少林寺に於て九年面壁坐禪す、時の人は壁觀婆羅門と云ふ。

② 二祖惠可大師、名は神光、洛京武牢の人、少にして老莊の學に志し、達磨の少林に默坐するや、三拜して衣法の付囑を受く。

③ 魯祖法雲禪師、馬祖に參じて法を嗣ぐ、南泉の法弟なり。

④ 父母未生以前と云ふに同じ。

⑤ 佛法不現前の時を云ふ。

⑥ 他は魯祖を云ふ、魯祖の如きは何年費しても駄目であると云ふことなれど、凡にして妙趣あり、頌を味ふべし。

⑦ 魯祖の境界、云ひ得て餘りあり。

⑧ 兀兀とは不動の貌。

(和尚手高し。)珠、淵に在つて自ら媚ぶ。(少賣弄。)十分の爽氣分消く暑秋を磨し、(體露金風。)一片の閑雲兮遠く天水を分つ。(好事、魔多し。)

第二十四則 雪峯看蛇

【衆に示して云く】 東海の鯉魚、南山の鼈鼻、普化の驢鳴、子湖の犬吠、常途に墮せず異類に行かず、且く道へ是れ什麼人の行履の處ぞ。

【擧す】 雪峯、衆に示して云く、「南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人切に須らく好看すべし。」(坐具を提起して云く、這箇是れ情ひ來る底にあらず。)長慶云く、「今日堂中大いに人有つて、喪身失命す。」(風を聞いて便ち颯る。)僧、玄沙に舉似す。(疊すること三に過ぎず。)沙云く、「須らく是れ我が稜兄にして始めて得べし。(狐朋狗黨。)然も是の如くなりと雖も我れは即ち不恁麼。」(別に一條の長有らば便ち請ふ拈出せよ。)僧云く、「和尚作麼生。」(毒蟲頭上に痒を措く。)沙云く、「南山を用ひて作麼かせん。」(只だ者の鼈鼻猶ほ分外と爲す。)雲門、拄杖を以て峯の面前に擲向して怕る、勢を作す。(何ぞ自ら己命を傷ふことを得たる。)

① 南泉の點驗に依つて雲起れども、無心に境に塵の妨げなし。

② 雲門の語、第六十一則を見よ。

③ 雪峯の語、本則を見よ。

④ 普化和上は盤山寶積禪師の法嗣、即ち馬祖の法孫に當る、臨濟義玄禪師の化を助く、一日臨濟云く、「還漢大似二頭驢」と、師便ち驢鳴を作すと云ふ。

⑤ 子湖利隆禪師、門下に於て牌を立て、曰く、「子湖一隻の狗云」と。

⑥ 雪峯義存禪師、泉州の人、徳

【頰に云く】 玄沙は大剛、(機に當つて父に譲らず。)長慶は勇少し。(義を見
て爲す。)南山の鼈鼻死して用なし。(條き斷貫索を擔ふ。)風雲際會、^①頭角
生ず。(時來れば蚯蚓も蛟龍と作る。)果して見る、^②詔陽手を下して弄する
を。(忍俊不禁。)手を下して弄す。(弄不出ならば即ち兩廻三度。)激電光中
變動を看よ。眼を眨すれば喪身失命す。我れに在つてや能く遣り能く呼
ぶ。(少賣弄。)彼れに於てや擒あり縦あり。(七寸手に在り。)底事ぞ如
今阿誰にか付するや。(萬松老漢。)冷口人を傷れども痛みを知らず。(阿
耶阿耶。)

第二十五則 鹽官犀扇

【衆に示して云く】 刹海涯り無きも當處を離れず、塵劫前の事盡く而今に
在り。試みに伊をして靦面に相呈せしむれば、便ち風に當つて拈出するこ
とを解せず。且く道へ過什麼の處にか在る。

【擧す】 鹽官、一日侍者を喚ぶ、「我が與に、犀牛の扇子を過し來れ。」
(要且つ他を少くことを得ず。)者云く、「扇子破れぬ。」(未だ擧せざる時卻つ

て完全。官云く、「扇子既に破れなば、我れに、犀牛兒を還し來れ。」(道ふ
ことを見ずや、破ると、何ぞ話を領せざる。)者、對ふる無し。(扇子猶ほ在
り、有りと雖も無きが如し。)資福、一圓相を畫いて、中に於て一の牛の
字を書す。(巧を出し行を新にして、能く做して賣ることを會す。)

【頰に云く】 扇子破るれば犀牛を索む。(一做さざれば二休せず。) 椀擊
中の字に來由あり。(強ひて道理を説くが如し。)誰か知らん 桂穀千年の
魄。(根を千丈に埋む。)妙に通明一點の秋と作らんとは。(現世に苗を生
す。)

第二十六則 仰山指雪

【衆に示して云く】 氷霜色を一つにし、雪月光を交ふ。法身を凍煞し、
漁父を清損す。還つて賞玩に堪へんや也た無しや。

【擧す】 仰山、雪師子を指して云く、「還つて此の色を過ぎ得る者有り
や。」(仰山覺えず平地に喫交す。) 雲門云く、「當時便ち與に推倒せん。」
(缸を奈何ともせず、辱斗を打破す。) 雪竇云く、「只だ推倒を解して扶起を

山宣鑑禪師に法を嗣ぎて象骨
山に法を布く。
①此の當時、南山に鼻頭の鼈に
似たる毒蛇ありと云ふ、雪峰
これに依りて宗旨を擧揚す。
②長慶慧稜禪師、雪峰門下の隨
一。
③玄沙師備禪師、雪峰門下の隨
一。
④雲門文偃禪師、雪峰門下の隨
一にして、已上の三名の玄機
如何、切に實參實究を要す。
⑤頭角は雲門に依つて生じたる
の意。
⑥詔陽は雲門大師を云ふ。
⑦我れは天童宏智自身を指す。
⑧彼は玄沙、長慶、雲門に當り
て云ふ。
⑨天童が大家に向つて云ふ、汝
等終日毒蛇に咬まれて、その
痛みを知らぬかの意。
⑩杭州鹽官の梅昌院齊安國師、
馬祖の法嗣にして義寧禪師の

嚴師なり、義寧禪師は日本に
來りて檀林皇后の師となる。
⑪犀牛の角にて骨を作りし扇子
といふ、また一説には犀牛玩
月の圓を畫きし扇子とも云
ふ。
⑫扇子の本體本性と見て良し。
⑬吉州資福寺の如寶禪師、仰山
惠寂禪師の法孫なるが故に、
一圓相を用ふ、鴻仰宗の宗風
なり。碧巖第三十三則參照。
而して是の本則に就いて、碧
巖第九十一則には、資福の代
語の外に、投子、石霜、保福
等を載す。
⑭椀擊は曲れる貌にして圓相に
比す。
⑮桂は月のこと、穀は車の輻條
を云ふ、即ち圓相を指す、魄と
は月輪の光なき輪廓を云ふ、
これも圓相を指すと思へ。
⑯一圓相の境界に就いて云ふ。
⑰白色清淨の一色に就いて云

解せず。(路に不平を見て、劍を抜いて相助く。)

【頰に云く】一倒一起雪庭の師子。(恰も箇の活底に似たり。)^①犯すことを慎んで仁を懷き、法を識るものは恐る。爲すに勇んで義を見る。(路に不平を見る。)^②清光眼を照すも家に迷ふに似たり。(東西辨せず。)^③明白身を轉ずるも還つて位に墮す。(更に一層樓に上る。)^④衲僧家了に寄ること無し。(且く一生を過す。)^⑤同死同生何れをか此とし何れをか彼とせん。(刀斧斫れども開けず。)^⑥暖信梅を破つて、春、寒枝に到り、(返魂香を收得す。)^⑦涼颯葉を脱して、秋、潦水を澄ましむ。(來つて塗毒鼓を搦つ。)

第二十七則 法眼指簾

【衆に示して云く】^①師多ければ脈亂れ、法出で、^②姦生す。無病に病を醫するは、以て傷慈なりと雖も、條有れば條を攀づ、何ぞ舉語を妨げん。【擧す】法眼、手を以て簾を指す。(知らずと道ふこと莫れ、見すと道ふこと莫れ。)^③時に二僧あり、同じく去つて簾を捲く。(行を同じうして歩を同じうせず。)^④眼云く、「一得一失。」(劍下に身を分つ。)

① 仰山惠寂禪師、第十五則に出づ。
② 雲門文偃禪師、第十一則に出づ。
③ 雪竇從顯禪師、雲門宗の人、即ち雲門文偃一香林澄遠一智門光祥一雪竇從顯、碧巖集の本則、頰古を作る。
④ 雲門に對して云ふ。
⑤ 雪竇に對して云ふ。
⑥ 雲門の境界を歌ふ。
⑦ 潦水とは水溜りを指す。
⑧ 師を醫者に比して云ふ。
⑨ 姦とは喧しいこと、即ち議論の生ずることを云ふ。
⑩ 同じく簾を捲いて、一は得、一は失とは如何、語に就いて是非を云へば白雲萬里なり。
⑪ 不分を擧揚す。
⑫ 晋書に出づ、北窓下に高臥して、世の治亂に關せざる人。

【頰に云く】^①松は直く棘は曲れり、鶴は長く鳧は短し。(動著することを得ず。)^②義皇世の人、俱に治亂を忘る。(荷蘆提げて肥を整得ず。)^③其の安や潛龍淵に在り、佛眼觀れども見えず。(其の逸や翔鳥、絆を脱す。)^④祈願して望むとも及ばず。(何ともすること無し。)^⑤祖禪西來して、(上梁正ならず。)^⑥裏許得失相半ばす。(下柱參差。)^⑦蓬は風に隨つて空に轉じ、(業識茫茫として本の據るべき無し。)^⑧虹は流を截つて岸に到る。(順水に帆を張る、快便に逢ひ難し。)^⑨箇の中靈利の衲僧、(街に罵る醉漢、誰か敢て承當せん。)^⑩清涼の手段を取取せよ。(我が這裡も也た有り、是れ其の人に遇ふと罕なり。)

第二十八則 護國三懺

【衆に示して云く】^①寸絲を挂けざる底の人、正に是れ裸形外道。^②粒米を嚼まざる底の漢、斷めて焦面の鬼王に歸す。直饒ひ聖處に生を受くるも、未だ竿頭の險墮を免れず。還つて羞を掩ふ處有り麼。【擧す】僧、護國に問ふ、「鶴、枯松に立つ時如何。」(歩々高きに登ること易く、)國云く、「地下底一場の懺懺。」(心々放下することは難し。)^③僧云

① 周易に出づ、英俊の時、到らざる爲、安閑と滑んで世を窺ふこと。
② 絆とは羈絆にして、高く飛ぶ鳥の自由なるを云ふ。
③ 祖禪とは先祖の御廟、法眼に就いて云ふ。
④ 已下法眼の境界を歌ふ。
⑤ 天童の會下に對しての示衆。
⑥ 清涼文益禪師、即ち法眼を指す。
⑦ 何等所求せざる底の人を指す。
⑧ 法喜禪説を以て食となす底の人を指す。
⑨ 懺懺とは辱恥なり、はぢなり。
⑩ 會昌五年八月下旬、唐の武宗皇帝は僧尼二十六萬人に對して歸俗せしめ、佛殿法堂等を改め、佛典教書を盡く燒く、これを會昌の廢佛毀釋と云ふ。

く、「滴水滴凍の時如何。」(法身被無くして寒に禁へず。)國云く、「日出でて後一場の懺悔。」(雪消して死人を露出し來る。)僧云く、「會昌沙汰の時、護法善神甚麼の處に向つて去るや。」(點すれば即ち到らず。)國云く、「三門頭の兩箇、一場の懺悔。」(到れば即ち點せず。)

【頰に云く】 壯士稜々として鬢未だ秋ならず。(天の到らざるを恨む。)男兒憤せずんば侯に封せられず。(程を貪ること太だ速かなり。)翻つて思ふ清白傳家の客。(已に太多生。)耳を洗ふ溪頭、牛に飲はず。(末後太だ過ぐ。)

第二十九則 風穴鐵牛

【衆に示して云く】 運棊鈍行、斧柯を爛卻す。眼轉じ頭迷ひ、杓柄を奪ひ將ふ。若し也た鬼窟裏に打在し、死蛇頭を把定せば、還つて變豹の分あらんや也た無しや。

【舉す】 風穴鄂州の衙内に在つて、上堂に云く、「祖師の心印狀鐵牛の機に似たり。(針筒不入。)去れば即ち印住し、(鼻孔を拽廻す。)住すれば即ち印

① 壯士とは三十前後、稜稜とは威勢よき貌。

② 許由は嘗て堯より天下を譲ると云はれて、潁水の濱に來り、汚れたることを聞きたりとして耳を洗ふ、時に巢父あり、牛を牽き來り、水を飲ましめんとせしに、許由の耳を洗ふ由を聞き、また濯ふて上流に行き、牛に水を飲ましめたりと云ふ。

③ 爛却のこと第五十七則を見よ。

④ 變豹のこと第四十三則を見よ。

⑤ 風穴延沼禪師、餘杭の人、臨濟四世の孫、南院惠顯禪師の法嗣。

⑥ 内に智徳ある人を尊崇して云ふ。

⑦ 鐵牛の機有りと言ふて却つて何等の働きをも爲さぬこと。

⑧ 風穴の言葉にハタハ措著したことを云ふ。

⑨ アツ／＼する貌。

⑩ 黃石公の語、史記に出づ。

⑪ 向上の境を云ふ、吡盧とは吡盧遮那如來のこと、光明遍照と譯す、即ち法身大日如來とも云ふ。

⑫ 向下の爲人底の境を指す。

⑬ 負墮は失敗の義。

⑭ 風穴の手段の尋常ならざることを云ふ。

破す。(脚跟を截斷す。)只だ去らず住せざるが如きは、印するが即ち是か印せざるが即ち是か。(泥裏に土塊を洗ふ。)時に盧陂 長老あり、出でて問うて云く、「某甲鐵牛の機あり、請ふ師、印を搭せざれ。」(宛も逆水の波有り。)穴云く、「鯨鯢を釣つて巨浸を澄しむるに慣れて、卻つて嗟す蛙歩の泥沙に驥することを。」(引魂の幡子搖氣袋。)陂 佇思す。(已に鬼門關を過ぐ。)穴喝して云く、「長老何ぞ進語せざる。」(已に崖岸に臨んで更に一推を與ふ。)陂 擬議す。(許多の時節、甚の處にか去來す。)穴打つと一拂子して云く、「還つて話頭を記得するや、試みに舉せよ看ん。」(人の爲にするは爲に徹す、人を殺しては血を見る。)陂、口を開かんと擬す。(猶ほ自ら燒埋に伏せず。)穴又打つと一拂子す。(仍ほ三十棒を少く。)牧主云く、「佛法と王法と一般なり。」(官と做ることを會せずんば、傍州の例を看よ。)穴云く、「箇の什麼をか見る。」(卻つて好し一拂子を與ふるに。)牧云く、「當に斷すべきに斷せざれば、返つて其の亂を招く。」(自ら罵り自ら招く。)穴便ち下座。(意を得ること濃かなる時正に好し休するに。)

【頰に云く】 鐵牛の機(哮吼すや也た未だしや。)印住印破。(鈎錐手に在り。)吡盧頂額を透出して行き、(將上足らす。)化佛舌頭に卻來して坐す。(匹下餘り有り。)風穴衝に當つて、(世情冷暖を看る。)盧陂 負墮す。(人面高低を逐ふ。)棒頭喝下。(豈に分説す容けんや。)電光石火。(消停を待たず。)歷々分

明珠盤に在り、撥せざるに自ら轉ず。眉毛を眨起すれば還つて蹉過す。(聲に和して使ち打つ。)

第三十則 大隨劫火

【衆に示して云く】 諸の對待を絶し、兩頭を坐斷す。疑團を打破するに那ぞ一句を消ひん。長安寸歩を離れず。太山只だ重さ三斤。且く道へ、甚麼の令に據つてか敢て恁麼に道ふや。

【擧す】 僧、大隨に問ふ、「劫火洞然として、大千俱に壞す、未審し、這箇壞か不壞か。」(愁人、愁人に向つて説くこと莫れ。隨云く、「壞。」「早く是れ那ぞ堪へん。僧云く、「恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや。」「目前に驗むべし。隨云く、「他に隨ひ去る。」「下坡に走らず、更に一推を與ふ。」「僧、龍濟に問ふ、「劫火洞然として大千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か。」「同病相憂ふ。濟云く、「不壞。」「契頭を打破し、鼻孔を振轉す。僧云く、「甚と爲てか不壞なる。」「又恁麼にし來る。濟云く、「大千に同じきが爲なり。」「(生鐵鑄成す。)

【頌に云く】 壞と不壞と、(佛手も揀不出。他に隨ひ去るや大千界。没量の大人語脈裏に轉卻せらる。句裏に鈎鎖の機なし。(牙に粘じ齒に帯ひること亦少からず。脚頭多く葛藤に礙へらる。誰か備をして枝を生じ蔓を引かしのめん。會か不會か、(心忙しく手急し。分明底の事丁寧瞭だし。(是れ盲者の過なり、日月の咎にあらず。)) 知心は拈出して商量すること勿れ。(牙人販子を見る。我が當行に相買賣するに輸く。(堂屋裏に楊州を販ぐ。))

【擧す】 雲門垂語して云く、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」(七に落ち八に落ち了れり。衆無語。(卻つて露柱と同參。自ら代つて云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」「張翁酒を喫して李翁醉ふ。))

【頌に云く】 一道の神光、(上、天を柱へ、下、地を柱ふ。)) 初めより覆藏せず。(淨裸裸、赤洒々。)) 見縁を超ゆるや是にして是なし、(烈火焰中眨眼すること休めよ。)) 情量を出づるや當つて當ることなし。(劍輪鋒外

【衆に示して云く】 向上の一機、鶴鶩漢に沖る。當陽の一路、鶴新羅を過ぐ。直饒ひ眼流星に似たるも、未だ口、匾檐の如くなることを免れず。且く道へ、是れ何の宗旨ぞ。

第三十一則 雲門露柱

【擧す】 雲門垂語して云く、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」(七に落ち八に落ち了れり。衆無語。(卻つて露柱と同參。自ら代つて云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」「張翁酒を喫して李翁醉ふ。))

【頌に云く】 一道の神光、(上、天を柱へ、下、地を柱ふ。)) 初めより覆藏せず。(淨裸裸、赤洒々。)) 見縁を超ゆるや是にして是なし、(烈火焰中眨眼すること休めよ。)) 情量を出づるや當つて當ることなし。(劍輪鋒外

【擧す】 雲門垂語して云く、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」(七に落ち八に落ち了れり。衆無語。(卻つて露柱と同參。自ら代つて云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」「張翁酒を喫して李翁醉ふ。))

①長安は帝都の名。
②太山は五山の隨一。
③益州大隨の法眞禪師、百丈の法孫にして、長慶大安禪師の法嗣。
④仁王護國般若波羅密多經の護國品第五に出づる偈文。
⑤大千とは三千大千世界の略、即ち全世界の意。
⑥這箇とは人人本具の心性を云ふ。
⑦五蘊皆空の意。
⑧この僧は前の僧と別人。
⑨龍濟は寺の名。

①壞と云ひ不壞と云ひ、共に言句を超越したるところに妙處あり。
②壞と云ひ、不壞と云ひ、五蘊六腑丸出して、その言句に付いて廻つてはならぬ。
③知音の者は何等言句を以て商量するの要なし。
④宗門向上の一機は、鶴とても見ることが出来ぬ。
⑤當陽の一路とは分明の義理を指す。
⑥言語も及ばぬこと、運八刻の意。
⑦匾檐とは荷ひ棒の如く、口をへの字にして何とも窮して言へないこと。
⑧古佛とは人々自己の佛。
⑨露柱とは草木國土一切萬法を指す。
⑩本來無東西、何處有南北、元是れ一空の消息を云ふ。
⑪人々具足の一道の神光を云

頭を廻すこと莫れ。巖華の粉たるや今蜂房蜜を成し、(神通廣大)野草の滋たるや今麝脐香を作す。(變化無方)隨類三尺一丈六。(主山は高く案山は低く、拄杖は長く拂子は短し)明々として觸處露堂堂。(面門を撈破して廻避する處無し。)

第三十二則 仰山心境

【衆に示して云く】海は龍の世界たり、隱顯優游。天は是れ鶴の家郷、飛鳴自在。甚と爲てか困魚は深に止り、鈍鳥は蘆に棲む。還つて利害を計る處ありや。

【擧す】仰山、僧に問ふ、「甚れの處の人ぞ。」(門を閉ぢて刷會す。)僧云く、「幽州の人。」(公驗明白。)山云く、「汝彼の中を思ふや。」(恰も忘るを待つ。)僧云く、「常に思ふ。」(熟慮忘じ難し。)山云く、「能思は是れ心、所思は是れ境。(元來更に能所を立つ。)彼の中には山河大地樓臺殿閣人畜等の物あり、思底の心を反思せよ、還つて許多般ありや。」(仁者自ら分別を生ず。)僧云く、「某甲這裏に到つて、總に有る事を見ず。」(猶は這箇有り。)山云く、

- ① 見は能見の人、縁は所縁の物。
- ② 妄想分別が無ければ顔々相對して無當の當體なり。
- ③ 本草綱目に出づ、巖石に生ずる無毒の花を采つて、大便を以て釀し蜜を作る、即ち臭前より神奇を生ずるの意。
- ④ 談苑に出づ、前と同意。
- ⑤ 一丈六は佛身、佛身が羅漢長者の爲に、三尺身を現して濟度せられしを云ふ。
- ⑥ 海にては龍が主人、天にては鶴が主人にて、自由自在と云ふ意、即ち仰山に當つて云ふこと。
- ⑦ 困魚鈍鳥の不自由なることを云ふ。
- ⑧ 深とは水溜りのこと、陂池也。
- ⑨ 彼の中とは本家郷を指して云ふ。
- ⑩ 信位とは一切萬法を指して云ふ。

信位は即ち是定、人位は未だ是ならず。(庭前の殘雪は日輪に消すべし、室内の紅塵をば誰をしてか掃はしめん。)僧云く、「和尚別に指示あること莫しや否や。」(便ち慈麼にし來る。)山云く、「別に有り別に無しといふは即ち中らず。(兩重の關を射透す。)汝が見處に據らば只だ一玄を得たり。(已に缸中の月有り。)得坐披衣向後自ら看よ。」(更に帆上の風を添ふ。)

【頌に云く】外るゝこと無うして容れ、(大として包まざる)こと無し。(礙ふること無うして冲る。(細として入らざる)こと無し。)門牆岸岸、(探頭すること莫くんば好し。)關鎖重重、(彈指するを消ひす。)酒常に酣にして客を臥さしめ、(喚び醒し來れ、打たん。)飯飽くと雖も農を頰す。(一坑に埋卻せん。)虚空に突出して今風、(妙翅を搏たしめ、)碧落の天を穿開す。海を踏翻して今雷游龍を送る。(驚蟄二月の節。)

第三十三則 三聖金鱗

【衆に示して云く】強に逢うては即ち弱、柔に遇うては即ち剛。兩硬相擊ては必ず一傷あり。且く道へ、如何が回互し去らん。

- ① 七尺單前に向つて驛下を照顧し、大いに冷暖自知せよとの意。
- ② 僧の迷ふて居る境界を歌ふ。
- ③ 眞實の飽參底の僧とは云へない。
- ④ 妙翅とは金翅なり、金翅とは鳥神にして、法華文句には迦樓羅と云ふ、この鳥は龍を以て食となし、常に翅を以て海を搏ち、水を聞いて之れを食ふと云ふ。
- ⑤ 前句と同じく仰山の自由なる働きを云ふ。
- ⑥ 納僧門下の自由なる働きを云ふ、本則に當つて考ふれば、強とは三聖、弱とは蜜蜂を云ふ。

【舉す】 三聖雪峯に問ふ、「網を透る金鱗未審し何を以てか食となす。」(綸を垂るゝことを待たずして、自ら鉤に上る。)峯云く、「汝の網を出で來らんを待つて、汝に向つて道はん。」(人に逢うては且く三分の話を説く。)聖云く、「一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず。」(靈山の授記も也た今日に似ず。)峯云く、「老僧 住持事繁し。」(腦後に腮を見る。)

【頰に云く】 浪級初めて昇るとき雲雷相送る。(天の到らざるを恨む。)騰躍稜稜として大用を見る。(速禮三拜。)尾を焼いて分明に禹門を度る。(急に眼を著けて看よ。)華鱗未だ背て蓋甕に淹せられず。(更に候黒有り。)老成の人衆を驚かさず。(安々帖々穩々當々。)大敵に臨むに慣れて初めより恐るることなし。(辱を受くること榮の如く、死を視ること生の如し。)泛泛として端に五兩の軽きが如し。(遠く觀れば不審し。)堆々として何ぞ骨千鈞の重きのみならんや。(近く觀れば分明。)高名四海復た誰か同じき。(天上に月を揀ぶ)介り立つて 八風吹けども動せず。(恰も曾てせざるに似たり。)

第三十四則 風穴一塵

【衆に示して云く】 赤手空拳にして千變萬化す、是れ無を將て有と爲すと

雖も、奈何せん假を弄して真に像ることを。且く道へ、還つて基本ありや也た無しや。

【擧す】 風穴垂語して云く、「若し一塵を立すれば 家國興盛す。(之を得れば本有り。)

一塵を立せざれば家國喪亡す。」(之を失すれば本無し。)

雪竇拄杖を拈じて云く、「是れ立か不立か。」還つて 同死同生底の衲僧ありや。」(無しとは道はず、只だ是れ少し。)

【頰に云く】 幡然として渭水に垂綸より起つ。(老いて心を歇めず。)

首陽清餓の人に何似ぞ。(少うして努力せず。)

只だ一塵に在つて 變態を分つ。(拄杖を拈起して云く、看よと。)

高名勳業兩つながら浪じ難し。(拄杖を放下して云く、雪竇猶は在りと。)

第三十五則 洛浦伏膺

【衆に示して云く】 迅機捷辯、外道天魔を折衝し、逸格超宗、曲げて上根利智の爲にす。

忽ち箇の一棒に打てども、頭を廻さざる底の漢に遇ふ時如何。

①三聖惠然禪師、臨濟の法嗣、第十三則に出づ。
 ②此の一句は難解、今、平易に云へば、網を透る金鱗とは普通佛法の修行とか、悟道とかを透り抜けて、所謂、歸安穩坐、太平無事の時を云ふ、此の時に於て矢張り坐禪すること、觀法するの、如何なることを以て佛祖惠命の相續をなすやの問意なり。
 ③一千五百人の善知識とは雪峯を指す、それでは私の間に對して答になつて居らぬとの意。
 ④寺用が多くて困るとの意、是れ三聖の機鋒を避けたる如何。

①三聖が并り行けば雪峯が送つて行くの意。
 ②士人初めて登第して宴を開く、之を燒尾の宴と云ふ、即ち魚化して龍となる、必らず尾を燒くの記事あり、また魚が禹門を渡れば必らず龍となると云ふ、故に是の句あり。
 ③已下雪峯の老練なる境界を歇ふ。
 ④維摩經佛國品に出づ、利衰毀譽稱讚苦樂の八風なり。
 ⑤盡十方法界を指す。
 ⑥同死は喪亡、同生は興盛に當る。
 ⑦太公望が周の文王より引き出されて、天下を太平に治めしを云ふ、即ち一塵を立するの意。
 ⑧首陽山に於て周の粟を食はずと云ひ、餓死したる伯夷叔齊を云ふ、即ち家國喪亡の意。
 ⑨變態とは興亡の二途を云ふ。

【擧す】 ① 洛浦、② 夾山に參す、禮拜せずして面に當つて立つ。(相逢うて馬より下らざるは、各自に前程有ればなり。) 山云く、「鶏鳳巢に棲む、其の同類に非ず、出で去れ。」(一手は推し一手は拽く) 浦云く、「遠きより風に越る、乞ふ師一接。」(探竿手に在り) 山云く、「目前に閑黎なく、此間に老僧なし。」(影草身に隨ふ) 浦、便ち喝す。(筋を盡し力を截る) 山云く、「住みね住みね、且く、草草忽忽なること莫れ、(會者は不忙、忙者は不會) 雲月はれ同じく溪山各異なり。(斜街暗巷、生客頭迷ふ) 天下の人の舌頭を截斷することは即ち無きに非ず。(只だ鈍頭の利を見る) 争か無舌の人をして解語せしめん。」(驢頭の方を見ず) 浦、無語。(長蛇陣前弓梢地を撲つ) 山便ち打つ。(意はざりき夾山卻つて臨濟と作らんとは) 浦此れより伏膺す。(藝は當行を壓す)。

【頰に云く】 ① 頭を搖し尾を擺ふ赤梢の鱗。(口香餌を貪り、身網羅に掛る) 徹底無依轉身を解す。(今日網底に拽在す) ② 舌頭を截斷して饒ひ術あるも、(君方に雪を掃ひて松子を尋ねよ) 鼻孔を拽廻して妙に神に通せしむ。(我れ已に棒を開いて茯苓を得) ③ 夜明簾外分風月晝の如し。(三光の

- ① 高名は伯耆叔齊、勳業は太公望。
- ② 殺佛越祖の行は上根上智の人に對して爲すの意。
- ③ 本則の洛浦に當りて云ふ。
- ④ 洛浦元安禪師、藥山惟儼禪師の法嗣にして、また夾山に參じて法を傳ふ。
- ⑤ 夾山善會禪師、華亭船子禪師の法嗣、船子は天王道悟禪師に法を嗣ぐ、天王は藥山と同じく馬祖の會下なり。
- ⑥ 夾山の探竿にして、汝は吾れの知音にあらずと抑す。
- ⑦ 疎忽の意。
- ⑧ 汝の居處と吾れの居處との相違を云ふ。
- ⑨ 伏膺とは能く心銘に奉持して守るの意。
- ⑩ 臨濟門下の赤梢鱗、洛浦の一喝に當りて云ふ。
- ⑪ 洛浦の一喝の當體。
- ⑫ 已下夾山の境界を歎ふ。

勢を借らす) 枯木巖前分花卉常に春なり。(潛かに一色の功を消す) ④ 吾人無舌人。(鼻孔裏に應諾せよ) 正令全提一句親し。(暗裏に横骨を抽ぶ) ⑤ 寰中に獨歩して明了了。(眞光は耀かす) 任從あれ天下樂んで欣欣たることを。(緘々は彼よりす、我に於て何をか爲ん)。

第三十六則 馬師不安

【衆に示して云く】 ① 心意識を離れて參するも、這箇の在るあり、凡聖の路を出で、學するも、已に ② 太高生。紅爐迸出す 鐵蒺藜、吾劍唇槍口を下し難し。鋒鋦を犯さず、試みに請ふ擧す看よ。

【擧す】 ③ 馬大師 不安。(未だ必ずしも維摩に似ず) 院主問ふ、「和尚近日尊位如何。」(常住 事忙はしうして、問候を少き得たり) 大師云く、「日面佛月面佛。」(是れ轉筋霍亂なること莫しや)。

【頰に云く】 ④ 日面月面、(觀著すれば即ち瞎す) 星流れ電巻く。(已に新羅を過ぐ) ⑤ 鏡は像に對して私なし。(一點も謾じ難し) 珠盤に在りて自ら轉ず。(拏捉すれども住らす) ⑥ 君見すや鉛錠の前百鍊の金。(瓶盆釵鈿券

- ① 已下天童の會下に對して示衆。
- ② 天子の居處、第四十四則參照。
- ③ 非思最底のところ。
- ④ 餘りに向上し過ぎるの意。
- ⑤ 鐵の蒺藜にして、軍旅に作りて敵の進路を防ぐ、本則の日面佛月面佛に當る。
- ⑥ 馬祖道一禪師、第六則參照。
- ⑦ 不安とは病氣を云ふ。
- ⑧ 佛名經に出づ、賢劫千佛の中の佛なり。
- ⑨ 少しも窺ひ知ること能はざるの意。
- ⑩ 日面月面の鏡は私なしとのこと。
- ⑪ 天童が會下に對して馬祖の手段の自在なることを示すの意。
- ⑫ 農民の大切にして居るものを取り上げること、既に悟道を珍重して居るのに、この悟道

孟盤(刀尺の下一機の絹。(袈裟衣冠襟領袖。)

第三十七則 瀉山業識

【衆に示して云く】 耕夫の牛を驅つて、鼻孔を拽廻し、餓人の食を奪つて、咽喉を把定す。還つて毒手を下し得る者ありや。

【擧す】 瀉山、仰山に問ふ、「忽ち人有つて、一切衆生但だ業識のみ有り、茫茫として本の據るべき無しと問はゞ、子作麼生か驗みん。」(馬は是れ官馬、印を須たす。)仰云く、「若し僧の來ることあらば、即ち召して云はん、某甲と。(腦後の一椎、來處を知らず。)僧首を廻さば、頂門上に三魂を去卻す。乃ち云はん、是れ甚麼ぞと。(爐竈の熱を趨ふて、更に一下を與ふ。)伊が擬議せんを待つて、(脚板底に七魄を鑽了す。)向つて道はん、唯だ業識茫茫たるのみに非ず、亦乃ち本の據るべきなしと。(生擒活捉。)瀉云く、「善いかな。」(苦口は親言を出す。)

【頷に云く】 一たび喚べば頭を廻す我れを識るや不や。(眞の自拈賊、甚の見難きことか有らん。)依倚として 蘿月又 鉤となる。(身を藏して影を露す。)千金の子纒かに流落して、(輒風破ると雖も、骨骸猶ほ存す。)漠漠たる窮途に計の愁あり。(小器は大量ならず。)

- ① 奪ひ取るの意。
- ② 把定とは吞吐不下の意。
- ③ 業識とは妄心分別を指す。
- ④ 僧の名を呼ぶこと。
- ⑤ 呼に應ずる是れ何物ぞ。
- ⑥ 人々この我を知りしや如何。
- ⑦ 髣髴の意、有に似、無に似たる貌。
- ⑧ 蘿はつた、かづら、即ち蘿に掛かる月を指す。
- ⑨ 三日月のこと。
- ⑩ 人々悉く長者の子なれど、自らこの流落の愁がある。

第三十八則 臨濟眞人

【衆に示して云く】 賊を以て子となし、奴を認めて 郎と作す。破木杓は豈に是れ先祖の鬻體ならんや。 驢鞍橋は又 阿爺の下領に非ず。 土を裂き芽を分つ時、如何が主を辨せん。

【擧す】 臨濟、衆に示して云く、「一無位の眞人あり。(基を安じ脚を定め了れり。)常に汝等が面門に向つて出入す。(背後底、彈。)初心未證據の者は看よ看よ。」(還つて眼を具するや。)時に僧ありて問ふ、「如何なるか是れ無位の眞人。」(還つて語を解すや。)濟、禪牀を下つて 擒住す。(爾更に諱む。)這の僧擬議す。(他の眞人を鈍滯す。)濟、托開して云く、「無位の眞人、是れ甚の 乾屎橛ぞ。」(大いに鉢を持し得ざるに似たり。)

【頷に云く】 迷悟相返し、(絲毫を隔てず。)妙に傳へて簡なり。(已に風煙を犯す。)春百花を拈かして今一吹し、(放去は較々危し。)力九牛を廻して今一挽す。(收來は太た速かなり。)奈ともすることなし。泥沙撥へども開けざることを。(我が眼本正し。)分明に塞斷す。甘泉の眼。(師に因つて故に邪なり。)忽然として突出せば 肆に横流せん。(禪牀を掀倒して怪むこと

- ① 自己の是と認めるもの、悉く非の意。
- ② 郎とは主人の意。
- ③ 木の破片を云ふ。
- ④ 驢馬の背に置く鞍骨を云ふ。
- ⑤ 老爺の下領の曲つた骨。
- ⑥ 類書纂要に出づ、如何にしてか眞正の王者を見出すやとの意、即ち眞正の悟道を如何にしてか證明するやとのこと。
- ⑦ 引き捕へること。
- ⑧ 突き放すこと。
- ⑨ 陰囊の器、即ち糞窟にして實に汚穢なるもの。無門關第二十一則には、雲門が佛を問へる僧に對して乾屎橛と答ふ。

を得ず。師復た云く、「險。」（拄杖を擲下して云く、一著を放過すと。）

第三十九則 趙州洗鉢

【衆に示して云く】 飯來れば口を張り、睡來れば眼を合す。面を洗ふ處に鼻孔を拾得し、鞋を攪る時脚跟に摸著す。那時話頭を蹉卻せば、火を把つて夜深けて別に竟めよ。如何が相應し去ることを得ん。

【擧す】 僧、趙州に問ふ、「學人乍入叢林、乞ふ師指示せよ。」（叢林に於て亦惡からず。）州云く、「喫粥了や也た未だしや。」（渾金璞玉）僧云く、「喫了る。」（久慣の衲僧も上座に如かず。）州云く、「鉢盂を洗ひ去れ。」（左猜することを得ず。）

【頤に云く】 粥罷は教へて鉢盂を洗はしむ。（快便逢ひ難し。）豁然として心地自ら相符す。（但だ今日のみに非ず。）而今參飽す叢林の客。（舊に依つて粥を喫し了れば、鉢盂を洗ひ去れ。）且く道へ其の間に悟有りや無しや。（一人虚を傳ふれば、萬人實と傳ふ。）

① 臨濟の爲人垂手を歌ふ。
② 臨濟の大力量と云ひ、擔住托開自由なるを歌ふ。
③ 僧の智解分別を云ふ。
④ 甘泉眼とは道眼、即ち宗旨眼を云ふ。
⑤ 師は天童、險は臨濟に當る。
⑥ 本分の自由を示す。
⑦ 佛道の作法を示し下されと乞ふ意。
⑧ 趙州と僧との相符を云ふ。
⑨ 天童が會下への示衆。
⑩ 自己の心機が自由に轉する處到底智眼を以て外より窺ふこと能はざるの意。
⑪ 元是れ空拳なり。
⑫ 空手なるが故に、物に應じて自由なり。
⑬ 乾峰和尚は洞山大師の法嗣、雲門は此の時乾峰の隨身なりき。
⑭ 乾峰は未だ到らざるかと自分に居り乍ら問ふ、是れ探竿なり。

第四十則 雲門白黑

【衆に示して云く】 機輪轉する處智眼猶ほ迷ふ、寶鑑開く時纖塵度らず。拳を開いて地に落ちず、物に應じて善く時を知る。兩及相逢ふ時如何が回互せん。

【擧す】 雲門、乾峯に問ふ、「師の答語を請ふ。」（空頭、頂額を没す。）峯云く、「老僧に到るや也た未だしや。」（早く簡れ汝に答へ了れり。）門云く、「恁麼ならば則ち某甲遲きに在り。」（讓るときは則ち餘り有り。）峯云く、「恁麼那恁麼那。」（切に忌む、恁麼に會することを。）門云く、「將に謂へり 侯白と、更に侯黑あり。」（好手中、好手無し。）

【頤に云く】 弦筈相啣み、（高低普く應ず。）網珠相對す。（左右原に逢ふ。）百中を發して箭箭虚しからず。（對揚準有り。）衆景を攝して光光礙ふる無し。（獨り耀いて私無し。）言句の總持を得。（語を出せば章を成す。）游戲の三昧に住す。（舉動合に拍つべし。）其の間に妙なるや宛轉偏圓（珠の盤に走るが如し。）必ず是の如くなるや縦横自在（令行の時を取らせよ。）

第四十一則 洛浦臨終

① 淮海集に出づ、侯白は大盜賊なり、その大盜賊を偽りて侯白の衣を盗みし者が女の侯黑なり、上に上のある意。
② 師の答語を請ふ境界。
③ 喫茶喫飯盡く自由のこと。

【衆に示して云く】^①有る時は忠誠己を扣いて苦屈申べ難く、^②有る時は殃及んで人に向つて承當不下なり。^③行に臨んで賤しく折倒し、末後最も慇懃。泪は痛腸より出づ、更に隱諱し難し。^④還つて冷眼の者ありや。

【擧す】洛浦臨終、衆に示して云く、「今一事あり、爾諸人に問ふ、猶ほ自ら兵機を説く。」^①「這箇若し是といはゞ即ち頭上頭を安す。慳麼も也た得ず。若し不是ならば、即ち頭を斬つて活と覓む。」^②「不慳麼も也た得ず。」時に首座云く、「青山常に足を擧げ、白日燈を挑げず。」^③「語り得て分明なれば、出づること轉た難し。」浦云く、「是れ甚麼の時節ぞ、這箇の説話を作す。」^④「失錢遭罪。」彦從上座あり出で、云く、「此の二途を去つて、請ふ師問はされ。」^⑤「開き易きは終始の口、保ち難きは歲寒の心。」浦云く、「未在更に道へ。」^⑥「詩は重吟に到つて始めて功を見る。」從云く、「某甲道ひ盡さず。」^⑦「人をして見せしめざるも轉た風流。」浦云く、「我れ爾が道ひ盡すと道ひ盡さざるとに管せず。」^⑧「没底を放し來つて得ざれば休せず。」從云く、「某甲侍者の和尚に祇對する無し。」^⑨「影草身に隨ふ。」晚に至つて從上座を喚ぶ、「爾今日祇對甚だ來山あり。」^⑩「只管に頭に粘くに習ふ。」合に先師の道を體

- ①奔走苦勞の爲に安心の餘地なきこと。
- ②餘りに慈悲心過ぎるため、却つて殃となること。
- ③臨終に至つて見苦しきこと。
- ④臨終に至りても冷静に宗旨を擧揚するものありやと云ひて、本則の洛浦和尚に當る。
- ⑤一大事因縁を指す。
- ⑥頭の上に更に頭を安する如く餘分のこと。
- ⑦頭を斬られて尚ほ生きて居らうと思ふ如く愚なること。
- ⑧首座とは會下の首となるもの。
- ⑨問ふべきなく、答ふべきなき處を云へ。

得すべし。目前に法なく、意目前にあり。^①（月中の桂を斫卻せば、清光應に更に多かるべし。）^②他はこれ目前の法にあらず、耳目の到る所に非ず。^③（月落ち來れ相見せん。）^④那句か是れ賓、那句か是れ主。^⑤（切に忌む話兩概と作ることを。）^⑥若し揀得出せば、鉢袋子を分付せん。^⑦（棒を把つて狗を喚ぶ。）^⑧從云く、「不會。」^⑨（正に分付すべし。）^⑩浦云く、「汝會すべし。」^⑪（將に九俛の山を成さんとす。）^⑫從云く、「實に不會。」^⑬（一賓の土を進めず。）^⑭浦喝して云く、「苦なる哉、苦なる哉。」^⑮（一缸の人を賺殺す。）^⑯僧問ふ、「和尚の尊意如何。」^⑰（失火の處に膚炭を拾ふ。）^⑱浦云く、「慈舟清波の上に棹さす、劍峽徒らに木鵝を放つに勞す。」^⑲（巧を弄して拙を成す。）

【頌に云く】^①雲を餌とし月を釣として清津に釣る。^②人を驚かす浪に入らざれば、意に稱ふ魚に逢ひ難し。^③年老い心孤にして未だ鱗を得ず。^④（氣急にして作麼せん。）^⑤一曲の離騷歸り去つて後、^⑥（甚麼の處にか在る。）^⑦汨羅江上獨醒の人。^⑧（洛浦猶は在り。）

第四十二則 南陽淨瓶

- ①舌根を離れて、言句以外に宗旨を擧揚せよ。
- ②從上座轉身の一路にして、日夜和尚に相對して居るから、最早や今に臨んで祇對することなきを云ふ。
- ③他とは人々自己心を指す。
- ④如來の應量器を相續させること。
- ⑤洛浦の老婆少からず。
- ⑥傍の一僧を云ふ。
- ⑦無物の境を云ふ。
- ⑧首座も彦從も共に不得なり。
- ⑨天童よりして洛浦を見たる評。
- ⑩納僧家に於ては、尋常の茶飯、平生底盡く妙用神通ならざるはなしの意。
- ⑪南陽惠忠國師、六祖惠能大師の法嗣にして、肅宗皇帝の歸依僧なり。
- ⑫人々自己の毘盧遮那法身を云ふ、毘盧遮那は梵語、譯して

【衆に示して云く】鉢を洗ひ瓶を添ふ、盡く是れ法門佛事、柴を般ひ水を運ぶ、妙用神通に非ざることなし。甚麼と爲てか放光動地を解せざる。

【擧す】僧、南陽の忠國師に問ふ、「如何なるか是れ 自身の盧舍那。」
（汝豈に是れ名を替へんや。）國師云く、「我が與に淨瓶を過し來れ。」
「話頭を忘すること莫れ。」僧、淨瓶を將て到る。（錯つて認むることを得ざることを莫れ。）國師云く、「卻つて舊處に安せよ、著。」（重ねて此の義を宣ぶ。）
僧、復た問ふ、「如何なるか是れ自身の盧舍那。」（甚の處にか去來す。）國師云く、「古佛過去すること久し矣。」（此を離るること遠からず。）

【頰に云く】鳥の空を行く。（築著 碇著。）魚の水に在る。（左使右使。）江湖相忘れ。（這邊那邊。）雲天に志を得たり。（可不可無し。）擬心一絲。（只だ此の山中に在り。）對面千里。（雲深うして處を知らず。）恩を知り恩を報ず。（茲を念ふこと茲に在り。）人間幾幾ぞ。（一子親み得たり。）

第四十三則 羅山起滅

【衆に示して云く】還丹の一粒、鐵に點じて金と成し、至理の一言、凡を轉じて聖となす。若し金鐵二なく、凡聖本同じきことを知らば、果然として一點も用不著。且く道へ、是れ那の一點ぞ。

【擧す】羅山、巖頭に問ふ、「起滅不停の時如何。」（金剛と泥人と昔を措る。）頭、咄して云く、「星落ち雲散ず。」（是れ誰か起滅す。）（識得すれば冤を爲さず。）

【頰に云く】老葛藤を斫斷し、（轉た枝蔓を生ず。）狐窠窟を打破す。（更に頑涎を吐く。）豹は霧を披いて文を變じ、（皮毛を脱卻す。）龍は雷に乗じて骨を換ふ。（別に軀殻を改む。）咄。（一喝萬機罷み、三朝兩耳聳す。）起滅紛紛是れ何物ぞ。（好客に疎伴無し。）

第四十四則 興陽妙翅

【衆に示して云く】師子象を撃ち、妙翅龍を搏つ。飛走すら尚ほ君臣を分つ、稍僧合に賓主を存すべし。且く天威を冒犯する底の人の如きは、如何が裁斷せん。

【擧す】僧、興陽剖和尚に問ふ、「娑竭、海を出で、乾坤靜かなり、觀面相呈すること若何。」（鱗を披する曲鱗、角を帯ぶる泥鱗。）師云く、「妙翅鳥王宇宙に當る、箇の中誰か是れ出頭の人。」（翅を展て崩騰す六合の雲、

光明遍照と云ふ。
② 物々全眞、當處を離れざるに、汝は知らざるか。
③ 任運無功用に於て、盡く法身の活現にあらずや。
④ 分別心が寸毫だもあらば、頗る相對しても不分曉なり。
⑤ 已下十六字は非峯宗密禪師の圓覺經疏に出づ。

① 還丹も至理も用ひずして、如何が轉凡入聖するやと、本則を呼び起して云ふ。
② 起は生、滅は死、生死の二見を離れたる時如何。
③ 羅山の生死に對する二見を老葛藤と云ふ。
④ 豹は羅山、霧は巖頭の言下に於て、初めて披くの意。
⑤ 龍は羅山、雷は巖頭の一咄下に於て天上するの意。
⑥ 天童の一咄、良く森羅萬象、山川草木を咄破す、昔の事に思ふこと勿れと、會下に對する示衆。
⑦ 天子の威光を冒すもの、即ち君を君として立てざるものに對して何と裁斷するや、誓にも棒にも掛らぬものを如何に取扱ふやと、本則の僧に當る。
⑧ 興陽剖禪師、大陽警玄禪師

風に搏つて鼓蕩す四溟の水。僧云く、「忽ち出頭に遇ふ時又作麼生。」(爾に破膽を許す。陽云く、「鶴の鳩を捉ふるに似たり、君覺らすんば、御樓前に驗して始めて眞を知れ。」「好く勸むれども聽かず。僧云く、「恁麼ならば則ち叉手當胸退身三步せん。」「更に第二鐘を待つ。陽云く、「須彌座下の烏龜子、重ねて額を點じて痕せしむることを待つこと莫れ。」「再犯容さず。)

【頤に云く】 ① 絲綸降り、(聖旨を聴く。② 號令分る。(違ふこと有るものは斬す。③ 寰中は天子、(君は萬國に臨み、④ 塞外は將軍、(獨り一方を鎮す。⑤ 雷驚いて蟄を出すことを待たず。(五更早を侵して起く)那ぞ知らん風行雲を遇むることを。(已に夜行の人有り。⑥ 機底聯綿として今自ら金針玉線あり。(具眼を謾じ難し。⑦ 印前恢廓として今元鳥篆蟲文なし。(字義炳然たり。)

第四十五則 覺經四節

【衆に示して云く】 現成の公案只だ現今に據る、本分の家風分外を圖らず、若し也た強ひて、節目を生じ、枉げて工夫を費さば盡く是れ、混沌の與に

眉を畫き、鉢盂に柄を安するなり。如何が平穩を得去らん。

【擧す】 圓覺經に云く、「一切時に居して妄念を起さず。(不)諸の妄心に於て亦息滅せざれ。(不)妄想の境に住して了知を加へざれ。(不)了知無きに於て眞實を辨せず。(不)。

【頤に云く】 巍巍堂堂、(更に窮めて須らく鄒搜の字を道ふべし。① 磊磊落落、(撩天の鼻孔。② 闢處に頭を刺し、(牀窄ければ先づ臥す。③ 穩處に脚を下す。(粥稀なれば後に坐す。④ 脚下線断えて我れ自由、(歩に信せて滄洲を過ぐ。⑤ 鼻端泥盡く君断ることを休めよ。(彼此便を著く。⑥ 動著すること莫れ、(已に是れ蹠手亂下。⑦ 千年故紙中の合藥。(大いに神効有り。)

第四十六則 德山學畢

【衆に示して云く】 萬里寸草なきも、淨地人を迷はす、八方片雲なきも、晴空汝を賺す。是れ楔を以て楔を去ると雖も、空を拈じて空を拄ふことを妨げず。① 腦後の一槌別に方便を看よ。

【擧す】 德山圓明大師、衆に示して云く、「及盡し去るや。」「這箇の在

① 茲瑪羅龍王にして、八大龍王の第一なり、鹹海と譯す。
② 妙翅鳥王は龍を食ふ鳥なり、この鳥が居れば龍も出頭し來ること能はず、さあ誰が出頭し來るやと反問す。
③ 懸崖に手を撒し、喪身失命し去れ。
④ 史記に出づ、家を建つる時、柱礎下に龜を埋めて、家の不傾を計る、後、家を他に移す、龜再び活く、凡物にあらず、即ち此の一段は重ねて愚圖愚圖言ふて來るなどの意。
⑤ 天子の詔勅、金翅鳥に當る。
⑥ 將軍の號令、婆娑羅に當る。
⑦ 寰中は天子の直支配にして割和尙に當る。
⑧ 塞外は將軍の支配下にして僧に當る。
⑨ 僧の修行も圓熟せざるに、出で來るを云ふ。

① 圓和尙の接得振りを云ふ。
② 文字葛藤を云ふ。
③ 凡思迷悟是非等を云ふ。
④ 蛇の爲に足を盡く如き愚なること。
⑤ 鉢盂は柄なきもの、然るに柄を付くる如き愚を云ふ。
⑥ 圓覺經とは具に大方廣圓覺修多羅了義經と云ふ、覺教三藏の總譯にして一卷あり、自己心性の圓覺伽藍を説く。
⑦ 當體現前、赤裸々なることを云ふ。
⑧ 石の存在する觀にして、大丈夫の意。
⑨ 第二義門に下りて爲人せらるること。
⑩ 脚下の線とは妄想分別の線を云ふ。
⑪ 合藥とは圓覺經なり。
⑫ 最後の牢關を指す。
⑬ 德山九世圓明大師にして、雲門の法嗣、德山宣鑑禪師には

る有り。直に得たり三世の諸佛、口壁上に掛くことを。(留取して飯を喫せよ。猶ほ一人有つて呵呵大笑す。(且く道へ、是れ誰ぞ。)若し此の人を識らば、(是れ何の面目ぞ。)參學の事畢んぬ。(椀茶を與へて喫しめん。)

【頌に云く】 收。(甚の處に向つてか著ん。)襟喉を把斷す。(正に好し、身を轉じ氣を吐くに。) 風磨し雲拭ふ。(纖塵も必ず去る。)水冷かに天秋なり。(打成一片。)錦鱗謂ふこと莫れ滋味無しと。(腥羶少からず。)釣り盡す滄浪の月一鈎。(清波を犯さず、意自ら殊なり。)

第四十七則 趙州柏樹

【衆に示して云く】 庭前の柏樹、竿上の風幡、一華無邊の春を説くが如く、一滴大海の水を説くが如し。問生の古佛迦かに常流を出づ。言思に落ちず若爲が話會せん。

【擧す】 僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ 祖師西來意。」(多羅閑管。)州云く、「庭前の柏樹子。」(焦博打着す連底の凍。)

- ① 一切萬法、三世の諸佛も窮盡することありや。
- ② 一切諸佛諸法盡く掌中に在り。
- ③ 徳山の境界を歌ふ。
- ④ 示すことは一言一句なれど、その意は甚深にして無量の義を包含することを顯はす。
- ⑤ 五百年間の一人のみ生ずる聖人の意にして、本則の趙州に對しての語。
- ⑥ 祖師西來意とは、禪宗の第一義、禪宗の安心と云ふが如き意味。
- ⑦ 趙州和尚は百二十年の長命ゆゑ此の句を置く。
- ⑧ 已下皆趙州和尚の爲人、手段を明す。
- ⑨ 河目秋を含む。(一點も非らず。)

【衆に示して云く】 海口浪を鼓し、(有句は宗旨に非ず。)航舌流に駕す。(無言聖凡を絶す。)撥亂の手、(也た是れ柏樹。)太平の籌。(也た是れ柏樹。)老趙州老趙州。(甚としてか應せざる。)

第四十八則 摩經不二

【衆に示して云く】 妙用無方なるも、手を下し得ざる處あり、辯才無礙なるも、口を開き得ざる時あり。龍牙は無手の人の拳を行ふが如く、夾山は無舌の人をして解語せしむ。半路に身を抽んづる底是れ甚麼人ぞ。

【擧す】 維摩詰、文殊師利に問ふ、「何等か是れ 菩薩入不二の法門。」(問處は第幾ぞ。)文殊師利曰く、「好し劈口の壑を與ふるに。」(我が意の如きんば、(醜造し將ち來れ。))一切の法に於て、(更に少きを嫌ふ。)

- ① 趙州の一言に依つて天下の叢林の雲水は非常に骨折り、非常に迷惑して居ると抑下す。
- ② 出放題の出鱈目が、皆合離して道理に契ふこと。
- ③ 僧、龍牙に問ふ、「十二時中如何が力を著けん、師曰く、無手の人の拳を行するが如くにして、始めて得てん、(會元第十三に出づ。)
- ④ 第三十五則を見よ。
- ⑤ 兩頭に隨はざる人、即ち中道實相の人を指す。

【衆に示して云く】 仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩入不二の法門。(一遮一刮、惡教を賭せず。) 維摩默然。(甚麼の處に去るや。)

【頌に云く】 曼殊疾を問ふ老毗耶。(仁義道中。) 不二門開いて 作家を看る。(稍僧分上。) 珉表粹中誰か賞鑒せん。(大辯は訥の如し。) 忘前失後吝嗒すること莫れ。(大智は愚の如し。) 區區として璞を投ず楚庭の膺士。(直を獻じて曲を得たり。) 璨璨として珠を報ず隋城の斷蛇。(夜光人に投ずれば、劍を按せざることを鮮し) 點破することを休めよ。(幸に自ら完全) 玼瑕を絶す。(指點するに一任す) 俗氣渾べて無うして卻つて些に較れり。(相上に人を觀れば之を失すること多し。)

第四十九則 洞山供眞

【衆に示して云く】 描不成畫不就、 普化は便ち斤斗を翻し、 龍牙は只だ半身を露す、 畢竟那の人、 是れ何の體段ぞ。

【擧す】 洞山、雲巖の眞を供養する次、(誰か道ふ是れ假と。) 遂に 前の眞を還するの話を擧す。(一廻拈出すれば、一廻新なり。) 僧あり問ふ、

「雲巖祇だ這れ是れといふ意旨如何。(且喜すらくは錯つて認めざることを) 山云く、「我れ當時幾ど過つて先師の意を會す。(己を以て人に方ぶ) 僧云く、「未審し雲巖還つて有ることを知るや也た無しや。」(草を折つて天を量る。) 山云く、「若し有ることを知らずんば、争か恁麼に道ふことを解せん。(日出で、山に連る。) 若し有ることを知らば、争か肯て恁麼に道はん。」(月圓かにして戸に當る。)

【頌に云く】 争か恁麼に道ふことを解せん。(暗裏に横骨を抽く。) 五更鶏唱ふ家林の曉。(金鳥東に上る。) 争か肯て恁麼に道はん。(明中に舌頭に坐す。) 千年の鶴は雲松と與に老ゆ。(玉兔西に沈む。) 寶鑑澄明にして正偏を驗す。(事窮つて的要なり。) 玉機轉側して兼到を看よ。(交互す明中の暗。) 門風大いに振つて分規步綿綿たり。(西天令嚴なり。) 父子變通して分聲光浩浩たり。(見、師に過ぎて、方に傳授するに堪へたり。)

第五十則 雪峯甚麼

【衆に示して云く】 最後の一句始めて牢關に到る。 巖頭自負して上

① 維摩經に出づ、維摩は梵語にして、無垢稱、又は淨名と譯す。

② 文殊師利とは、無漏の大智の菩薩。

③ 凡聖同會、菩薩初入の法門。

④ 理在絶言、言生理喪、言説にては示すこと能はざるの意。

⑤ 不二法門に對して、三十二人の菩薩、各自に説き已りしな云ふ。

⑥ 維摩を指す。

⑦ 維摩經の發端は毗耶離城の維摩の病氣を、文殊菩薩が見舞に行きし時の有様より起る。

⑧ 文殊、維摩を指す。

⑨ 事文類聚に出づ、今の意は維摩の腹を見抜きしは文殊の外にあるまいとのこと。

⑩ 前後忘却して道理に相違せざること。

⑪ 韓非子に出づ、今の意は八萬の大家勞して功なきを云ふ。

⑫ 即ち維摩の腹の見えぬこと。

⑬ 太平廣記に出づ、今の意は文殊は不二の寶珠を見て居ると云ふこと。

⑭ 普化は盤山寶積師の法嗣、師の眞を觀するに、普化は筋斗を打せしを云ふ、會元第三に出づ。

⑮ 報慈が龍牙の半身を贊せしこと、林間錄上に出づ。

⑯ 洞山良价師、雲巖の法嗣にして、藥山の法孫なり、會稽の人、俗姓は俞氏、曹洞宗の祖。

⑰ 先師雲巖の言を以て大衆に示すこと。

⑱ 正中の偏位。

⑲ 偏中の正位。

⑳ 洞山和尚の境界を云ふ。

㉑ 實に自由の手段を云ふ、兼中に當る。

㉒ 洞山家風の規矩嚴正にして相續するを云ふ。

親師を肯はず、下法弟に譲らず。爲復た是れ強ひて節目を生ずるや、爲復た別に機關ありや。

【擧す】雪峯住庵の時、兩僧あり、來つて禮拜す。(香を尋ね氣を逐ふ。)峯、來るを見て手を以て庵門を托して、放身して出で、云く、「是れ甚麼ぞ。」(此れ猶ほ是れ抛身の勢、隱身の勢、作麼生。)僧亦云く、「是れ甚麼ぞ。」(果然として識らず。)峯低頭して庵に歸る。(語無しと道ふこと莫くんば好し。)僧、後に巖頭に到る。(消を傳へ息を寄す。)頭問ふ、「甚麼の處より來るや。」(鑽せざれば穴せず。)僧云く、「嶺南。」(這裏は是れ嶺北。)頭云く、「曾て雪峯に到るや。」(熟慮忘じ難し。)僧云く、「曾て到る。」(更に諱むことを得ず。)頭云く、「何の言句かありし。」(醋ならざれば休せず。)僧、前話を擧す。(二字公門に入れば、八牛拽けども出でず。)頭云く、「他は甚麼とか道ひし。」(卻つて好し低頭して便ち出づるに。)僧云く、「他語無うして低頭して庵に歸る。」(恁麼ならば則ち曾て雪峯に到らず。)頭云く、「噫當時他に向つて末後の句を道はざりき。(而今道ひ了るや未だしや。)若し伊に向つて道はざ、天下の人雪老を奈何ともせず。」(何ぞ我れ便ち是れ雪老と道はざる。)僧、夏末に到つて再び前話を擧して請益す。(好酒人を醒すこと遅し。)頭云く、「何ぞ早く問はざる。」(瞌睡を

- ① 父は雲巖、子は洞山を云ふ。
- ② 徳山托鉢の因縁に出づ、無門關參照。
- ③ 巖頭和尚、第二十二則に出づ。
- ④ 親師とは徳山を云ふ。
- ⑤ 法弟とは雪峯を云ふ。
- ⑥ 方丈の門を聞くこと。
- ⑦ 嗚呼、昔末後の句を雪峯に向つて云ふて置けば良かつたのに、誠に惜しいことなした、若し云ふて置けば天下の人は雪峯を自由にすることは出来なとの意。
- ⑧ 一夏九句の間、何故に問はざりしや。

貪る。)僧云く、「未だ敢て容易にせず。」(可勝だ叢林に慣る。)頭云く、「雪峯我れと同條に生ずると雖も、我れと同條に死せず。(另一索むるものは先づ窮す。)末後の句を知らんと要せば只だ這れ是れ。」(旋蒸熟して賣る。)

【頌に云く】切磋し琢磨し、(一事に因らざれば)變態し殺訛す。(一智を長せず。)葛坡化龍の杖、(已に聞く、海を過ぎて雲を穿つことを。)陶家居塾の梭。(猶ほ牆に倚り壁に貼することを)同條に生ずるは分數あり。(性相近し)同條に死するは分多無し。(習相遠し)末後の一句只だ這れ是れ。(且く一半を信す。)風舟月を載せて秋水に浮ぶ。(切に梁跟することを忌む。)

第五十一則 法眼舡陸

【衆に示して云く】世法裏に多少の人を悟卻し、佛法裏に多少の人を迷卻す。忽然として打成一片ならば、還つて迷悟を著得せんや也た無しや。

【擧す】法眼、覺上座に問ふ、「舡來か陸來か。」(大いに兩般有るに似たり。)覺云く、「舡來。」(深く實相を談じ、善く法要を説く。)眼云く、「舡甚麼の處にか在る。」(恐らくは不實を怕る。)覺云く、「舡は河裏にあり。」(果

- ① 後漢書第七十に出づ、巖頭末後の句に對して云ふ。
- ② 晋書に出づ、雪峯の歸庵に對して云ふ。
- ③ 巖頭と雪峯の好遊戯の境界を歌ふ。
- ④ 治生產業皆是れ正法、俗語を離れて別に第一義諦なし。

然として下落有り。覺退いて後、眼卻つて傍僧に問うて云く、「偏道へ適來の這の僧、眼を具するや眼を具せざるや。」(可惜許。)

【頰に云く】水、水を洗はず。(絶點澄清。金、金に博へず。(鍊つて一塊と做す。))毛色を味まして馬を得、(相をもつて取ることを得ず。))絲絃靡うして琴を樂む。(聲をもつて求むべきに非ず。))繩を結び卦を畫いて這の事あり。(法出で、姦生す。))喪盡す眞淳、盤古の心。(巧を弄して拙と成す。))

第五十二則 曹山法身

【衆に示して云く】諸の有智のものは、譬喩を以て解することを得、若し比することを得ず、類して齊しうし難き處に到らば、如何が他に説向せん。

【擧す】曹山、徳尙座に問ふ、「佛の眞法身は猶ほ虚空の若し、(官には針を容れず。))物に應じて形を現することは水中の月の如し。(私に車馬を通ず。))作麼生か箇の應する底の道理を説かん。」(又手近前して云く、喏。))徳云く、「驢の井を戯るが如し。」(落花意有つて流水に隨ふ。))山云く、「道ふことは即ち太懸だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。」(千里の目を窮めんと欲

- ① 佛法の道理に執着するもの。
- ② 偏俗不二の當體。
- ③ 法眼文益禪師、第十七則に出づ。
- ④ 船で来たか、徒歩で来たか。
- ⑤ 今来た僧は宗旨の眼ありや否やと問ふ。
- ⑥ 列子に出づ、馬の毛色にては千里の馬か否かは知れぬ、毛色は知らざるも馬の精を得、其の内心を見抜くこと。
- ⑦ 周易に出づ、上古は繩を結んで治め、後世の聖人は書契を以て治めしを云ふ。
- ⑧ 三五層議に出づ、天地渾沌の時に生ずるものと云ふ。
- ⑨ 曹山本寂禪師、洞山良价禪師の法嗣。
- ⑩ 人々自己の心佛を指す。
- ⑪ 十成ならざること、未だ充分でないこと云ふ意。
- ⑫ 至人は虚心にして、萬有を自己心中に入れて常に淨なることを云ふ。
- ⑬ 肘とは臂節なり、聰明の意。
- ⑭ 文字葛藤に拘らざること。
- ⑮ 已下二句は夾山の語、徳尙座を讚歎するの意。
- ⑯ 大用現前の様子。
- ⑰ 黄檗希運禪師、百丈禪師の法嗣にして、臨濟禪師の嚴師なり。
- ⑱ 人を罵るの語、馬鹿野郎とか、糞畜生とか云ふが如き意。

せば、)徳云く、「和尚又如何。」(更に一層樓に上れ。))山云く、「井の驢を戯るが如し。」(流水意無うして落花を送る。))

【頰に云く】驢井を戯、五更早を侵して起く。井驢を戯る。(更に夜行の人有り。))智容れて外る、無く、(天下の衲僧跳不出。))淨涵して餘あり。(萬象能く影質を逃る、こと莫し。))肘後誰か印を分たん。(天眼龍睛も窺ふべからず。))家中書を蓄へず。(眞文は醋ならず。))機絲掛けず梭頭の事。(花又損せず。))文彩縦横意自ら殊なり。(蜜又成ることを得。))

第五十三則 黄檗瞳糟

【衆に示して云く】機に臨んで佛を見ず、大悟師を存せず。乾坤を定むる劍、人情没し。虎兕を擒ふる機、聖解を忘す。且く道へ、是れ甚麼人の作略ぞ。

【擧す】黄檗、衆に示して云く、「汝等諸人盡く是れ瞳酒糟の漢。(黄檗門下。))與麼に行脚せば、何の處にか今日有らんや。(今既に昔に如かず、後當に今に如かざるべし。))還つて大唐國裏に禪師無きことを知るや。」(眼四海に高し。))時に僧あり出で、云く、「只だ諸方の徒を匡し、衆を領するが如きは、又作麼生。」(黄檗身を兼ねて在り。))衆云く、「禪無しとは道はじ、只だ是れ師無し。」(且く一半を救ひ得

たり。)
 【頰に云く】 岐分れ絲染んで太だ勞勞。(事を知ること少き時煩惱少し。)
 敗す。(人を識ること多き處是非多し。妙に 司南造化の柄を握つて、(一朝の權手に在り。)
 水雲の器具
 頸陶に在り。(令行の時を取らせよ。)
 繁碎を屏割し、(大象は兎徑に遊ばす。)
 毳毛を剪除す。(大悟
 は小節に拘はらず。)
 星衡藻鑑、(纖毫も味まさす。)
 玉尺金刀、(度量深明。)
 黃檗老秋毫を察す。(他を
 謾すること一星も得ず。)
 春風を坐斷して高きことを放さず。(預め不虞に備ふ。)

第五十四則 雲巖大悲

【衆に示して云く】 八面樞樞、十方通暢、一切處放光動地、一切時妙
 用神通。且く道へ、如何が發現せん。
 【擧す】 雲巖 道吾に問ふ、「大悲菩薩許多の手眼を用ひて作麼かせん。」
 (備恁麼に問ふ、箇の甚麼をか圖る。)
 吾云く、「人の夜間に背手して枕手を
 摸るが如し。」(一上の神通、小々に同じからず。)
 巖云く、「我れ會せり。」(且
 く許明頭なること莫れ。)
 吾云く、「汝作麼生か會す。」(果然として放不過。)
 巖云く、「偏身是れ手眼。」(空缺の處無し。)
 吾云く、「道ふことは太曝だ道

① 岐路に岐路を生じ、智慧分別の糸染んで甚だしいことを云ふ。
 ② これも妄想戲論の多きことを云ふ。
 ③ 司南とは黃帝の造りし指南車にして、蠟尤と戦ひし時、大霧のため方角知れざりしを、指南車に依つて勝利を得たりと云ふ。
 ④ 甄とは陶人旋轉の輪なり、即ち天地が品物を造化すること恰も陶匠の衆品を成すが如きを云ふ。
 ⑤ 法に於て自在の意。
 ⑥ 鳥獸の細毛を云ふ。
 ⑦ 已下黃檗の手段の尋常ならざること云ふ。
 ⑧ 大悲千眼の法界に遍照する如きを形容す、本則參照。
 ⑨ 四聖六凡に度生自在なるを云ふ、光は智の義、動地とは衆生覺の義。
 ⑩ 道吾崇智禪師、藥山惟儼禪師の法嗣にして、雲巖に對しては法兄に當る。
 ⑪ 大悲千眼の法界に自由の働きをなす觀。
 ⑫ 楞嚴經の六に出づ、八萬四千の清淨の寶目、八萬四千の陀羅羅臂、八萬四千の燦迦羅首と云ふ。
 ⑬ 弟子の見が師に過ぐることを云ふ、即ち本則の巖頭が師の徳山よりも過ぐるゝことを顯す。

ふ、即ち八成を得たり。」(某甲舌頭短し。)
 巖云く、「師兄作麼生。」(理長すれば即ち就く。)
 吾云く、「通身是れ手眼。」(隔礙の處無し。)
 【頰に云く】 一竅虛通、(豎に三際を究め、)八面樞樞、(横に十方に徧し。)
 象無く私無く春律に入る。(時に應じて祐を納る。)
 留せず礙せず月空に行
 く。(任運に前溪に落つ。)
 清淨の寶目功德臂、(前を顧み後を盼、東を拈じ西を撮る。)
 偏身は通身の是に何似ぞ。(分疎不下。)
 現前の手眼全機を顯す。(賊贓已に露る。)
 大用縱横何ぞ忌諱せん。(可不可なし。)

第五十五則 雪峯飯頭

【衆に示して云く】 氷は水よりも寒く、青は藍よりも出づ。見、師に過ぎ
 て方に傳授するに堪へたり。子を養うて父に及ばざれば、家門一世に衰ふ。
 且く道へ、父の機を奪ふ者は是れ甚麼人ぞ。
 【擧す】 雪峯、徳山に在りて 飯頭となる。(少うして努力せず。)
 一日飯遅し、徳山鉢を托げて法堂に至る。(老いて心を歇めず。)
 峯云く、「この老漢鐘未だ鳴らず鼓未だ響かざるに、鉢を托げて甚麼の處に向つて去るや。」

(孩兒をして娘を罵るを會することを得しむ。) 山使ち 方丈に歸る。(盡く不言の中に在り。) 峯、巖頭に舉似す。(家返宅宅亂る。) 頭云く、「大小の徳山最後の句を會せず。」(父は子の爲に隠す、直きこと其の中に在り。) 山聞いて、侍者をして巖頭を喚ばしめて問ふ、「汝老僧を肯はざるか。」(油を潑いで火を救ふ。) 巖遂に其の意を啓す。(人間の私語、天の聞くこと雷の如し。) 山乃ち休し去る。(果然として不會。) 明日に至つて陸堂、果して尋常と同じからず。(風に隨つて掩を倒す。) 巖掌を撫して笑つて云く、「且喜すらくは老漢最後の句を會せり。(家醜外に揚ぐ。) 他後、天下の人伊を奈何ともせず。」(鼻孔甚と爲てか我が手裏に在り。)

【頌に云く】 最後の句會すや也た無しや。(這裏會することを得ず、會せずんば腰を打折せん。) 徳山父子太だ 含胡す。(外明かにして、裏暗きことを知らず。) 座中亦江南の客あり。(謂ふこと勿れ秦に人無しと。) 人前に向つて 鷓鴣を唱ふること莫れ。(休得せんや。)

第五十六則 密師白兔

【衆に示して云く】 寧ろ永劫に沈淪すべくとも、諸聖の解脱を求めず、提婆達多は無間獄中に三禪の樂みを受け、鬱頭藍弗は有頂天上に飛狸の身を墮す。且く道へ、利害甚麼の處に在るや。

【擧す】 密師伯、洞山と行く次、白兔子の面前に走過するを見て、密云く、「俊なる哉。」(爭奈せん荒草裏に走ることを。) 山云く、「作麼生。」(備が運きことを怪む。) 密云く、「白衣の相に拜せらるゝが如し。」(地より空に昇ることは易し。) 山云く、「老々大大として這箇の語話をなす。」(幾ど放過せんとす。) 密云く、「備又作麼生。」(人虎を害するの心無ければ、虎人を傷ふの意無し。) 山云く、「積代の 簪纓暫時に 落魄す。」(空より放下するとは難し。)

【頌に云く】 ①力を霜雪に抗べ、(貧しきときは則ち獨り一身を善くす。) 歩を雲霄に平しうす。(達するときは則ち兼ねて天下を濟ふ。) ②下惠は國を出で(苦瓠は根に連りて苦し。) ③相如は橋を過ぐ、(甜瓜は蒂に徹して甜し。) ④蕭曹が謀略能く漢を成す。(葵花日に向ふ。) ⑤巢許が身心堯を避けんと欲す。(柳絮風に隨ふ。) ⑥寵辱は若も驚く深く自ら信せよ。(悟は須らく實悟

- ①炊事の役。
- ②雲板と云ふ食事の相圖を鳴らさぬのに、持鉢を抱へて出て来るのを告めたるなり。
- ③徳山の居室。
- ④大小とは流石と云ふほどの語。
- ⑤巖頭密に徳山の耳へ口を寄せて私語すること。
- ⑥言語の明瞭ならざるを云ふ、即ち心言はんと欲して言ふこと能はざるの意。
- ⑦鄭谷の詩に出づ、江南は名勝の地にして、春三月には百花咲き亂れ、鷓鴣鳴くところなり。
- ⑧鷓鴣とは美麗なる小鳥、今は最後の句に喩ふ。
- ⑨報恩經に出づ、提婆達多は斛飲王の子、阿難の兄、佛とは從兄弟なり。
- ⑩大智度論に出づ、非有想非無想處より下生して、飛狸とな

- ①、大いに魚鳥を殺して業罪を作るを云ふ。
- ②雲巖曼成禪師の法嗣、潭州の仙僧にして洞山良价禪師と同参なり。
- ③白衣の士は即ち轉相の資なるが爲重んずるの意。
- ④替とは首飾なり、纓は冠糸なり、高位高官の意。
- ⑤落魄にして家貧なるを云ふ。
- ⑥松柏の良く霜雪を凌ぐ力を云ふ。
- ⑦柳下惠の直心を云ふ、論語微子篇に出づ。
- ⑧司馬相如の奮心を云ふ、蒙求に出づ。
- ⑨蕭何曹參が漢の高祖の帝業を成すを云ふ、史記に出づ。
- ⑩第二十八則を見よ。
- ⑪老子の語、寵は白衣、辱は落薄のこと。
- ⑫蹤跡を没して消息を斷つ、譽の如く愚の如きを云ふ。

なるべし、參は須らく實參なるべし。眞情跡を參へて漁樵に混す。(未だ靈龜尾を曳くことを免れず。)

第五十七則 嚴陽一物

【衆に示して云く】 影を弄して形を勞す、識らず、形は影の本たることを。聲を揚げて響を止む、知らず、聲は是れ響の根なることを。若し牛に騎つて牛を覓むるに非ずんば、便ち是れ 杖を以て杖を去るならん。如何が此の過を免れ得ん。

【擧す】 嚴陽尊者、趙州に問ふ、「一物不將來の時如何。」(猶ほ是れ分外。州云く、「放下著。」(貼體の衣衫、會す、須らく脱卻すべし。嚴云く、「一物不將來、箇の甚麼をか放下せん。」(人は己の過を知らず、牛は力の大なることを知らず。)

州云く、「恁麼ならば則ち擔取し去れ。」(喚べども頭を回さず、爭奈何せん。)

第五十八則 剛經輕賤

【衆に示して云く】 經に依つて義を解するは三世佛の寃、經の一字を離るれば返つて魔説に同じ。因に收めす果に入れざる底の人、還つて業報を受くるや也た無しや。

【擧す】 金剛經に云く、「若し人の爲に輕賤せられんに。(我れを糞中の蟲と作せ。是の人先世の罪業ありて、應に惡道に墮すべきに。(老僧最も先に入らん。今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に。(叢林の驢騾、龍象を蹴踏す。)

先世の罪業則ち爲に消滅す。」(甚麼の處にか去るや。)

第五十九則 青林死蛇

① 已下の四句は向居士の語、傳燈錄第三に出づ。
② 第十六則を見よ。
③ 會元四に出づ、尊者とは總行智慧の高き人を稱す。
④ 著心を放下せよと云ふ意。
⑤ 著心無きに何をか放下せんやとの意。
⑥ 浮山の語、會元十二に出づ。
⑦ 王氏神仙傳に出づる故事、一物不將來と云ふ如き分別もなく、身心脱落、脱落身心の境界を云ふ。
⑧ 仙とは趙州を指す。

① 道安と問答せし語、元來經は總持の法にして無文字なり、然るに經の文字に帶るものは魔説に同じと云ふ意。
② 因果とか云ふ理窟に合はぬ人は、如何にして業報を受くるかと云ひて、本則を擧揚す。
③ 羅什譯の金剛般若波羅密多經第十六能淨業障分の一節、本則の前文より云へば、此の金剛經を受持讀誦する人あらば、都べての災難禍害は悉く免るべきに、若し萬一にも此の經を受持讀誦しながら、世間の人々より輕しめ蔑しめられたりと云ふならばの意。

【衆に示して云く】去れば則ち留住し、住すれば即ち遣去す。不去不住。渠に國土なし、何れの處にか渠に逢はん。在在處處、且く道へ、是れ甚麼物か。恁麼に奇特なることを得るや。

【擧す】僧、青林に問ふ、「學人徑に往く時如何。」一歩を擧すれば即ち迂廻。林云く、「死蛇大路に當る、子に勸む當頭すること莫れ。」曾て毒を著くるに慣ふ。僧云く、「當頭する時如何。」(爾に大膽を許す。)林云く、「子が命根を喪す。」(果然。)僧云く、「當頭せざる時如何。」(恁ぞ只だ爾に由らん。)林云く、「亦廻避するに處なし。」(築著 磕著。)僧云く、「正恁麼の時如何。」(且く著忙すること莫れ。)林云く、「卻つて失せり。」(是れ死蛇と雖も、弄することを解すれば也た活す。)僧云く、「未審し甚麼の處に向つてか去るや。」(信せずんば懷を搜れ。)林云く、「草深うして覓むるに處無し。」(頭上漫々脚下漫々。)僧云く、「和尚も也た須らく隄防して始めて得べし。」(廻り來れり。)林、掌を拊して云く、「一等に是れ箇の毒氣。」(將に謂へり侯白と、更に侯黒有り。)

① 金剛經を受持讀誦する功德に依つて、現世の輕微は先世の罪業を消滅することとなる。
② 楞嚴四に出づ、演若達多、自己の頭を求めて狂奔す、鏡面に對して頭あるを知り、大いに喜ぶと云ふ故事。
③ 嵩山の高僧にして慧安國師の弟子と云ふ、常に姓名を云はず、時に村邑に古き龍神あり、祭禮毎に村民に崇る、依つて高僧撃つこと三下にして龍を碎く、龍神喜んで樂報を免ると云ひしと、會元第二、碧巖錄九十六則參照。
④ 本分を指す、無住の心體を云ふ。
⑤ 洞山良价禪師の法嗣にして、青林師慶禪師を云ふ。
⑥ 人を殺す毒蛇。
⑦ この僧は凡僧にあらざる手段を見よ。
⑧ 三老とは航工のこと、古今詩

源に棹を著く。蘆花兩岸の雪。(自他玄契。)煙水一江の秋。(上下冥通。)風力帆を扶けて行いて棹さす。(流に隨つて妙を得。)笛聲月を喚んで。滄洲に下る。(任運に前溪に落つ。)

第六十則 鐵磨牒牛

【衆に示して云く】鼻孔 昂藏、各丈夫の相を具す。腳踏牢實、肯て老婆禪を學ばんや。無巴鼻の機關を透得せば、始めて正作家の手段を見ん。且く道へ、誰か是れ其の人。

【擧す】劉鐵磨、鴻山に到る。(相見已に了る。)山云く、「老牒牛汝來や。」(蜂を撥り蝸を剔く。)磨云く、「來日、臺山に大會齋あり、和尚還り去るや。」(氣毒烟火然ゆ。)山、身を放つて臥す。(半路に身を抽んづ。)磨、便ち出で去る。(一撥すれば便ち轉す。)

【頌に云く】百戰功成つて太平に老ゆ。(家を安んじ業を樂む。)優柔誰か肯て苦に衝を争はん。(饒人は是れ癡なるにあらず。)玉鞭金馬、閑に日を終ふ。(有りと雖も無きが如し。)明月清風一生富む。(受用不盡。)

話及び杜詩集に出づ。
① 滄洲は常に陽春三月の如き花木多き名勝の地。
② 昂藏とは自ら尊大振るの意。
③ 生死涅槃、煩惱菩提、迷悟凡聖の實性無きを云ふ。
④ 鴻山雲祐禪師を云ふ。
⑤ 鴻山大無事の妙境界を頌して餘りあり。

第六十一則 乾峯一畫

【衆に示して云く】 曲説は會し易し一手に分付す。直説は會し難し十字に打開す。君に勸む分明に語ることを用ひされ。語り得て分明なれば、出づること轉た難し。信せずんば試みに擧す看よ。

【擧す】 僧、乾峯に問ふ、「十方薄伽梵一路涅槃門、未審し路頭甚處の處に在るや。」(快馬鈍虻に如かず)峯、拄杖を以て一畫して云く、「這裏に在り。」(且く一半を信す)僧擧して雲門に問ふ。(疑はゞ則ち別に參せよ)門云く、「扇子野跳して 三十三天に上り、帝釋の鼻孔に築著す。(乞ふ漢語せよ)東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆の傾くに似たり。會すや會すや。」(恁麼に解説すれども、更に理會し難し)。

【頰に云く】 手に入つて還つて死馬を將て醫す。(霹靂の手を下し、狼虎の薬を用ふ) 反魂香君が危きを起さんと欲す。(棺を掲げて死を救ふ、別に神方有り) 一期通身の汗を擲出せば、(藥腹眩せざれば、厥の疾瘳えず)方に信せん儂が家眉を惜まざることを。(頂顛に和して沒卻す)。

④ 曲説とは委曲なる方便假説と云ふこと。

⑤ 直説とは直示の實説と云ふこと。

⑥ 乾峯和尚は洞山大師の法嗣、會元第十三に出づ。

⑦ 此の句は楞嚴經第五に出づ、即ち世尊が阿難に示し給ふ偈なり。

⑧ 薄伽梵は佛の異稱、涅槃とは佛境界と見て良し。

⑨ 三十三天とは須彌山の頂にあり、而して帝釋は三十三天の主なり。

⑩ 搜神記に出づ、趙周が良馬死す、璞これを醫して起たしむ、即ち死馬とは今の僧に譬ふ。

第六十二則 米胡悟不

【衆に示して云く】 達磨の第一義諦、梁武頭迷ふ。淨名の不二法門、文殊口過る、還つて入作の分有りや也た無しや。

【擧す】 米胡、僧をして、仰山に問はしむ。「今時の人還つて悟を假るや否や。」(還つて會て迷ふや)山云く、「悟は即ち無きにはあらず、第二頭に落つることを爭奈何せん。」(如何が免れ得ん)僧廻つて米胡に擧似す。(是れ第幾ぞ)胡深く之を肯ふ。(肯ふことは即ち無きにはあらず、爭か第二を免れん)。

【頰に云く】 第二頭、悟を分つて迷を破る。(普州の人賊を送る)快かに須らく手を撒して、筌罟を捨つべし。(放下著)功分未だ盡きざれば、駢拇となる。(終に是れ分外)智や知り難し、噬臍を覺ゆ。(禹力不到の處、河聲流れて西に向ふ) 兔老いて、氷盤秋露泣く。(戀著すれば即ち堪へず) 鳥寒うして、玉樹曉風凌たり。(坐著すれば即ち不可なり) 持し來つて大仰眞假を辨す。(一點も謾じ難し)痕玷全く無うして、白珪を貴ぶ。(切に忌む

① 淨名とは淨土經の淨名菩薩に譬ふ。

② 第一義諦に對して第二義門を云ふ。

③ 筌罟とは悟道を指して云ふ、魚を捕る筌、兔を捕る罟は、魚兔を捕ふれば無用となる如く、第一義諦に達すれば悟道も有り難きものにあらず。

④ 第二頭を見よ。

⑤ 第四十八則を見よ。

⑥ 馮山の法嗣にして、京兆府米胡和尚を指す。

⑦ 仰山惠寂禪師のこと、米胡の法兄に當る。

⑧ 第一義諦に對して第二義門を云ふ。

⑨ 筌罟とは悟道を指して云ふ、魚を捕る筌、兔を捕る罟は、魚兔を捕ふれば無用となる如く、第一義諦に達すれば悟道も有り難きものにあらず。

觸破すること(を)。

第六十三則 趙州問死

【衆に示して云く】 三聖と雪峯とは 春蘭秋菊なり。 趙州と投子とは 十壁燕金なり。 無星秤上 兩頭平かなり。 沒底缸中 一處に渡る。 二人相見の時如何。 【擧す】 趙州、投子に問ふ、「大死底の人卻つて活する時如何。」(探竿手に在り。)子曰く、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」(影草身に隨ふ。)

【頌に云く】 芥城劫石妙に 初を極む。(今時を及盡して始めて成立することを得。)活眼環中 廓虚を照す。(絶後に重ねて甦らば、君を欺くことを得ず。)夜行を許さず 曉に投じて到る。(已に程途に涉る。)家音未だ肯て 鴻魚に付せず。(已に是れ妄に消息を傳ふ。)

第六十四則 子昭承嗣

【衆に示して云く】 韶陽親しく 睦州に見えて、香を 雪老に拈す。 投子面り 圓鑿に承けて、法を 太陽に嗣ぐ。 珊瑚枝上に 玉花開き、蘆菖林中に 金果熟す。 且く道へ、如何が 造化し來らん。

【擧す】 子昭首座、法眼に問ふ、「和尚開堂何人に承嗣するや。」(早く今日開管と成ることを知らば、悔らくは當時好心を用ひざることを。)眼云く、「地蔵。」(恩歸するに地有り。)昭云く、「太だ長慶先師に辜負す。」(肘膊外に向つて曲らす。)眼云く、「某甲長慶の一轉語を會せず。」(伴つて知らざるを打す。)昭云く、「何ぞ問はざる。」(狼を引得來つて屋裏に扇せしむ。)眼云く、「萬象之中獨露身、意作廢生。」(觀面に相呈す。)昭乃ち拂子を擧起す。(兩重の公案。)眼云く、「此れは是れ長慶の處に學得する底なり、首座分上作廢生。」(筈を劈き窠を奪ふ。)昭無語。(只だ跳得一跳せよ。)眼云く、「只だ萬象之中獨露身といふが如きは、是れ萬象を撥ふか萬象を撥はざるか。」(卻つて胡盧に 倒に藤を織はらる。)昭云く、「撥はず。」(話兩橛と作る。)眼云く、「兩箇。」(明眼は設じ難し。)參隨の左右皆撥ふと云ふ。(轉た堪へざるを見る。)眼云く、「萬象之中獨露身、覺。」(兩彩一賽。)

- ① 駢拇とは莊子に出づ、足の五指が第二指に連りて無用の肉たることを云ふ。
- ② 臍を噬むとは、後悔しても及ばざるの意。
- ③ 已下の二句は米胡の境界を頌す。
- ④ 何れにも物を留めぬ貌。
- ⑤ 大荒經に出づ、崑崙山中に茂れる樹。
- ⑥ 已下二句は仰山の境界を頌す。
- ⑦ 詩經抑の篇に、「白珪の玷たるや 尙ほ磨きつべし」と。
- ⑧ 第三十三則を見よ。
- ⑨ 蘭菊その美を競ひ、その香を争ふを云ふ。
- ⑩ 本則を見よ。
- ⑪ 第九十七則を見よ、共に優劣なきことを云ふ。
- ⑫ 二人相見の様子、輕重なきを喻ふ。
- ⑬ 兩老問答の妙手段を云ふ。

- ⑭ 趙州投子山の大同禪師、曹原、石頭、丹霞、翠微、投子と相承す。
- ⑮ 知音底の者は隱すところ更になし。
- ⑯ 法苑珠林第三に出づ、一念不生のところ、或は父母未生已前の意。
- ⑰ 大死底に到ること。
- ⑱ 三世十方を指す。
- ⑲ 鴻は鴈の大なる鳥、漢の蔡伯喈の女瑛が其の所在を郷里に知らしめんとして、鴈の足に書を繫ぐ、鴈は後に魚に吞まると、漁人魚を得て書を得、瑛の所在を知ると云ふ、即ち使者となる義、前漢書に出づ。
- ⑳ 韶陽は雲門大師のこと。
- ㉑ 睦州とは睦州の陳尊宿にして、黃檗希運禪師の法嗣、臨濟禪師の法兄に當る。
- ㉒ 雪老は雪峯義存禪師のこと。
- ㉓ 舒州の投子和尙が初め圓鑿禪

【頰に云く】 念を離れて佛を見、(草枯れて鷹眼疾し。) 塵を破つて經を出す。(雪盡きて馬蹄輕し。) 現成の家法、(少きにあらす剩るにあらす) 誰か門庭を立つ。(盡く這裏より流出す。) 月は舟を逐うて江練の淨きに行き、(一多無碍、去住自由。) 春は草に隨つて燒痕の青きに上る。(頭上に夾山を薦取せよ。) 撥と不撥と、轉すれば必ず兩頭に走る。(聽くこと叮嚀にせよ。(事は細を厭はず。)) 三徑荒に就いて歸ること使ち得たり。(下坡に走らすんば) 舊時の松菊尚ほ芳馨。(快便逢ひ難し。)

第六十五則 首山新婦

【衆に示して云く】 吒吒沙沙。 剝剝落落。 刁刁蹶蹶。 漫漫汗汗。 咬嚼す可きこと没く、近傍を爲し難し。且く道へ、是れ甚麼の話をぞ。 【擧す】 僧、首山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」(可憐だ新鮮。) 山云く、「新婦、驢に騎れば阿家牽く。」(是れ何の道理ぞ。) 【頰に云く】 新婦驢に騎れば阿家牽く。(草本拈出することを勞せず。) 體段の風流自然を得たり。 描不成畫不就。 笑ふに堪へたり。 顰に敷ふ隣舍の女。(巧

師に參得しても、法は象徴大陽禪師に嗣ぎしを云ふ。
② これ師資の感應道交を示す。
③ 長慶惠稜禪師の法嗣。
④ 今この法系を圖すれば左の如し。
「支沙―地藏―法眼
雪峯―長慶―子昭
⑤ 子昭首座の見得する底は如何。
⑥ 念とは念起、即ち無明を云ふ、無明を離れて佛を見るの意。
⑦ 一塵内にも無量の眞理あること。
⑧ 人々分上に佛徳具はること。
⑨ 月は舟と共に南に行けば南に逐ふて、澄江の綺麗なることを云ふ。
⑩ 春は燒痕の草原も青青となること。
⑪ 陶淵明の歸去來の辭に出づ、「三徑就荒、松菊猶存」と。

を弄して拙と成す。) 人に向つて醜を添へて妍を成さず。(笑を傍觀に取る。)

第六十六則 九峯頭尾

【衆に示して云く】 神通妙用底も脚を放ち下さず、忘縁絶慮底も脚を擡げ起さず。 謂つべし有る時は走殺し、有る時は坐殺すと。 如何が恰好し去ることを得ん。 【擧す】 僧、九峯に問ふ、「如何なるか是れ頭。」(高く威音の前に超ゆ) 峯云く、「眼を開いて曉を覺えず。」(明戸を越えず。) 僧云く、「如何なるか是れ尾。」(獨り劫空の後に歩す。) 峯云く、「萬年の牀に坐せず。」(穴、巢に棲ます。) 僧云く、「頭有つて尾無き時如何。」(先行は到らず。) 峯云く、「終に是れ貴からず。」(奴は婢を見て殷勤。) 僧云く、「尾有つて頭無き時如何。」(末後は太だ過ぐ。) 峯云く、「飽くと雖も力なし。」(甚麼の用處か有らん。) 僧云く、「直に頭尾相稱ふことを得る時如何。」(君臣道合し、上下和同す。) 峯云く、「兒孫力を得て室内知らず。」(各其の分に安す。)

① 怒る貌、泣く貌。
② 山の石の點々と在る貌。
③ 物を扣く貌。
④ 廣々としたる貌。
⑤ 師家の言句の外に意味ありて、容易に師家の腹を窺ふこと能はざることを云ふ。
⑥ 首山省念禪師、風穴延沼禪師の法嗣。
⑦ 言句以外の妙味あり、實に非思量底の佛なり。
⑧ 莊子に出づ、支那の美人に西施あり、西施心に病んで鬢す、隣舍の醜人その眞似を爲して美と思ふを云ふ、即ち醜人が鬢すれば却つて醜を添ふのみ、美を増すことなきを云ふ、妍とは美貌のこと。
⑨ 行かんとなすれば行き、坐せんとなすれば坐する底の妙用を指す。
⑩ 無分別の上の所作を指す。
⑪ 九峯は石霜禪師の法嗣。

ば行ひ舍つれば藏る。(升兒裏に廻し、斗兒裏に轉す。) 鈍躑躅に棲むの鳥。
豈に高く飛び遠く揚ることを解せんや。進退藩に觸るゝの羊。(大方に
獨歩すること能はず。) 人家の飯を喫して、快かに須らく吐却すべし。
自家の牀に臥す。(切に忌む根を生ずることを。) 雲騰つて雨を致し、春生
じ夏長ず。露結んで霜と爲る。(秋收め冬藏す。) 玉線相投じて針鼻を透り、
(聯綿無間) 錦絲絶えず梭腸より吐く。(翻覆通同) 石女機停んで今夜色午に
向ふ。(文彩縦横意自殊なり) 木人路轉じて今月影央を移す。(行くこ
とを解して今時の路に觸れず。)

第六十七則 嚴經智慧

【衆に示して云く】 一塵萬象を含み、一念三千を具す。何に況んや
天を頂き地に立つ丈夫兒、頭を道へば尾を知る靈利の漢。自ら己靈に
辜負し、家寶を埋没すること莫しや。
【擧す】 華嚴經に云く、「我れ今普く一切衆生を見るに、如來の智慧徳相を
具有す。(熊斤斗を翻し、驢栢枝を舞す。) 但だ妄想執著を以て證得せずし

- ① 頭は初めの義、尾は終りの義。
- ② 終始相稱ふときは常に太平無事。
- ③ 莊子に曰く、圓なるものは規に中り、方なるものは矩に中る。
- ④ 論語に曰く、之を用ふるときは行ひ、之れを舍つるときは藏る、唯だ我と爾と是れあるかな。
- ⑤ 事苑に曰く、鈍躑躅は礙へて行かざるなり。
- ⑥ 周易大壯の卦に出づ、進退に窮する羝羊の貌。
- ⑦ 有頭無尾のところ。
- ⑧ 有尾無頭のところ。
- ⑨ 頭尾相稱ふところ、已下の文句深く味ふべし、幾度が諷讃せよ。
- ⑩ 華嚴經の意、一微塵の中に百千の經卷を含む、森羅萬象の一微塵中に包含せらる。

(妄想執著も亦惡からず。)

【頌に云く】 天の如くに蔽ひ、地の如くに載す。(上に通じ下に徹す。) 團となし塊と作す。(刀斧斫れども開けず。) 法界に周うして邊なく、十方に壁落無し。隣虚を析つて内無し、佛眼觀れども見えす。玄微を及盡す。(好事も無きには如かず。) 誰か向背を分たん。(廻避する處無し。) 佛祖來つて口業の債を償ふ。(言多ければ行を傷る。) 南泉の王老師に問取せよ。(杉山を忌卻す。) 人人只だ一莖菜を喫す。(更に餘事の營爲すべき無し。)

第六十八則 夾山揮劍

【衆に示して云く】 寰中は天子の勅、闔外は將軍の令。有る時は門頭に力を得、有る時は室内に尊と稱す。且く道へ、是れ甚麼人ぞ。
【擧す】 僧、夾山に問ふ、「塵を撥つて佛を見る時如何。」(何ぞ必とせん。) 山云く、「直に須らく劍を揮ふべし。(果然) 若し劍を揮はずんば、漁父巢に棲まん。」(坐するときは則ち佛にあらず。) 僧擧して、石霜に問ふ、「塵を撥つて佛を見る時如何。」(見るときは即ち撥はず、撥ふときは即ち見

- ① 法華經の意、一念の間に三千の諸法を具す、三千とは一念に十法界を具し、十法界に十法界を具して百界となり、百界に十如を具して千如となり、これに三世門を具するが故に三千となる、即ち介爾の一念に三千を具有すること。
- ② 箇々獨立の境。
- ③ 一と云へば百を知る利根者。
- ④ 自己本性の靈知を味却すること。
- ⑤ 華嚴經とは佛自内證の境界を説かれたる根本法輪の經、六十華嚴、八十華嚴、四十華嚴の不同あり。
- ⑥ 細なるときは無間に入り、大なるときは方所を統す。
- ⑦ 大なるときを云ふ。
- ⑧ 細なるときを云ふ。
- ⑨ 言句分別を忌むこと。
- ⑩ 南泉と杉山と普請して蕪菜を擇ぶとき、南泉一莖を拈起し

す。霜云く、「渠に國土無し、何れの處にか渠に逢はん。」(坐せざるときは即ち佛)僧廻つて夾山に舉似す。(往來易からず)山上堂して云く、「門庭の施設は老僧に如かず、入理の深談は猶ほ石霜の百歩に較れり。」(各一概を得たり。)

【頰に云く】 ① 牛を拂ふ劍氣兵を洗ふ威。(太平は本是れ將軍の致。)亂を定むる歸功更に是れ誰ぞ。(將軍の太平を見んことを許さず。)
② 一旦の氛埃四海に清し。(但だ凡情を盡せ。)
③ 衣を垂れて皇化自ら無爲。(別に聖解無し。)

第六十九則 南泉白牯

【衆に示して云く】 佛と成り祖と作るをば、汗名を帶ぶと嫌ひ、角を戴き毛を披るをば、推して上位に居く。所以に眞光は耀かず、大智は愚の若し。更に箇の譬を便宜とし、不采を伴る底あり。知んぬ是れ阿誰ぞ。
【擧す】 南泉、衆に示して云く、「三世の諸佛有ることを知らず。(只だ有ることを知るが爲なり。)
① 狸奴白牯御つて有ることを知る。」(只だ有ることを知らざるが爲なり。)

て曰く、道簡大いに供養するに好し、移山云く、但だ道簡のみにあらず、百味珍羞も他また顧みず、南泉曰く、然も是の如くなりと雖も、箇箇須らく嘗め過して始めて得べし」と。

- ① 五畿内と政事は天子の勅命にて行ふこと。
- ② 塞外邊土のこと。
- ③ 宗匠の或る時は將軍の如く、言句棒喝等に自在を得、或る時は天子の如く、向上尊貴を示すことを云ふ。
- ④ 一切萬法知解分別を云ふ。
- ⑤ 閩外將軍の令の如し。
- ⑥ 道悟禪師の法嗣、石霜慶諸禪師のこと。
- ⑦ 渠とは人々自己の佛性、實中天子の勅の如し。
- ⑧ 夾山の爲人、垂手の方便を云ふ。
- ⑨ 石霜の向上の爲人を指す。

【頰に云く】 ① 跛跛挈挈。(近づかざれば忙を休めよ。)
② 駑駘麤麤。(人戯ることを喜ばず。)
③ 百取るべからず、一も堪ふる所なし。(門を開いて又軟、火を種ゑて又濕。)
④ 黙黙として自ら知る田地の穩かなることを。(靴裏に指頭を動す。)
⑤ 騰騰として誰か 肚皮憨なりと謂はん。(呆裏に奸を撒す。)
⑥ 普周法界渾て 餅と成す。(吐不出、咽不下。)
⑦ 鼻孔業垂として飽參に信す。(半を抛ち半を撒す。)

第七十則 進山問聖

【衆に示して云く】 ① 香象の河を渡ることを聞く底も、已に流に隨つて去る。生は不生の性なることを知る底も、生の爲に留めらる。更に定前定後、筭と作り筈と作ることを論せば、劍去つて久し、爾方に 舟を刻むなり。機輪を蹻轉して作麼生か別に一路を行せん。試みに擧す看よ。

【擧す】 ① 進山主、脩山主に問うて云く、「明かに生は不生の性なることを知らば、甚麼と爲てか生の爲に留めらるゝや。」(捩鼻木を照顧せよ。)
脩云く、「筍畢竟竹となり去る、如今筈と作して使ふこと、還つて得てん

- ① 夾山の境界を述べ、爲人を頌す。
- ② 石霜の境界を述べ、爲人を頌す。
- ③ 周易に出づ、黃帝堯舜は衣裳を垂れて天下を治むと云ふ、是れ無爲の化、令せずして行はるゝの意。
- ④ 向上のところ佛の名なきが故に。
- ⑤ 異類を指す、修證の沙汰なきが故に。
- ⑥ 第三十五則を見よ。
- ⑦ 第四十八則を見よ。
- ⑧ 狸奴とは猫、白牯とは牛を云ふ。
- ⑨ 手足の不具者を云ふ、即ち百骸千拙の意。
- ⑩ 毛髮の長く亂れたる貌。
- ⑪ 駑駘とは任運の貌。
- ⑫ ぐづ／＼して居る貌。
- ⑬ 佛法と成すこと。
- ⑭ 人相の氣高きことを云ふ。

や。」(鼻孔他人の手裏に在り。)進云く、「汝向後自ら悟り去ること、在らん。」(大小良を歴して賤と爲す。)脩云く、「某甲只だ此の如し、上座の意旨如何。」(頭を刺して人の懷裏に向ふ。)進云く、「這箇は是れ、監院房、那箇は是れ、典座房。」(毬子を打得して別處に去る。)脩、便ち禮拜す。(且く好心相待つことを作す。)

【頰に云く】 ① 豁落として依を亡じ、(繫驢橛を扳翻す。)高閑にして羈されず。(黄金の鎖を掣斷す。)家邦平帖到る人稀なり。(穩處に脚を下す。)② 些の力量階級を分つ。(強ひて節目を生ず。)③ 蕩蕩たる身心是非を絶す。(怪を見て怪とせざれば、是非絶す。其の怪自ら壞す。)④ 介り大方に立つて軌轍なし。(太平に忌諱無し、何れの處か風流ならざらん。)

第七十一則 翠巖眉毛

【衆に示して云く】 ① 血を含んで人に噴く、自ら其の口を汗す。② 杯を貪つて一世人の債を償ふ。③ 紙を賣ること三年鬼錢を缺く。萬松諸人の爲に請益す、還つて擔干計の處ありや也た無しや。

【衆す】 翠巖 夏末に衆に示して云く、(猶ほ少きを嫌ふこと、在り。)

夏以來兄弟の爲に説話す。(自ら家醜を揚ぐ)看よ、翠巖が眉毛ありや。(口穢ることを害せず)保福云く、「賊と作る人心虚なり。」(也た是れ火裏の人)長慶云く、「生せり。」(雪上に霜を加ふ)雲門云く、「關。」(街を欄り巷を截る。)

【頰に云く】 ① 賊と作る心(贓物已に露る。)人に過ぎたる膽。(傍若無人)歴歴縦横、機感に對す。(白拈巧偷)保福、雲門や、垂鼻唇を欺き、(探頭太た過ぐ)翠巖、長慶や、脩眉眼に映す。(伴つて知らざるを打す。)杜禪和何の限りかあらん。(天童の杜撰は萬松に何似ぞ。)剛ひて道ふ意句一齊に刻ると。(隠さんと欲して彌々露る。)自己を埋没して也た氣を飲み聲を呑む。(子を養ふて父に及ばざれば)先宗を帶累して牆に面ひ板を擔ふ。(家門一世に衰ふ。)

第七十二則 中邑獼猴

【衆に示して云く】 ① 江を隔て、智を闘はしめ、甲を懸けて兵を埋む。觀

① 涅槃經に出づ、菩薩定中に在つて香象渡河を聞くと、是れ無心も猶ほ隔つ、一重の關なることを示す。

② 二見に徹すること。

③ 呂子察今の篇に出づ、即ち人あり、舟中より劍を落す、忽ち舟を刺んで落せしところとなす、舟止つて其の刻みしところより入水す、劍なきことは明かなり、依つて遲臭いと云ふほどの意。

④ 清溪洪進禪師にして、地藏和尚の法嗣。

⑤ 荀とは未悟の時、竹とは悟道の時。

⑥ 已下生不生に關せずして云ふ。

⑦ 知客寮と云ふべきもの。

⑧ 典座寮にして炊事役のこと。

⑨ 無礙自在のこと。

⑩ 平帖とは安穩のこと。

⑪ 階級に超然たること。

⑫ 蕩蕩とは廣き貌。

⑬ 第三十三則を見よ、大方とは天下のこと、佛祖と雖も見下して獨立獨歩の境なり。

⑭ 宗師家の爲人を云ふ、即ち學者のために、迷とか悟とか、種々の方便の言説をなすを云ふ。

⑮ 酒を食つて人の借金まで拂ふこと。

⑯ 冥報記に出づ、鬼神を祭るべき紙もなき意。

⑰ 擔ひ求めて決算するところありや。

⑱ 翠巖令修禪師、雪峰和尚の法嗣、保福、長慶、雲門も皆雪峰の弟子なるがため、此の則は兄弟四人の商量と見るべし。

⑲ 夏とは天竺已來の佛家の規則に一夏九旬と云ふて、九十日間精進修行をなす、夏末とは

面すれば眞鎗實劍を相持す、禿僧の全機大用を貴ぶ所以なり。慢より緊に入る、試みに吐露す看よ。

【擧す】 仰山中邑に問ふ、「如何なるか是れ佛性の義。」(這箇の座主御つて持論するに堪へたり。)邑云く、「我れ備が爲に箇の譬喩を説かん。(假に宜うして眞に宜しからず。)

【頷に云く】 雪屋に凍眠して、歳摧頽。(塾戸開かざれば)窈窕たる蘿門夜開かず。(龍に龍句無し。)寒橋せる園林 變態を看る。(幾と死殺せんとす。)

第七十三則 曹山孝滿

【衆に示して云く】 草に依り木に附き去つて精靈となり、屈を負ひ宛を脚んで來つて鬼祟となる。之を呼ぶ則は錢を焼き馬を奏む、之を遣る則は水を呪し符を書す。如何が家門平安なることを得去らん。

【擧す】 僧、曹山に問ふ、「靈衣掛けざる時如何。」(蟪蛄殻を脱して猶ほ寒枝を抱く。)山云く、「曹山今日孝滿。」(平生に負かず。)

【頷に云く】 清白の門庭四に隣を絶す。(橋後に腮を見れば、與に往來すること莫れ。)

第七十四則 法眼質名

解制に近い頃を云ふ。佛法を誤り説けば、其の罰として眉も鬚も墮落する故事あるがため、翠巖この語を云ふ。

- ① 盜賊は虚言を云ふとのこと。
② 事が起つて來たとのこと。
③ 翠巖も保福も長慶も、共に曲者であるから、關所で充分吟味せなければならぬとのこと。
④ 但しこれ等は一往文面の上の解釋にして、その眞意は實參實究せざるべからず。
⑤ 人相が悪くて一度見ても氣持が悪い。
⑥ 目付きが怪しいこと。
⑦ 邪解の人を云ふ。
⑧ 自分ばかりでなく先祖にまで迷惑を掛ける擔板漢を云ふ。
⑨ 擔板とは一邊の理のみを見る變り者のこと。
⑩ 史記に出づ、漢王項羽と戦ふこと數年、漢王曰く、吾れ智

- を問はしめて力を問はしむること能はずと、眞の勇者は常に武器を收め居るも、現而相戦ふ時は大勇を奮ふの意。
① 緩慢より緊急に入ること。
② 仰山は馮山の注詞、中邑は馬祖の法嗣。
③ 六窓一猿の譬喩は俱舍論等に出づ。
④ 臘月三十日に及んだこと。
⑤ 中邑の未だ睡り居ること。
⑥ 氣候の變化し來りしこと。
⑦ 仰山を春風に譬ふ。
⑧ 若し是れなりと執着するところありとせば、依草附木の類なり、即ち佛見法見等の人を指す。
⑨ 自己の邊鄙を亡ぜざる者は、生死の崇りを受く。
⑩ 師家の對機方便の自在なることを云ふ。
⑪ 一切何物をも寄せ付けぬことを云ふ。

【衆に示して云く】 富萬徳を有つて、蕩として穢塵無し。一切の相を離れて、一切の法に即す。百尺竿頭に歩を進めて、十方世界に身を全うす。且く道へ、甚饜の處より得來るや。

【擧す】 僧、法眼に問ふ、「承る、教に言へることあり、無住の本より一切の法を立すと、如何なるか是れ無住の本。」(狗口を合取せよ。)眼云く、「形は未質より興り、(眼華すること莫れ。)名は未名より起る。」(畢竟喚んで甚麼とか作さんや。)

【頌に云く】 没蹤跡、(羚羊角を挂く。)斷消息。(久しく負いて逢はず。)白雲根無し、(妙體本來處所なし。)清風何の色ぞ。(通身那ぞ更に蹤由有らん。)

第七十五則 瑞巖常理

【衆に示して云く】 喚んで 如如となす、早く 是れ變せり。智不到の處、切に思む道著することを。這裏還つて參究の分ありや也た無しや。

【擧す】 瑞巖、巖頭に問ふ、「如何なるか是れ本常の理。」(理有れば高聲に在らず。)頭云く、「動せり。」(理を知るべし。)巖云く、「動の時如何。」(再犯容さす。)頭云く、「本常の理を見ずや。」(物を相して價を作す。)巖行思す。(卻つて慙愧を識るや。)頭云く、「肯ふ時は即ち未だ根塵を脱せず。(箇の中肯路なし。)肯はざる時は永く即ち生死に沈む。」(堂に當つて正坐せず、那ぞ兩頭の機に赴かん。)

【頌に云く】 圓珠穴あらず。(甚の處に手を下さん。)

第七十六則 首山三句

【衆に示して云く】 一句に三句を明し、三句に一句を明す。三一相涉

曹山本寂禪師、洞山和尙の法嗣。

① 向上の一路へ進み達したる時を云ふ。

② 大解脱を得て、其の後は如何と云ふ意。

③ 心中に迷悟染淨等の戲論なき境界を云ふ。

④ 雲衣掛けざる當體。

⑤ 正偏自在のところ。

⑥ 顛酒を受するところ。

⑦ 夷猶とは猶豫のこと。

⑧ 性具の萬徳を具して、纒細の妄塵をも蕩盡すること。

⑨ 已下の二句、楞嚴經第二に出づ。

⑩ 第七十九則を見よ。

⑪ 法眼文益禪師、雪峰、玄沙、地藏、法眼と相承す。

⑫ 維摩經觀衆生品に出づ、無住とは混沌未分の時を云ふ。

⑬ 寶藏論廣照空有品に出づ。

⑭ 白雲無根の釋と見よ。大虛のこと。

① 清風何色の釋と見よ。

② 一切萬法を指して普賢の現成となす。

③ 空の異名、不變不異不動の貌。如と云へば既に變ず、如は言句不及のものなり、如と認むるを得ず。

④ 萬松老人が會下に對しての語。

⑤ 瑞巖師產禪師、巖頭和尚の法嗣。

⑥ 巖頭の言句に執着し來る。

⑦ 道元禪師の普勸坐禪儀に於ける道本圓通の意。

⑧ 争を修證を假らんの意。

⑨ 根塵とは知解分別を指す。

⑩ のんびりとした貌。

⑪ 把住の意、雲門の如きは一句中に三句を具すと云ふ、函蓋乾坤の句と截斷衆流の句と隨波逐浪の句との如し。

⑫ 放行にして前と反對の意。

らす、分明なり向上の路。且く道へ、是れ那の一句か先に在る。

【擧す】 首山、衆に示して云く、「第一句に薦得すれば、佛祖の與に師となる。(猶ほ是れ萬松が兒孫。第二句に薦得すれば、人天の與に師となる。(人家の男女を教壞す。)) 第三句に薦得すれば、自救不了。」(這の不啣を説く漢。僧云く、「和尚は是れ第幾句に薦得するや。」(備 試みに卜度せよ。)) 山云く、「月落ちて三更、市を穿つて過ぐ。」(二句辨すべし、一鐵空に遶る。)

【頰に云く】 佛祖の鬪體一串に穿つ。(伊が跣跳するに一任す。)) 宮漏沈沈として密に箭を傳ふ。(外人の知ることを許さず。)) 人天の機要 千鈞を發す。(輕を以て重を勞す。)) 雲陣輝輝として急に電を飛ばす。(眨眼すれば蹉過す。)) 箇の中の人轉變を看よ。(計時に臨むに在り。)) 賤に遇うては則ち貴、貴には則ち賤。(心に本より自ら同じきことを知る、所以に欣怨なし。)) 珠を罔象に得て至道綿綿たり。(一念不生全體現す。)) 刃を亡牛に游ばしめて赤心片片たり。(泪は痛腸より出づ。))

① 超直入如来地にして大解脱を得たることを云ふ。

② 更に用處なく、自身すら救ひ得ざるを云ふ。

③ 洞山の麻三斤と答へしと同じく、佛祖も窺ひ知ること能はず。

④ 初學記第二十五卷に段慶が漏刻法を明す、實に佛祖も伺ふこと能はざるの意。

⑤ 一鈞は三萬斤に當る、人天の機の重き貌なり。

⑥ 莊子天地の篇に出づ、罔象とは盲目なり。

⑦ 莊子養生主の篇に出づ、首心の月落三更の境界を頌するが。

⑧ 本分は無相なる故、名相の届かぬことを云ふ。

⑨ 萬松は止むを得ず第二義門に下りて説くがため、跡方の釘目、罽目が見えて居るとの

第七十七則 仰山隨分

【衆に示して云く】 人の空に畫くが如し、筆を下さば即ち錯る、那ぞ模を起して様を作すに堪へんや。○ 萬松已に是れ桎索を露す、條あれば條を攀ち、條無ければ例を攀づ。

【擧す】 僧、仰山に問ふ、「和尚還つて字を知るや否や。」(是れ甚麼の字ぞ。)) 山云く、「分に隨ふ。」(仁に當つて讓らす。)) 僧、乃ち右旋一匝して云く、「是れ甚麼の字ぞ。」(已に偏傍を見る。)) 山、地上に於て箇の十の字を書す。(更に畫點を書す。)) 僧左旋一匝して云く、「是れ甚麼の字ぞ。」(半滿俱に分る形聲と轉注と。)) 山、十の字を改めて 卍字と作す。(機輪轉する處、智眼猶ほ迷ふ。)) 僧、一圓相を畫いて、兩手を以て托けて、修羅の日月を掌にする勢の如くにして云く、「是れ甚麼の字ぞ。」(細に切脚を看よ。)) 山乃ち圓相を畫いて卍字を圍卻す。(天下の衲僧跳不出。)) 僧乃ち樓至の勢を作す。(門外の金剛汝を笑はん。)) 山云く、「如是如是、汝善く護持せよ。」(空を闢し夢を鎖して、牢く掌を收む。))

意、露桎索のこと第二十三則を見よ。

① 第二十七則を見よ。

② 人々自己の境界を擧揚するなり。

③ 卍字とは華嚴經第四十八卷に出づ、第八卷の疏鈔に淨法の説を擧ぐ、是れ徳者の相にして、正しくは吉祥海雲と云ふ、衆徳深廣なること海の如く、物を益すること雲の如しと。

④ 阿修羅王の能く日月を障蔽するが故に斯く云ふ。

⑤ ⑥の形になすを云ふ。

⑦ 樓至とは啼泣と譯す、賢劫千佛の最後に成佛せしもの。

⑧ 僧の一圓相を畫きしところ。

⑨ 虚空に印する形にして、分別の届かざる文字の意。

⑩ 天輪を左旋とすれば、地軸は右旋なり。

⑪ 武緯を十字とすれば、文緯は

【頌に云く】 ① 道環の虚盈つること靡し。(雪を擔つて河を填む。) ② 空印の字未だ形れず。(切に彫刻を忌む。) 妙に 天輪地軸を運し。(權衡手に在り。) ③ 密に 武緯文經を羅ぬ。(將相の全才。) ④ 放開控聚。(睦州猶は在り。) ⑤ 獨立周行。(老氏復た生ず。) ⑥ 機玄樞を發して分青天に電を激す。(手を措くと及ばず。) ⑦ 眼に紫光を含んで分白日に星を見る。(四天下を照破す。)

第七十八則 雲門餠餅

【衆に示して云く】 ① 純天に價を索むれば、搏地に相酬ゆ、百計經求す一場の 懷懼、還つて進退を知り休咎を識る底ありや。

【舉す】 僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ 超佛越祖の談。」(此の間太高生。) 門云く、「餠餅。」(一舉四十九。)

【頌に云く】 餠餅を超佛越祖の談といふ。(一大藏教も詮注し及さず。) 句中に味無し若爲が參せん。(甚の處にか口を下さん。) 稱僧一日如し飽くことを知らば、(始めて知る餠餅醍醐毒藥なることを。) 方に見ん雲門の面慙ぢざることを。(雲門人を見るに眼なし。)

第七十九則 長沙進歩

【衆に示して云く】 ① 金沙灘頭の馬郎婦、別に是れ精神。 ② 瑠璃瓶裏に饑饉を擣く。 誰か敢て轉動せん。 人を驚す浪に入らずんば、意に稱ふ魚に逢ひ難し。 ③ 寛行大步の一句作麼生。

【舉す】 長沙、僧をして 會和尚に問はしむ、「未だ南泉に見えざる時如何。」(早晨に粥有り。) 會、良久す。(問著すれば便ち屎臭氣。) 僧云く、「見えて後如何。」(更に與に挑別す。) 會云く、「別に有るべからず。」(只だ屎堆裏に向つて躑倒す。) 僧廻つて沙に舉似す。(走口走舌の漢。) 沙云く、「百尺竿頭に坐する底の人。(竿下底一場の懷懼。) 然も得入すと雖も未だ真と爲さず。(孤危立せず、道方に高し。) 百尺竿頭 須らく歩を進むべし。(甚底ぞ大いに箇の割捨するが如くなる。) 十方世界是れ全身。」(始めて信す蒲團是れ天にあらざることを。) 僧云く、「百尺竿頭如何が歩を進めん。」(果して這箇の在る有り。) 沙云く、「朗州の山、澧州の水。」(築著碁著。) 僧云く、「不會。」(可憐だ聰明。) 沙云く、「四海五湖王化の裏。」(跼跳するに一任す。)

① 却來の消息を明す、魚籃觀音の故事にして、釋氏稽古略に出づ。
 ② 碧巖第九十八則に出づ、百尺竿頭更に自由の取れぬところ。
 ③ 惡練なる爲人の活手段を示す。
 ④ 靈大地無礙の動作を云ふ。
 ⑤ 長沙景岑禪師、南泉の法嗣。
 ⑥ 南泉下庵主にして、南泉の法嗣。
 ⑦ 會和尚の境界を云ふ。
 ⑧ 四海五湖は天子の御領分、松

非色色齊し。(無盡藏中受用し了らす。) 有信の風雷出蟄を催し、(節氣相饒さす。) 無言の桃李自ら蹊を成す。(水到れば渠成る。) 時節に及んで耕犁を力む。(避くる者は做さす。) 誰か怕れん春晴脛を没する泥。(做す者は避けす。)

第八十則 龍牙過板

【衆に示して云く】 大音は聲希に、大器は晚成す。 盛忙百闇の裏に向つて呆を伴り、比古千年の後を慢飯す、且く道へ、是れ如何なる底の人ぞ。 【擧す】 龍牙、翠微に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」(一廻拈出すれば一廻新なり。) 微云く、「我が與に禪板を過し來れ。」(本を得て利を圖る。) 牙禪板を取つて翠微に與ふ。(兀兀矜憐。微接待して便ち打つ。情に是なることを知る。) 牙云く、「打つとは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」(半は肯ひ半は肯はず。) 又 臨濟に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」(頑皮癩肉。) 濟云く、「我が與に蒲團を將ち來れ。」(好本多同。) 牙蒲團を取つて臨濟に與ふ。(錯を將て錯に就く。) 濟、接待して便ち打つ。(順手

は直く棘は曲れり、何等人の造作を假らす。
⑤禮記に出づ、孟春の月、東風吹けば蟄蟲は出でて動き始む、即ち有信は長沙、出蟄は會和尚に當る。
⑥諺に「桃李言はず、下自ら蹊を成す」と、會和尚を讃歎するの意。
⑦老子第四十一章の語。
⑧多忙な間に馬鹿面して悠然として居るが、その心底は實に凡庸を絶して居ること。
⑨龍牙居過禪師、法を洞山悟本禪師に嗣ぐ。
⑩翠微無學禪師、法を丹霞天然禪師に嗣ぐ、龍牙の祖父の靈巖と法の從兄弟に當る。
⑪長く坐禪して疲る、時に倚り懸る板を云ふ。
⑫臨濟惠支禪師、法を黃檗希運禪師に嗣ぐ。
⑬蒲團禪板は西來意の機用なり、故に明即明と云ふ、然れども西來意には機用屈かざる故、要且無祖師意と云ふ。
⑭成就とは成就の義、即ち子房が封侯を賞ばざるが如く、早合點せずして大器の晩成を計りしを云ふ。
⑮龍牙の境を云ふ、如何なる宗匠の接待をも、盡とも思はぬ見識を云ふ。
⑯博物志に出づる故事にして、これまた龍牙の境を頌するもの。
⑰會元十三に出づ、翠微に見ゆること。
⑱これまた會元十三に出づる話、即ち臨濟に見ゆること。
⑲天童座下への示衆なり。
⑳吳の船の名。
㉑一念動すれば萬境競ひ起ること。
㉒妄即眞と悟了すれば、覺處に執して法執生ずること。

骨椽。) 牙云く、「打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師意なし。」(恚のごとく軟頑なることを得。) 牙後に住院す。 僧問ふ、「和尚當年翠微と臨濟とに祖意を問ふ、二尊宿明すや也た未だしや。」(貧兒舊債を思ふ。) 牙云く、「明すことは即ち明す、要且つ祖師意無し。」(焦搏打著す連底の凍。) 【頌に云く】 蒲團禪板龍牙に對す。(計穩かにして、脊を屠しうするを甘んず。) 何事ぞ機に當つて作家ならざる。(人を咬む狗は齒を露さす。) 未だ成蹊して目下に明なることを意はず。(人遠見する無し。) 將に流落して天涯に在らんとすることを恐る。(必ず近き憂有り。) 虚空那ぞ劍を挂けん。(鋒鏑の事を假らす。) 星漢卻つて槎を浮ぶ。(別に向上の一路有り。) 不萌の草に香象を藏すことを解し、(佛眼戲れども見えず。) 無底の籃に能く活蛇を著く。(一般に拈出して君と殊なり。) 今日江湖何の障礙かあらん。(太平に忌諱なし。) 通方の津渡に 紅車あり。(何の處か風流ならざらん。)

第八十一則 玄沙到縣

【衆に示して云く】 動すれば即ち影現じ、覺すれば即ち塵生ず。 擧

起すれば分明、^①放下すれば穩密。本色道人の相見、如何が説話せん。

【擧す】^②玄沙、蒲田縣に到る、百戲して之を迎ふ。次日小塘長老に問ふ、「昨日許多の喧鬧、甚麼の處に向つてか去るや。」(又闌也。)小塘、袈裟角を提起す。(果然として手忙しく脚亂る。)沙云く、「顛挑沒交涉。」(證據を謝す。)

【頌に云く】^③夜壑に舟を藏し、衲子は謾じ難し。澄源に棹を著く。(肯て死水に墮せんや。)龍魚は未だ知らず水を命となすことを。(局に當る者は迷ふ。)折筈は妨げず聊か一攪することを。(草を打つて蛇を驚す。)玄沙師、小塘老。(一狀に領過す。)函蓋箭鋒。(開き易きは終始の口。)探竿影草。(保ち難きは歳寒の心。)潛縮や、老龜蓮に巢ひ、(身を藏す處、沒蹤跡。)遊戯や華鱗藻を弄す。(沒蹤跡の處身を藏すこと莫れ。)

第八十二則 雲門聲色

【衆に示して云く】^④聲色を斷せざれば、是れ隨處墮、^⑤聲をもつて求めいろをもつて見れば、如來を見ず。路に就いて家に還る底あること莫しや。

①師家面前に一言擧起すれば、分明に了解出来ること。
②萬事を放下して無物のところ、平穩親密となる。
③玄沙師備禪師、雲峯の法嗣。
④種々なる餘興をなして迎ふる事。
⑤否、さうでない、と云ふ程のこと。

⑥莊子に出づ、即ち此の二句は玄沙の爲人せらるゝを云ふ。
⑦天下の學者を指して龍魚に喩ふ。
⑧玄沙と小塘老との兩知音の出合を賞して洵に自由の境界を頌す。
⑨史記に出づ、龜千歲にして蓬萊の上に遊ぶと云ふ。
⑩文選に出づ、共に小塘老の自由の境を讚歎す。
⑪六塵を懸ますんば一切處に自在ならざる意。
⑫金剛經の偈に、「若以色見

【擧す】^①雲門、衆に示して云く、「聞聲悟道。(雙丸耳を塞ぐ。)見色明心。(兩葉睛を遮る。)^②觀世音菩薩、錢を將ち來つて餠餅を買ふ、手を放下すれば卻つて是れ饅頭。」(又風に別調の中に吹かる。)

【頌に云く】^③門を出でて馬を躍して撻搶を掃ふ。(闔外は將軍の令。)^④萬國の煙塵自ら肅清。(風行けば草偃す。)^⑤十二處、閑影響を忘じ。(併せて一家となす。)^⑥三千界に淨光明を放つ。(更に兩様無し。)

第八十三則 道吾看病

【衆に示して云く】^①通身を病と做す、^②摩詰瘥え難し。是れ草醫するに堪へたり。^③文殊善く用ふ争か向上の人に參取し、箇の安樂の處を得るに如かん。

【擧す】^④澆山、道吾に問ふ、「甚麼の處より來る。」(來處分明ならんことを要す。)^⑤吾云く、「看病し來る。」(福田の第一は即ち無にあらす。)^⑥山云く、「幾人あつて病む。」(更に兩等を要す。)^⑦吾云く、「病者と不病者とあり。」(卻つて是れ備第二月有り。)^⑧山云く、「不病者は是れ智頭陀なること莫しや。」

①我、以音聲「求我、是人行邪道、不能見如来」こと。
②世の苦惱せる衆生が救ひを求め、音聲を觀じて、直ちに拔濟する大慈悲心の菩薩なれど、敢へて遠きに求むる勿れ、人々是れ本具の觀世音菩薩なり。
③錢を六根とすれば、餠餅は六塵なり。
④第二義門に下りて説くこと。
⑤煙塵は世の亂れたること、肅清とは太平無事に治まること。
⑥六根六塵何物も留めんこと。
⑦維摩詰、即ち淨名のこと、維摩經に衆生の煩惱病を我が病となすとあり。
⑧文殊善く殺活自在の用を爲して、盡大地を藥となして病を醫す。
⑨道吾圓智禪師、藥山和尚の法嗣。

〔陷虎の機。〕吾云く、「病と不病と總に他の事に干らす、速かに道へ、速かに道へ。」〔卻つて葫蘆に倒に藤を繳はらる。〕山云く、「道ひ得るも也た。没交渉。」〔禍は慎家の門に入らず。〕

〔頤に曰く〕 妙藥何ぞ曾て口を過さん。〔吞不入吐不出。〕神醫も能く手を捉ふること莫し。〔摸索する處無し。〕 存するが若くにして渠本無に非ず。〔唯だ言ふ天下に徧しと。〕至虚にして渠本有に非ず。〔纖毫を見ず。〕滅せずして生じ、〔虚なることは谷神の常に死せざるが如し。〕亡びずして壽し。〔道は象帝に先つて自ら長生す。〕全く 威音の前に超え、〔舒べて頭に到らず。〕 獨り劫空の後に歩す。〔巻いて尾に到らず。〕 成平や天蓋ひ地撃ぐ。〔乾坤を把定す。〕 運轉や鳥飛び兔走る。〔造化を斡旋す。〕

第八十四則 俱胝一指

〔衆に示して云く〕 一聞千悟一解千從、上士は一決して一切了す、中下は多聞なれども多く信せず。 尅的簡當の處、試みに拈出す看よ。 〔擧す〕 俱胝和尚凡そ所問あれば只だ一指を豎つ。〔許多の氣力を費して

作麼せん。〕

〔頤に云く〕 俱胝老子指頭の禪。〔驢蹄を縮卻せよ。〕三十年來用不殘。〔今に至るまで踐手亂下。〕信に道人方外の術あり。〔這裏使ふこと著す。〕了に俗物の眼前に看る無し。〔猶ほ少くを嫌ふこと在り。〕所得甚だ簡に、〔乾坤に逼塞す。〕施設彌寬し。〔一捏と消せず。〕 大千利海毛端に飲む。〔涓滴を留めず。〕 麟龍限り無し誰が手に落つるや。〔天童猶ほ在り。〕珍重す 任公釣竿を把ることを。〔人を驚す手段を妨げず。〕 師復た一指を豎起して云ふ、看よ。〔人を慚惶殺す。〕

第八十五則 國師塔樣

〔衆に示して云く〕 虚空を打破する底の鉛錠、 華嶽を擘開する底の手段あつて、始めて元 縫罽なき處、瑕痕を見ざる處に到る。且く誰か是れ恁麼の人ぞ。

〔擧す〕 肅宗帝、 忠國師に問ふ、「百年の後所須何物ぞ。」即今也た少からず。國師云く、「老僧が與に箇の 無縫罽を作れ。」〔甚の處に向つて

① 智頭陀とは道吾のこと。
② 元來言句に干らす、故に言ふも没交渉なりとの意。
③ 靈大地これ妙藥ならざるはなし、故に已下の句を頌す、深く味ふべし。
④ 五百塵點劫以前の出世佛にして、無量劫以前と云ふこと。
⑤ 空劫以後のことにして、是れ亦無量劫以後の意。
⑥ 成平とは十成平等の略。
⑦ 日朝日は東より出で、日夕日は西に沈む、何をか怪むべき。
⑧ 分明に的確にして簡略極當のころを指す。
⑨ 婺州俱胝和尚、常に俱胝陀羅尼を誦するため、終に其の名となる、天龍和尚より一指頭の禪を相傳す。
⑩ 楞嚴經第二に、一毛端に於て能く十方の國土を containment するこ

とを説く。
① 天下衆學の領袖を麟龍と云ふ。
② 任公は莊子外物篇に載す、要するに俱胝和尚を賞揚するの意。
③ 俱胝和尚が一指頭を豎起すれば、三世の諸佛も退身するの意。
④ 空相をも混じするの意。
⑤ 色相を掃蕩するの意、華嶽とは支那五岳の一。
⑥ 縫罽とは迷悟のこと。
⑦ 唐の玄宗皇帝の子、代宗の父に當り、深く佛法に歸依す。
⑧ 南陽慧忠國師、六祖惠能禪師の法嗣。
⑨ この問答は忠國師御遷化後、如何にすべきやと云ふにあり、依つて忠國師の臨終の時、訪問せられての問答と見るべし、而して忠國師は代宗の大曆十年の潤化ゆゑ、今の

か手を下さん。帝曰く、「請ふ師塔様。」(描不成、畫不就。)國師良久して云く、「會すや。」(這裏會すことを得ず、會せざれども別に求むること莫れ。)帝曰く、「不會。」(卻つて些子に較れり。國師云く、「吾れに付法の弟子耽源といふものあり、卻つて此の事を諳んず。」「祖禰了せざれば、殃兒孫に及ぶ。後、帝、耽源に詔して此の意如何と問ふ。(作家の君王、遺囑を忘れず。源云く、「相の南、譚の北。(天は高く地は厚く、日は左月は右。中)に黄金ありて一國に充つ。(虚空に逼塞す。無影樹下合同船。(密々として金刀剪れども開けず。瑠璃殿上に知識無し。)(寂々として簾垂れて顔を露さす。)

【頌に云く】 孤迥迥。(萬法と侶たらず。)^① 圓陀陀。(無欠無餘。)^② 眼力盡る處高うして峨峨たり。(研額して望めども及ばず。)^③ 月落ち潭空しうして夜色重し。(盡十方界一錠の墨の如し。)^④ 雲收り山瘦せて秋容多し。(體露金風。)^⑤ 八卦位正しく、(天地と其の徳を合す。)^⑥ 五行氣和す。(日月と其の明を合す。)^⑦ 身先づ裏に在り見來るや。(到るときは即ち點せず。)^⑧ 南陽父子卻つて有ることを知るに似たり。(且く一半を信ず。)^⑨ 西竺の佛祖如奈何ともする無し。(千聖從來下風に立つ。)

第八十六則 臨濟大悟

【乘に示して云く】 銅頭鐵額天眼龍睛、雕背魚鰓熊心豹膽なるも、金剛劍下是れ計を納れず、一籌すること獲ず。甚麼と爲てか此の如くなる。

【擧す】 臨濟、黄檗に問ふ、「如何なるか是れ 佛法的の大意。」(殺人は恕すべし、情理は容れ難し。)^① 檗便ち打つ。(棒々血を見る。)^② 是の如きこと三度、乃ち檗を辭して 大愚に見ゆ。(重に便して輕に便せず。)^③ 愚問ふ、「甚麼の處より來る。」(險照願せよ、著。)^④ 濟云く、「黄檗より來る。」(杖擔猶は在り。)^⑤ 愚云く、「黄檗何の言句かありし。」(這裏好し響を報するに。)^⑥ 濟云く、「某甲三たび佛法的の大意を問ひ、三度棒を喫す、知らず過ありや過無しや。」(更に六十棒を少く。)^⑦ 愚云く、「黄檗恁麼に老婆、爾が爲に微困なことを得たり。更に來つて有過無過を問ふ。」(再犯容さす。)^⑧ 濟、言下に於て大悟す。(始めて痛痒を知る。)

① 肅宗とは代宗の誤りか。
② 無形の塔とも云ふべきものか。
③ 耽源應真禪師、忠國禪師の法嗣。
④ 碧巖には、「湘之南潭之北、中有二黄金一先一國、無影樹下合同船、瑠璃殿上無知識」と云ひて響實の著語を挾む、これ無縫塔を頌せるもの、別に解釋すること能はず、予の知れる京都西山西芳寺の黄金池は、夢想國師の造庭にして、無縫塔の頌に依つて命名せしもの多し、即ち湘南亭、潭北亭、黄金池、無影樹、合同亭、瑠璃殿等は是れなり。
⑤ 高くて秀でたる貌。
⑥ 圭角なく圓い貌。
⑦ 知解分別の及ばざるを云ふ。
⑧ 萬法正位に住して不足なきを云ふ。
⑨ 人々五尺の境を云ふ。

① 無縫塔の由来を示す。
② 忠國師も耽源も少しは合點して居るやうに見えるとの意。
③ 靈利の衲僧にして、臨濟の境界を云ふ。
④ これは師匠の黄檗の境界を云ふ。
⑤ 黄檗希運禪師、百丈懷海禪師の法嗣にして、臨濟義玄禪師の嚴師なり。
⑥ 佛法の第一義諦と云ふこと。
⑦ 高安大愚禪師、馬祖の法嗣なる歸宗智常に法を嗣ぐ。
⑧ 黄檗は實に老嫗親切なものなり、流石汝のためには困つたであらうとの意。
⑨ 九包とは風風のこと、難とは小鳥のこと、即ち臨濟を云ふ。
⑩ 千里の名馬の駒、駒は小馬のことにて、即ち臨濟に當る。
⑪ 臨濟の大悟した處を云ふ。
⑫ 大愚の處に於て發奮せし様子

【頰に云く】 九包の雛、(羽翼既に成る。)千里の駒。(神駿亦備ふ。)眞風箒を度し、(一窺虚通す。)靈機樞を發す。(一撥便ち轉す。)劈面に來る時飛電急なり。(擬議を容さず。)迷雲破る、處太陽孤なり。(舊時の光彩。)虎鬚を拵づ。(萬松門下誰か敢てせん。)見るや也た無しや。(急に眼を著けよ。)筒は是れ雄々たる大丈夫。(老婆心切を爭奈せん。)

第八十七則 疎山有無

【衆に示して云く】 門闔さんと欲すれば一撈して便ち開く、缸沈まんと欲すれば一篙して便ち轉す。車箱谷に入つて歸路なし、箭筈天に通じて一門あり。且く道へ、甚麼の處に向つて去るや。

【擧す】 疎山、瀉山に到つて便ち問ふ、「承る、師言へることあり、有句無句は藤の樹に倚るが如しと、(人の唇齒に挂く。)忽然として樹倒れ藤枯る、句何の處に歸するや。」(言を承くるものは喪し、句に滯るものは迷ふ。)瀉山呵呵大笑す。(禹力到らざる處、河聲流れて西に向ふ。)疎山云く、「某甲四千里に布單を賣り來る、和尚何ぞ相弄することを得たる。」(草鞋

- ① 黄髮の虎鬚を拵でしこと。
- ② 天童が坐下への示衆。
- ③ 學人の執を掃はんとする時は一氣に掃蕩せよとの意。
- ④ 出身の途なき様子、杜甫望嶽の詩に出づ。
- ⑤ 向上の一路のみあること。
- ⑥ 疎山匡仁禪師、洞山悟本禪師の法嗣。
- ⑦ 有句無句の歸處を問ふ。
- ⑧ 疎山は一句のために自分の瘦子を賣つて旅費に充て、四千里を遠しとせすして來り、疎山と相見し問答せしこと。
- ⑨ 瀉山は半ば憐れみ、半ば馬鹿氣た事と思ひ、侍者に命じて旅費を瀉山に與へて歸らしむ。
- ⑩ 獨眼龍とは明昭のこと、明昭徳謙禪師は羅山の法を受け、氣鋒敏捷にして富るものなし、左眼を失するがため、遂にし擬て獨眼龍と云ふ。
- ⑪ 疎山の知音ならざりしを惜しむ。
- ⑫ 有無迷悟を投げ捨て、瀉山に問ふこと。
- ⑬ 普通の笑でないこと。
- ⑭ 笑裏に刀あることを見破つたかと云ふこと。
- ⑮ 言句葛藤や思慮分別の機關を絶して居ること。
- ⑯ 無用のことを云ふ。
- ⑰ これまた無辨白のこと。
- ⑱ 眞箇見性底の衲僧に就いて云ふ、楞嚴經第六卷に此の文あり。
- ⑲ 根塵有りの儘實體なく、唯だ病眼の前にのみ見ゆることを示す。
- ⑳ 楞嚴經第三卷の文なり。
- ㉑ 瀝乾と云ふも波浪は依然たり。
- ㉒ 充滿と云ふも眼に掛かるものはなし。

錢還し來るや未だしや。)瀉、侍者を喚んで、錢を取つて這の上座に還せしと。(不義の財は我れに於て浮べる雲の如し。)遂に囑して云く、「向後獨眼龍あつて、子が爲に點破し去ることあらん。」(更に四千里有り。)後に明招に到つて前話を擧す。(一客兩主を煩す。)昭云く、「瀉山をば頭正しく尾正しと謂つべし、只だ是れ知音に遇はず。」(自らは蒲繩短し、古井の深きに干むるに非ず。)疎、復た問ふ、「樹倒るれば藤枯る、句は何の處に歸するや。」(又恁麼にし來るや。)昭云く、「更に瀉山をして笑轉た新たならしめん。」(別人の拳頭をもつて地に畫く。)疎、言下に於て省あり。(布單の債を還し了れり。)乃ち云く、「瀉山元來笑裏に刀あり。」(始めて覺ゆ皮を破つて血を見ることを。)

【頰に云く】 藤枯れ樹倒れて瀉山に問ふ。(行いては到る水の窮まる處、坐しては看る雲の起る時。)大笑呵呵豈に等閑ならんや。(險と相弄する會を作さんと。)笑裏に刀あり窺得破す。(將に謂へり別に有りと。)言思路無うして機關を絶す。(四千里の地我れを賺し來る。)

第八十八則 楞嚴不見

【衆に示して云く】 見あり不見あり 日午燈を點す。見無く不見無し 夜半墨を潑ぐ。若し見聞は幻覺の如くなることを信せば、方に聲色空華の若くなることを知らん。且く道へ、教中還つて衲僧の説話ありや。

【擧す】 楞嚴經に云く、「吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。」

(是れ何の心伴ぞ。) 若し不見を見るといふは、自然に彼の不見の相に非ず。(自知することは即ち得たり。) 若し吾が不見の地を見ずんば、自然に物に非ず。云何ぞ汝に非ざらん。(心忙しく手急にして、推出し擁入す。)

【頷に云く】 滄海を 瀝乾し、(依然として白浪滔天。) 太虚に 充滿す。(毫釐絲忽を見ず。)

第八十九則 洞山無草

【衆に示して云く】 動する則は身を千丈に埋め、動せざる則は當處に苗を生ず。直に須らく兩頭撒開し中間放下するも、更に草鞋を買うて行脚して始めて得べし。

【擧す】 洞山、衆に示して云く、「秋初夏末、兄弟或は東し或は西す。直に須らく 萬里無寸草の處に向つて去るべし。」(猫を咬かして枯井に入る。) 又云く、「只だ萬里無寸草の處作麼生か去らん。」(一言既に發すれば、驕馬も追ひ難し。)

【頷に云く】 草漫漫。(直下に底無し傍に邊無し。) 門裏門外君自ら看よ。(願みて絆倒を照す。)

【衆に示して云く】 屈原獨り醒む正に是れ 爛醉、仰山夢を説く 恰も

第九十則 仰山謹白

【衆に示して云く】 屈原獨り醒む正に是れ 爛醉、仰山夢を説く 恰も

① 見不見の相を離れての語。
② 廻り遠い話と云ふこと。
③ 衆とは何ぞや、人々自己を探つて見よ。
④ 一念動するときは生死を脱すること能はず。
⑤ 一念動せず、萬法の空寂を悟るときは、悟見の苗を生ず。
⑥ 知解分別に關せざるところ。
⑦ 石霜山の慶諸禪師を指す。
⑧ 大陽山の賢玄禪師を指す。
⑨ 草の大地一杯に蔓ること。
⑩ 第三十五則を見よ。
⑪ 天童座下への示衆。
⑫ 洞山、石霜、大陽の三大老に隨つて宗旨を究めよとの意。
⑬ 楚の三閭の大夫、第四十一則に出づ。
⑭ 唯だ是れ世間の醒にして、眞覺にあらざること。
⑮ 夢覺本來不二、夢もなく覺も

覺時に似たり。且く道へ、萬松恁麼に説き、諸人恁麼に聴く。且く道へ是れ覺か是れ夢か。

【擧す】 ① 仰山夢に彌勒の所に往いて、第二座に居す。(且く道へ、第一座は是れ誰ぞ。) 尊者白して云く、「今日第二座の説法に當る。」(低聲來つて是非を説くもの。) 山乃ち起つて白推して云く、「諦觀法王法、法王法如是。」(摩訶衍の法は、此の義文長し。) 四句を離れ百非を絶す。謹んで白す。(言清く行濁る。)

【頌に云く】 ① 夢中衲を擁して耆舊に參す。(熱境忘じ難し。) 列聖森として其の右に坐す。(犬敎書を銜めば、諸侯路を避く。) 仁に當つて譲らず。捷椎鳴る。(心人に負かざれば) 説法無畏師子吼す。(面に慙づる色なし。) 心安きこと海の如く、百川を呑納す。膽量斗の如し。(傍若無人。) 鮫目泪流る。(點々是れ血。) 蚌腸珠剖る。(赤心片々。) 譚語誰か知らん我が機を泄すことを。(手足俱に露る。) 龐眉應に笑ふべし家醜を揚ぐることを。(誰に因つてか致し得る。) 四句を離れ百非を絶す。(言猶ほ耳に在り。) 馬師父子病に醫を休む。(疹を走り痛を走る、神鬼明め難し。)

- ① 仰山慧寂禪師のこと。
- ② 彌勒は兜率天の兜院に住する補處の菩薩、今仰山は夢に彌勒の所に往くと云ふ、一場の夢物語とのみ見るべからず。
- ③ 彌勒菩薩のこと。
- ④ 大衆に注意を與ふる時に、鳴らす道具。法語を證明するときに鳴らす。
- ⑤ 大乘と云ふこと。
- ⑥ 四句とは一異有無の四句、これを聞いて百非となす、即ち大乘の法は差別偏見を絶して居ると云ふこと。
- ⑦ 仰山の夢中に彌勒の所に往きしを云ふ。
- ⑧ 捷椎とは白槌を指す、即ち大衆を警むる鐘魚等をも云ふ。
- ⑨ 仰山の心安きことを云ふ。
- ⑩ 離四句絶百非のこと。
- ⑪ 餘りに婆々談議なること。
- ⑫ 第三十六則を見よ。

第九十一則 南泉牡丹

【衆に示して云く】 ① 仰山は夢中を以て實となし、南泉は覺處を指して虚となす。若し覺夢元無なることを知らば、始めて虚實、待を絶することを信せん。且く道へ、斯の人甚麼の眼を具するや。

【擧す】 南泉因に陸巨大夫云く、「肇法師也甚奇特なり。(也た是れ遼東の白豕。) 道ふことを解す、天地同根萬物一體と。」(兩指を豎起す。) 泉、座前の牡丹を指して云く、「大夫時の人、此の一株の花を見ること夢の如くに相似たり。」(壁を隔て、狀を過す。)

【頌に云く】 ① 離微造化の根に照徹し、(行いては到る水の窮まる處。) 紛紛として出沒す。其の門を見る。(坐しては看る雲の起る時。) 神を劫外に遊ぶばしめて問ふ何か有らん。(心外無法。) 眼を身前に著けて知、妙に存す。

(滿目青山。) ② 虎嘯けば蕭蕭として巖吹作り、(火を乞ひて煙に和して得。) 龍吟すれば冉冉として洞雲昏し。(泉を挑げて月を帯びて歸る。) 南泉、時人の夢を點破して、(纔かに好し睡語するに。) 堂堂たる補處の尊を識らんと要す。(是の處是れ慈氏。)

- ① 前則を指す。
- ② 今則を指す。
- ③ 姓は陸氏、名を巨と云ふ、大夫の官を奉じ、南泉普願禪師に參じて大悟せり。
- ④ 經什三藏門下四智の一人、僧肇の遺著、肇論にある文。
- ⑤ 世間一般の人は、この牡丹の花を見ても、何のことも分らず、夢を見て居るやうなものよと云ふ意。
- ⑥ 離は體にして徹は其の用なり。
- ⑦ 六根六塵の對待なり。
- ⑧ 肇法師の境にして、眼を父母未生以前に着けて居ること。
- ⑨ 南泉の爲人せらるゝ處。
- ⑩ 天童座下への示衆。

第九十二則 雲門一寶

【衆に示して云く】 ① 游戲神通の大三昧を得、衆生語言の陀羅尼を解し、② 睦州秦時の轆轤鎖を拽轉し、③ 雪峯南山の鼈鼻蛇を弄出す。還つて ④ 此の人を識得すや。

【擧す】 雲門大師云く、「乾坤の内、乾坤を包裹する底、響。」⑤ 宇宙の間、⑥ 宇宙を立成する底、響。」中に一寶あり。⑦ (信せずんば懷を搜れ。) 形山に秘在す。⑧ (形山はれ寶) 燈籠を拈じて佛殿裏に向ふ。⑨ (早く是れ驢井を戯る。) 三門を將て燈籠上來す。⑩ (那ぞ井の驢を戯るに堪へんや。)

【頌に云く】 ⑪ 餘懷を收卷して事華を厭ふ。(水深くして波浪靜かに、學廣くして語聲低し。) ⑫ 歸り來つて何の處か是れ生涯。(老々大々として住處も也た知らず。) ⑬ 爛柯の樵子路なきかを疑ひ、(日月不到の處。) ⑭ 桂樹の壺公妙に家あり。(別にはれ一乾坤。) ⑮ 夜水金波桂影を浮べ、(通上徹下。) ⑯ 秋風雪陣蘆花を擁す。(大小明白。) ⑰ 寒魚底に著いて餌を吞まず。(徒に釣を下すに勞す。) ⑱ 興盡きて清歌卻つて槎を轉す。(又風に別調の中に吹かる。)

① 師家の作略を云ふ。
② 雲門が始め睦州の處に行き、轆轤鎖と云はれて大悟せしな云ふ、轆轤鎖とは物の用を爲さぬ鎖のこと、即ち無用の長物と云ふこと。
③ 第十四則を見よ。
④ 此の人とは暗に本則の雲門大師を指す。
⑤ 人々五尺の形山を指す、この事は華法師の寶藏論廣照空有品に出づ。
⑥ 物の澤山ある説。
⑦ 雲門の脚跟下を見抜いたかと云ふほどの意。
⑧ 轉身の一路を知らざること。

第九十三則 魯祖不會

【衆に示して云く】 ① 荆珍鵲を抵ち、老鼠金を啣む。其の寶を識らず、其の用を得ず。還つて頌に ② 衣珠を省する底有りや。

【擧す】 魯祖、南泉に問ふ、「摩尼珠人識らず、如來藏裏に親しく收得すと。(少賣弄。) 如何なるか是れ藏。」(法堂前、佛殿後。) 泉云く、「王老师と汝と往來する者は是。」(甚の死急か有る。) 祖云く、「往來せざる者は。」(頭を道へば尾を知り、往を告ぐれば來を知る。) 泉云く、「亦是れ藏。」(一遍生活すれば兩遍作る。) 祖云く、「如何なるか是れ珠。」(一を得て二を望む。) 泉召して云く、「師祖。」(老僧是れ拈出せざるにあらず。) 祖、應諾す。(閑黎是れ將ち來らざるにあらず。) 泉云く、「去れ、汝我が語を會せず。」(平生の肝膽人に向つて傾く。)

【頌に云く】 ③ 是非を別ち得喪を明し、(眼裏に筋有り。) ④ 之を心に應じ諸を掌に指す。(見處通透し、用時明白なり。) 往來不往來。(總に他の事に干らす。) 只だ這れ俱に是れ藏。(恁麼不恁麼總に得たり。) ⑤ 輪王之を有功に賞

① 神仙傳に出づ、靈公不思議にも神通を得て家に歸ること、即ち本家郷に歸りて自由なる境界を云ふ。
② 形山に秘在するところを述べ。
③ 寒魚とは參學者を指す。
④ 雲門も止むを得ずして説きたること。
⑤ 人々具足の佛性寶珠を知らずして、六塵中に迷ふこと。
⑥ 衣内の寶珠、即ち佛性を指す。
⑦ 南泉和尚の師兄なれど、境界は南泉に及ばず。
⑧ 如來藏とは一心のこと。
⑨ 南泉の語に附いて廻る。
⑩ 是非得喪の分別心を以て説くこと。
⑪ 輪王とは四州の王者にして、増劫の世には四種輪王出現して、この世界を治むと云ふ。
⑫ 無分曉のこと。

し、(廉者は取らず、貪者は與へず)黃帝之を罔象に得たり。(已に心力を勞す。)樞機を轉じ伎倆を能す、(百汝に如かず。)明眼の衲僧鹵莽なること無れ。(事は細を厭はず。)

第九十四則 洞山不安

【衆に示して云く】 下、上を論せず、卑、尊を動せず。能く己を攝して他に從ふと雖も、未だ輕を以て重を勞すべからず。四大不調の時如何が侍養せん。

【擧す】 洞山不安、僧問ふ、「和尚は病む、還つて病まざるものありや。」(分疏するに一任す。)山云く、「有り。」(強ひて主張す。)僧云く、「病まざるものは還つて和尚を看るや否や。」(世諦流布)山云く、「老僧他を看るに分あり。」(本分の相見。)僧云く、「和尚他を看る時如何。」(甚麼の眼あつて相見するや。)山云く、「則ち病あることを見ず。」(只だ是れ肯て假に參せず。)

【頷に云く】 臭皮袋を卸却し、(草枯れて鷹眼疾し。)赤肉團を拈轉す。(雪盡きて馬蹄輕し。)常頭鼻孔正しく、(也た須らく撥轉して始めて得べし。)直下闕體乾く。(切に忌む鬼を見ることがを。)老僧從來の癖を見ず。(手到れば病除く。)少子相看して向近すること難し。(渠に國土無し、何の處にか渠に逢はんや。)野水瘦する時秋潦退き、(龍は舊道を行く。)白雲斷ゆる處舊山寒し。(是れ眞に滅し難し。)須らく勦絶すべし。(君子の一言)顛覆すること莫れ。(燈を點じて飯を喫す。)無功を轉盡して伊れ位に就く。(葉落ちて根に歸す。)孤標汝と盤を同じうせず。(來時口無し。)

第九十五則 臨濟一晝

【衆に示して云く】 佛來るも打し魔來るも打す。理あるも三十、理なきも三十。爲復是れ錯つて怨讎を認むるか、爲復是れ良善を分たざるか。試みに道へ看ん。

【擧す】 臨濟、院主に問ふ、「甚の處よりか來る。」(掌して云く、這裏より來る。)主云く、「州中に、黃米を糶り來る。」(卻つて實頭。)濟云く、「糶り得盡すや。」(草に入つて人を求む。)主云く、「糶り得盡す。」(兩搭すれども頭を廻さず。)濟拄杖を以て一晝して云く、「還つて這箇を糶り得んや。」(甚の死急かある。)主便ち喝す。(蝦蟇叫。)濟便ち打つ。(伏手骨椽。)次に典座至る、前話を擧す。(小賣弄。)座云く、「院主、和尚の意を會せず。」(口は是れ禍門なり。)濟云く、「懶又作麼生。」(身上に上せ來る。)座便ち禮拜す。

① 下とは學者、上とは師家を指す、即ち學者が師家の好惡を論ぜざること。
② 四大とは地水火風なり、四大が調はざるは病氣のこと。
③ 洞山自己の病氣を僧に讓つて云はる、言、即ち能所を混亡して云ふ。
④ 洞山も止むを得ずして出張して云ふ。
⑤ 四大五蘊假和合の身體を指して臭皮袋と云ふ。
⑥ 臨濟和尚の語、赤肉團とは心識を指す。

① 病を勦絶するの意。
② 無病であると大面を爲す勿れと云ふと、やくたいもないと。
③ 迷悟凡聖等を一掃せる眞源空寂のところを歸ること。
④ 盤とは菜を盛る器、即ち同食するたと云ふ意。
⑤ 作家の衲僧が一塵も立せざる様子を云ふ。
⑥ 臨濟義玄禪師のこと。

【轉た堪へざるを見る。】濟亦打つ。(手の快を越ふ。)
【頤に云く】臨濟の全機格調高し。(也た好し一頓を與ふるに。)棒頭に眼あつて秋毫を辨ず。(一點も謬じ難し。)狐兔を掃除して家風峻なり。(師子の全威。)魚龍を變化して電火燒く。(大小の神通。)活人劍。(猶ほ些子に較れる。)殺人刀。(這の漆桶。)天に倚つて雪を照し。吹毛を利し。(誰か敢て正しく戯ん。)
①一等に令行して滋味別なり。(這の醋可醜だ醜なり。)十分の痛處是れ誰か遭はん。(打つて云く、是れ備、是れ備。)

第九十六則 九峯不肯

【衆に示して云く】雲居は戒珠舍利を憑ます、九峯は坐脱立亡を愛せず。牛頭は百鳥花を啣むことを要せず、黄檗は杯を浮べて水を渡ることを要せず。且く道へ、何の長處かあるや。
【擧す】九峯、石霜に在つて侍者となる、霜遷化の後、衆、堂中の首座を請じて住持を接續せしめんとす。(便ち好し、能が伎倆なきことを學ぶに、應に秀が塵埃を拂ふが如くなるべからず。)峯肯はず、乃ち云く「某甲

- ①院主とは監寺のこと。
- ②黄米とは玄米のこと。
- ③一番の處、化度の機を奪ふ、更に衆生の度すべきなき境界を云ふ。
- ④典座は炊事役の人、この典座は具眼の人なり。
- ⑤格外超越の機を云ふ。
- ⑥微細の處まで見抜くこと。
- ⑦已下臨濟の爲人境界を云ふ。
- ⑧碧巖錄第百則の巴陵吹毛劍の頤と對照して見よ。
- ⑨院主と典座とに對して云ふ。
- ⑩會元十五に出づ、雲居禪師が一庵主の舍利を大切にせしことを云ふ。
- ⑪牛頭和尚のこと、虛堂錄第五十六則に出づ。
- ⑫會元四、碧巖第十一則、四家語錄等に黄檗の語あり。
- ⑬九峯は石霜和尚の法嗣にして、道眼最も明かなる宗匠なり。

が問過せんを待て、若し先師の意を會せば先師の如くに侍奉せん。(路に不平を見る。)遂に問ふ「先師道く、「休し去り、歇し去り、力を費して作麼にかせん。」一念萬年にし去り、(忘前失後の漢。)寒灰枯木にし去り、(甚の氣息か有らん。)一條白練にし去る」と。(切に點汚を忌む。)且く道へ、甚麼邊の事を明すや。(只だ無事を要す。)座云く、「一色邊の事を明す。」(兩般にし了れり。)峯云く「恁麼ならば則ち未だ先師の意を會せざることあり。」(一朝の權手に在り。)座云く「備我れを肯はざるや、香を裝ひ來れ。」(果然として不會。)座乃ち香を焚いて云く「我れ若し先師の意を會せずんば、香煙起る處脱し去ることを得じ。」(人を氣急殺す。)言ひ訖つて便ち坐脱す。(這裏甚麼の所在ぞ、恁麼にし去る。)峯乃ち其の背を撫して云く「坐脱立亡は則ち無きにはあらず。(出身は猶ほ易かるべし。)先師の意は未だ夢にだも見ざるあり。」(脱體に道ふことは應に難かるべし。)

【頤に云く】石霜の正宗、(蜂のごとくに攢り、蟻のごとくに聚る。)親しく九峯に傳ふ。(氷消瓦解。)香煙に脱し去り、(生死自在は即ち無きにはあらず。)正脈通じ難し。(先師の意は未だ夢にも見ざること有り。)月菓の鶴は千年の夢を作し、(樹倒れども飛ばず。)雪屋の人は一色の功に迷ふ。(日出で、後、一場の懺悔。)十方を坐斷するも猶ほ點額す。(切に忌む根を生ずることを。)密に一步を移さば飛龍

を見ん。(別般の造化。)

第九十七則 光帝幞頭

【衆に示して云く】 達磨梁武に朝す、本心を傳へんが爲なり。鹽官大
中を識る、眼を具することを妨げず、天下太平國王長壽といつて、天威を
犯さず、日月景を停め四時和適すといつて、風化を光かにすることあり。
人王と法王との相見には、合に何事をか談すべき。

【擧す】 同光帝、興化に謂つて曰く、「寡人中原の一寶を收め得た
り。(少賣弄)只た是れ人の價を酬ゆるなし。(國を傾けても換ふること莫
れ。)化云く、「陛下の寶を借せ看ん。」(便に因つて勢に接す。)帝、兩手を以
て幞頭脚を引く。(幸に其の人に遇ふ。)化云く、「君王の寶誰か敢て價を酬
いん。」(一併に交足る、別に少欠無し。)

【頌に云く】 君王の底意知音に語る。(一たび善言を發すれば)天下誠を
傾く葵菴の心(千里福應す)掇出す中原無價の寶。(兩手に分付す。)趙壁
と燕金と同じからず。(別にはれ一家の珍。)中原の寶興化に呈す。(分付

看頭。)一段の光明價を定め難し。(自ら買ひ自ら賣る。)帝業萬世の師とな
るに堪へたり。(古今を裂破す。)金輪の景は四天下を耀かす。(猶ほ化の在
る有り。)

第九十八則 洞山常切

【衆に示して云く】 九峯舌を截つて石霜を追和し、曹山頭を斫つて洞
嶺に辜かす。古人三寸、慙麼に密なることを得たり。且く爲人の手段甚麼
の處に在るや。

【擧す】 僧、洞山に問ふ、「三身の中那身か。諸數に墮せざるや。」(前三
三、後三三)山云く、「吾れ常に此に于いて切なり。」(人を氣急殺す。)
【頌に云く】 世に入らず。(物外に身を横ふ。)未だ縁に循はず。(篤を刮つ
て家を成す。)劫壺空處に家傳あり。(猫兒屋頭に尿す。)白蘋風細かなり秋
江の暮。(清虛の冷淡。)古岸舡歸る一帶の煙。(目天涯に斷ゆ。)

第九十九則 雲門鉢桶

國譯天童覺和尚頌古

① 第二則を見よ。

② 鹽官齊安禪師と宣宗との話、碧巖第十一則を見よ。

③ 同光とは年號、唐の五代莊宗皇帝を指す。

④ 興化存獎禪師、臨濟和尚の法嗣。

⑤ 自分を卑下して云ふこと。

⑥ 冠の紐を云ふ。

⑦ 同光帝が底意を興化禪師に語りしを云ふ。

⑧ 趙壁は第十八則にあり、燕金は燕の昭王が千金を臺上に於て天下の士を引きしを云ふ。

⑨ 金輪とは輪王四種の中の最高の王にして、四州を治むるものと云ふ、即ち同光帝を賞揚する語。

① 第九十六則を見よ。

② 本則を指す。

③ 三身とは法身、報身、應身を云ふ。

④ 維摩經に云く、佛身無爲、諸數に墮せずと。

⑤ 洞山の答處に就いて云ふ。

⑥ 佛見法見の奥みなきことを頌す。

⑦ 人に必ず一つの特長あり、物にも亦一つの特長のあることを云ふ。

⑧ 華嚴經に、一切諸法の無礙圓融を説いて應應三昧と云ふ、一微塵の中に無量刹を現じて、凡夫現在目前の情景に支配されぬこと。

⑨ 飯鉢には飯あり、水桶には水あることを云ふ。

⑩ 雲門が大口を開いて唱へたるを云ふ。

⑪ 應應三昧に就いて分別せば、到底その眞意は了解出来ぬと

【衆に示して云く】 某に別智あり、酒に別腸あり。狡兔三穴、猾胥萬倖。更に箇の諸頭底有り。且く道へ、是れ誰ぞ。

【擧す】 僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ 塵塵三昧。」(頰有り沙を撒せず。門云く、「鉢裏の飯、桶裏の水。」(撞頭磕額、攔腮撲面。))

【頰に云く】 鉢裏飯桶裏水、(椀に盛り杓に穿む。) 口を開き膽を見はして知己を求む。(只だ分明に極まるが爲に、翻つて所得をして遅からしむ。)

思はんと擬すれば便ち二三機に落つ。(天童は第四。) 對面忽ち千萬里となる。(是れ必ず早く廻程。) 韶陽師些子に較れり。(未だ敢て相保せず。) 斷金の義分誰か與に相同じからん。(心人に負かす。) 匪石の心分獨り能く此の如し。(面に慙づる色なし。)

第一百則 瑯琊山河

【衆に示して云く】 一言以て邦を興すべく、一言以て邦を喪すべし。此の業亦能く人を殺し、亦能く人を活す。仁者は之を見て之を仁と謂ひ、智者は之を見て之を智と謂ふ。且く道へ、利害甚麼の處に在るや。

【擧す】 僧、瑯琊の覺和尚に問ふ、「清淨本然、云何ぞ忽ち山河大地を生ず。」(迷時は三界有り。)

覺云く、「清淨本然、云何ぞ忽ち山河大地を生ず。」(悟後十方空なり。)

【頰に云く】 有を見て有とせず。(一般の麩草。) 翻手覆手。(人の做造に由る。) 瑯琊山裏の人。(又手して云く、慧覺と。) 瞿曇の後に落ちず。(一語人を傷り、千刀腹を攪く。)

國譯天童覺和尚頌古 (報恩老人著語) 終

天童宏智禪師傳略

明州天童宏智正覺禪師，隰州李氏子。母夢五臺一僧，解環與環其右臂，乃孕。遂齋戒，及生，右臂特起若環狀。七歲日誦數千言。祖寂父宗道，久參佛陀遜禪師，嘗指師謂其父曰：「此子道韻勝甚，非塵埃中人，苟出家必爲法器。」十一得度於淨明本宗，十三通五經七史，十四具戒於晉州慈雲寺。智瓊和尚十八遊方，諶其祖曰：「若不發明大事，誓不歸矣。」及至汝州香山，成枯木一見，深所器重。一日聞僧誦蓮經，至父母所生眼悉見三千界，瞥然有省，卽詣方丈陳所悟。山指臺上香合曰：「裏面是甚麼物？」師曰：「是甚麼心行？」山曰：「汝悟處又作麼生？」師以手畫一圓相呈之，復拋向後。山曰：「弄泥團漢，有甚麼限？」師曰：「錯。」山曰：「別見人始得。」師應諾諾，卽造丹霞。霞問：「如何？」師曰：「已前自己。」師曰：「井底蝦蟆吞卻月，三更不借夜明簾。」霞曰：「未得更道。」師擬議，霞打一拂子曰：「又道不借。」師言下釋然，遂作禮。霞曰：「何不道取一句？」師曰：「某甲今日失錢遭罪。」霞曰：「未暇打得汝。」且去。霞領大洪師掌記，後命首衆，得法者已數人。四年過圓通時，真歇初住長蘆，遣僧邀至，衆出迎，見其衣寫穿弊，且易之。真歇俾侍者易以新履。師卻曰：「我爲鞋來耶？」衆開心服，懇求說法。居第一座。六年出住泗州普照，次補太平圓通。能仁及長蘆天童屋廬湫隘，師至創闢一新，弟子爭集。云云。紹興丁丑九月，謁郡僚及檀越，次謁越帥趙公令諤，與之言別。十月七日還山，翌日辰巳間沐浴更衣，端坐告衆，願侍者索筆作書，遣育王大慧禪師請主後事，仍書

偶曰：夢幻空華六十七年，白鳥煙沒秋水連天，擲筆而逝。龜留七日，顏貌如生。奉全軀塔於東谷，僧臘五十三。其生前所遺髮齒設利，綴之如珠。諡宏智塔曰：妙光。詳于會元第十四、普燈第九。

萬松行秀禪師傳略

順天府報恩寺萬松行秀禪師，河內人，族蔡氏，氣骨不凡，幼便超然，有出世志。父母難之，然知終不可以世相奪，因携送荊州淨土寺禮贊，允落髮秉具。後決力參究，擔囊距燕，歷潭柘，過慶壽，參勝默老人。老人曰：學此道如鍛金，滓穢不淨則精金不顯。觀君眉宇間大有物在，此物非一番寒徹骨不能放下。子後自見，不在老僧多言。且令看長沙轉自己歸山河大地話，半載無所入。默曰：我只願爾遲會，久之。一日忽有省，於玄沙未徹語尚未透。次參雪巖，滿於磁之。大明言下忽悟曰：得恁麼近，從前伎倆一火而燼。始知勝默爲人處，依雪巖二年，盡得其底蘊。巖付衣偈，勉以流通大法。自是兩河三晉皆欽師名。於是法門隱然倚以爲重。尋歸淨土，構萬松庵寺中。著宿敦請開法師應之。次住中都萬壽，金明昌癸丑，章宗詔入禁庭，陞座，帝躬自迎禮。開法感悟，賜錦綺大僧伽衣，承安丁巳，詔住大都仰山棲隱寺，以繼開山玄冥韻席。次移錫報恩洪濟，元太宗庚寅復奉勅，主中都之萬壽。晚年退居從容庵，數遷鉅剎，大振洞上之宗。道化稱極盛焉。嘗拈掇宏智百頌曰：從容庵錄，又著請益錄，踵碧巖後塵，開寶鏡重垢，甚有補於宗門。師天資敏利，百家之學無不淹通。三閱大藏，首尾熟貫，有祖燈錄六十二卷，辨宗說等若干卷。淨土、仰山、洪濟、萬壽四剎，皆有錄行世。以元定宗元年丙午，後四月五日示疾，七日書偈曰：八十一年，只此一語，珍重諸人，切莫錯舉。遂逝，世壽八十一。生宋乾道二年丙戌，僧臘六十。茶毘。

於通玄門外舍利無數諸方門人分而塔焉詳于續燈正統第三十五。

萬松老人評唱天童覺和尚頌古從容庵錄序

昔予在京師時禪伯甚多唯聖安澄公和尚神氣嚴明言辭磊落予獨重之故嘗訪以祖道屢以古昔尊宿語錄中所得者叩之澄公間有許可者予亦自以爲得及遇憂患以來功名之心束之高閣求祖道愈亟遂再以前事訪諸聖安聖安翻案不然所見予甚惑焉聖安從容謂予曰昔公位居要地又儒者多不誦信佛書惟搜摘語緣以資談柄故予不敢苦加鈎鏈耳今揣君之心果爲本分事以問予予豈得猶幾前愆不爲苦口乎予老矣素不通儒不能教子在萬松老人者儒釋兼備宗說精通辯才無礙君可見之予既謁萬松杜絕人跡屏斥家務雖祁寒大暑無日不參焚膏繼晷廢寢忘餐者幾三年誤被法恩謬膺子印以湛然居士從源目之其參學之際機鋒罔測變化無窮巍巍若萬仞峯莫可攀仰滔滔然若萬頃波莫能涯際瞻之在前忽焉在後廻視平昔之所學皆塊礫耳噫登東山而小魯登泰山而小天下者豈虛語哉其未入闔域者聞是語必謂予忘本好異也唯屏山閑閑其相照乎爾後奉命赴行在扈從西征與師相隔不知其幾千里也師平昔法語偈頌皆法兄隆公所收今不復得其藁吾宗有天童者頌古百篇號爲絕唱予堅請萬松評唱此頌開發後學前後九書間闕七年方蒙見寄予西域伶仃數載忽受是書如醉而醒如死而甦踴躍歡呼東望稽顙再四披釋撫卷歎曰萬松來西域矣其片言隻字咸有指歸結款出眼高冠今古足爲萬世之模楷非師範人天權衡造化

者孰能與於此哉予與行宮數友旦夕游泳於是書如登大寶山入華藏海互珍奇物廣大悉備左逢而右遇目富而心飫豈可以世間語言形容其萬一邪予不敢獨擅其美思與天下共之京城唯法弟從祥者與僕爲忘年交謹致書請刊行于世以貽來者廼序之曰佛祖諸師埋根千丈機緣百則見世生苗天童不合抽枝萬松那堪引蔓湛然向枝蔓上更添芒索穿過尋香逐氣者鼻孔絆倒行玄體妙底腳跟向來若要腳跟點地鼻孔撩天卻須向這葛藤裏穿過始得

甲申中元日

漆水移刺楚才晉卿叙於西域阿里馬城

評唱天童從容庵錄寄湛然居士書

我宗有雪竇天童猶孔門之有游夏二師之頌古猶詩壇之李杜世謂雪竇有翰林之才蓋探我華不撫我實又謂不行萬里地不讀萬卷書毋閱工部詩言其博瞻也擬諸天童老師頌古片言隻字皆自佛祖淵源流出學者罔測也柏山大隱集出其事迹間有疎濶不類者至於拈提苟簡但據款而已萬松昔嘗評唱兵革以來廢其祖彙邇來退居燕京報恩旋築蝸舍榜曰從容庵圖成舊緒適值湛然居士勸請成之老眼昏華多出口占門人筆受其間繁載機緣事迹一則旌天童學海波瀾附會巧便二則省學人檢討之功三則露萬松述而不作非臆斷也竊比佛果碧巖集則篇篇皆有示衆爲備竊比圓通覺海錄則句句未嘗支離爲完到于著語出眼筆削之際亦隨機不讓壬午歲抄湛然居士書至堅要拈出不免家醜外揚累我累汝也

癸未年上巳日

萬松野老因風附寄不宣

宏智禪師頌古目次

第一則	世尊陸座	第二則	達磨廓然	第三則	東印請祖
第四則	世尊指地	第五則	青原米價	第六則	馬祖白黑
第七則	藥山陸座	第八則	百丈野狐	第九則	南泉斬貓
第十則	臺山婆子	第十一則	雲門兩病	第十二則	地藏種田
第十三則	臨濟瞎驢	第十四則	廓侍過茶	第十五則	仰山插锹
第十六則	麻谷振錫	第十七則	法眼毫釐	第十八則	趙州狗子
第十九則	雲門須彌	第二十則	地藏親切	第二十一則	雲巖掃地
第二十二則	巖頭拜喝	第二十三則	魯祖面壁	第二十四則	雪峰看蛇
第二十五則	鹽官犀扇	第二十六則	仰山指雪	第二十七則	法眼指麈
第二十八則	護國三懷	第二十九則	風穴鐵牛	第三十則	大隨劫火
第三十一則	雲門露柱	第三十二則	仰山心境	第三十三則	三聖金鱗
第三十四則	風穴一塵	第三十五則	洛浦伏膺	第三十六則	馬師不安
第三十七則	澗山業識	第三十八則	臨濟真人	第三十九則	趙州洗鉢
第四十則	雲門白黑	第四十一則	洛浦臨終	第四十二則	南陽淨瓶

第四十三則	羅山起滅	第四十四則	興陽妙翅	第四十五則	覺經四節
第四十六則	德山學畢	第四十七則	趙州柏樹	第四十八則	摩經不二
第四十九則	洞山供真	第五十則	雪峰甚麼	第五十一則	法眼缸陸
第五十二則	曹山法身	第五十三則	黃檗噉糟	第五十四則	雲巖大悲
第五十五則	雪峰飯頭	第五十六則	密師白兔	第五十七則	嚴陽一物
第五十八則	剛經輕賤	第五十九則	青林死蛇	第六十則	鐵磨特牛
第六十一則	乾峰一畫	第六十二則	米胡悟不	第六十三則	趙州問死
第六十四則	子昭承嗣	第六十五則	首山新婦	第六十六則	九峰頭尾
第六十七則	嚴經智慧	第六十八則	夾山揮劍	第六十九則	南泉白牯
第七十則	進山問性	第七十一則	翠巖眉毛	第七十二則	中邑欄猴
第七十三則	曹山孝滿	第七十四則	法眼質名	第七十五則	瑞巖常理
第七十六則	首山三句	第七十七則	仰山隨分	第七十八則	雲門餠餅
第七十九則	長沙進步	第八十則	龍牙過板	第八十一則	玄沙到縣
第八十二則	雲門聲色	第八十三則	道吾看病	第八十四則	俱胝一指
第八十五則	國師塔樣	第八十六則	臨濟大悟	第八十七則	疎山有無
第八十八則	楞嚴不見	第八十九則	洞山無草	第九十則	仰山謹白
第九十一則	南泉牡丹	第九十二則	雲門一寶	第九十三則	魯祖不會

第九十四則	洞山不安	第九十五則	臨濟一畫	第九十六則	九峰不肯
第九十七則	光帝幞頭	第九十八則	洞山常切	第九十九則	雲門鉢桶
第一百則	瑯琊山河				

宏智禪師頌古目次終

天童覺和尚頌古 (報恩老人著語)

第一則 世尊陞座

示衆云：閉門打睡，接上上機，顧鑿頻申曲爲中下，那堪曲親木上弄鬼眼睛，有箇傍不肯底出來，也怪伊不得。

舉：世尊一日陞座，(今日不著便)文殊白槌云：諦觀法王法，法王法如是，(知佗是何心行)世尊便下座，(別日再商量)。

頌云：一段真風見也麼，(莫教飄入眼)特地出還難，綿綿化母理機梭，(參差蹉了交絡)織成古錦含春象，(大巧若拙)無奈東君漏泄何，(陰陽無曲狗)節氣不相饒。

第二則 達磨廓然

示衆云：卞和三獻未，免遭刑，夜光投人鮮，不按劍，卒客無卒主，宜假不宜真，差珍異寶，用不著死貓兒頭拈出看。

舉：梁武帝問達磨大師，(清旦起來不會利市)如何是聖諦第一義，(且向第二頭問)磨云：廓然無聖，(劈腹剜心)帝云：對朕者誰，(鼻孔裏認牙)磨云：不識，(腦後見腮)帝不契，(方木不入圓竅)遂渡江，(至少林)面壁九年，(家無滯貨)不富。

頌云：廓然無聖，(一廻飲水)一廻著噎，(來機逕庭)面赤不如語直，(得非犯鼻)而揮斤，(好手手)

中誇好手。失不廻頭而墮甌。已往不答。寥寥冷座少林。老不歇心。默默全提正令。獨自說兵機。秋清月轉霜輪。高着眼看。河淡斗垂夜柄。誰敢承攬。繩繩衣鉢付兒孫。莫妄想。從此人天成藥病。天行已過。使者須知。

第三則 東印請祖

示衆云。劫前未兆之機。烏龜向火。教外別傳一句。確皆生花。且道。還有受持讀誦分也無。舉。東印土國王。請二十七祖。般若多羅。齋。往往債口債去也。王問曰。何不看經。無功受祿。寢食不安。祖云。貧道入息不居。陰界出息不涉。衆緣常轉。如是經百千萬億卷。上來講讚。無限勝因。

頌云。雲犀玩月。璨含輝。暗通一線。文彩已彰。木馬游春。暖不羈。百花叢裏過。一葉不沾身。眉底一雙寒碧眼。不會趁蚍蜉隊。看經那到透牛皮。過也。明白心超曠劫。威音前一箭。英雄力破重圍。射透兩重關。妙圓樞口轉靈機。何曾動著。寒山忘卻來時路。暫時不在。如同死人。拾得相將。携手歸。須是當鄉人。

第四則 世尊指地

示衆云。一塵纔舉大地全收。匹馬單槍。開疆展土。便可隨處作主。遇緣卽宗底。是甚麼人。舉。世尊與衆行次。隨他腳跟轉。以手指地云。此處宜建梵刹。太歲頭上。不令動土。帝釋將一莖草。插於地上云。建梵刹已竟。修造不易。世尊微笑。賞罰分明。

頌云。百草頭上無邊春。夾山猶在。信手拈來用得親。入荒田不揀。丈六金身功德聚。不審。

等閑携手入紅塵。逢場作戲。塵中能作主。一朝權在手。化外自來賓。看取令行時。觸處生涯隨分足。不從人得。未嫌伎倆不如人。面無慚色。

第五則 青原米價

示衆云。開提割肉供親。不入孝子傳。調達推山壓佛。豈怕忽雷鳴。過得荆棘林。斫倒梅檀林。直待年窮歲盡。依舊孟春猶寒。佛法身在甚麼處也。

舉。僧問青原。如何是佛法大意。小官多念律。原云。盧陵米作麼價。老將不論兵。

頌云。太平治業無象。旄頭星現也未。野老家風至淳。爭如我這裏種田。搏飯喫。只管村歌社飲。窮鬼子快活不徹也。那知舜德堯仁。始成忠孝。

第六則 馬祖白黑

示衆云。開口不得時。無舌人解語。擡腳不起處。無足人解行。若也落他殼中。死在句下。豈有自由分。四山相逼時。如何透脫。

舉。僧問馬大師。離四句絕百非。請師直指某甲西來意。若識這僧問頭。省人多少心力。大師云。我今日勞倦。不能爲汝說。已有缸中月。問取智藏去。更添帆上風。僧問藏。卻受人處分。藏云。何不問和尚。好本多同。僧云。和尚教來問。可煞靈利。藏云。我今日頭痛。不能爲汝說。問取海兄去。我不可作馬師弟子。不得也。僧問海。苦瓠連根苦。海云。我到這裏卻不會。甜瓜徹蒂甜。僧舉似大師。索取草鞋錢。大師云。藏頭白。海頭黑。更參三十年。

頌云。藥之作病。胡人飲乳。返怪良醫。鑒乎前聖。師多脈亂。病之作醫。以藥下藥。以毒去毒。

必也其誰。莫是天童麼。白頭黑頭兮克家之子。一窰燒就。有句無句兮截流之機。更使瀉山笑轉新。堂堂坐斷舌頭路。一死不再活。應笑毗耶老古錐。只得一楔。

第七則 藥山陸座

示衆云。眼耳鼻舌各有一能。眉毛在上。士農工商各歸一務。拙者常閑。本分宗師如何施設。舉藥山久不陸座。動不如靜。院主白云。大衆久思示誨。請和尚爲衆說法。便重不便輕。山令打鐘。衆方集。聚頭作相。那事悠悠。山陸座良久。便下座歸方丈。一場話霸。主隨後問。和尚適來許爲衆說法。云何不垂一言。大海若知足。百川應倒流。山云。經有經師。論有論師。爭怪得老僧。可惜龍頭蛇尾。

頌云。癡兒刻意止啼錢。堪作何用。良駒追風。願影鞭。踢起便行。雲掃長空。巢月鶴。樹下底一場懨懨。寒清入骨不成眠。開眼作夢。

第八則 百丈野狐

示衆云。記箇元字腳在心。入地獄如箭射。一點野狐涎。嚙下三十年吐不出。不是西天令嚴。只爲默郎業重。曾有悞犯者麼。

舉百丈上堂。常有一老人聽法。隨衆散去。闌中取靜。一日不去。從來疑著這漢。丈乃問。立者何人。事不解。交客來須待。老人云。某甲於過去迦葉佛時。曾住此山。元是當家人。有學人問大修行底人。還落因果也無。但行好事。莫問前程。對佗道。不落因果。一句合頭語。萬劫繫驢。墮野狐身。五百生。備道不落因果。今請和尚代一轉語。著甚來由。丈云。不昧因果。一坑埋卻。老人於言下大悟。狐涎猶在。頌云。一尺水一丈波。幸自河清海晏。五百生前不奈何。早知今日事。悔不當初。不落不昧商量也。頑涎不斷。依然撞入葛藤窠。纏腰繳腳。阿呵呵。堪笑堪悲。會也麼。按牛頭喫草。若是爾灑灑落落。如蟲禦木。不妨我哆哆和和。偶爾成文。神歌社舞自成曲。拍拍是令。拍手其間唱哩囉。細末將來。

第九則 南泉斬貓

示衆云。踢翻滄海。大地塵飛。喝散白雲。虛空粉碎。嚴行正令。猶是半提。大用全彰。如何施設。舉南泉一日。東西兩堂爭貓兒。人平不語。水平不流。南泉見遂提起云。道得卽不斬。誰敢當鋒。衆無對。直待雨淋頭。泉斬卻貓兒爲兩段。抽刀不入鞘。泉復舉前話問趙州。再來不直半文。便脫草鞋。於頭上戴出。好與一刀兩段。泉云。子若在。恰救得貓兒。心斜不覺口啞。頌云。兩堂雲水盡紛拏。有理不在高聲。王老師能驗正邪。明鏡當臺。物來斯鑑。利刀斬斷俱亡像。消得龍王多少風。千古令人愛作家。有一人不肯。此道未喪。死貓兒頭堪作何用。知音可嘉。不道無只是少。鑿山透海。分唯尊大禹。功不浪施。鍊石補天。分獨賢女媧。闕一不可。趙州老有生。涯信手拈來。無不是。草鞋頭戴較些些。且信一半。異中來也。還明鑑。衲子難謾。只箇真金不混沙。是真難滅。

第十則 臺山婆子

示衆云。有收有放。干木隨身。能殺能活。權衡在手。塵勞魔外。盡付指呼。大地山河。皆成戲具。且

道是甚麼境界。

舉臺山路上有一婆子，傍城庄家夾道，凡有僧問臺山路向什麼處去，一生行腳去處也，不知婆子，驀直去，未當好心，僧纔行，著賊也不知，婆云：好箇阿師，又恁麼去也。爾早候白，僧舉似趙州，人平不語，州云：待與勘過，水平不流，州亦如前問，陷虎之機，至來日上堂云：我爲汝勘破婆子了也，我更候黑。

頌云：年老成精不謬傳，切忌魔魅人家男女，趙州古佛嗣南泉，鎮州端的出大蘿蔔，枯龜喪命因圖象，靈鬼靈神返遭羅網，良朋追風累纏牽，驟風驟雨不免羈羈，勘破了老婆禪，幾箇男兒是丈夫，說向人前不直錢，知根不聖。

第十一則 雲門兩病

示衆云：無身人患疾，無手人合藥，無口人服食，無受人安樂，且道膏肓之疾，如何調理。舉雲門大師云：光不透脫，有兩般病，還覺口乾舌縮麼，一切處不明，面前有物是一，白日見鬼，莫是眼花，透得一切法空，隱隱地似有箇物相似，亦是光不透脫，早是結智，那堪喉閉，又法身亦有兩般病，禍不單行，得到法身，爲法執不忘，己見猶存，墮在法身邊，是一，不唯邪祟，更有家親，直饒透得放過，卽不可，養病喪軀，子細點檢將來，有甚麼氣息，亦是病，醫博未離門，又早痲病發。

頌云：森羅萬象許崢嶸，聽佗何碍汝，識得不爲冤，透脫無方礙眼睛，閃棒著椽椽，掃彼門庭，誰有力，拂迹成痕，欲隱彌露，隱人曾次自成情，心疑生暗鬼，船橫野渡涵秋碧，死水浸卻棹。

入蘆花照雪明，住岸卻迷人，串錦老漁懷就市，著本圖利，飄飄一葉浪頭行，隨流得妙。

第十二則 地藏種田

示衆云：才子筆耕，辯士舌耕，我衲僧家，備看露地白牛，不顧無根瑞草，如何度日。

舉地藏問脩山主，甚處來，道：不知來處，得麼，脩云：南方來，好與下載，藏云：南方近日佛法如何，行說好話，脩云：商量浩浩地，低聲，藏云：爭如我這裏種田，搗飯喫，少賣弄，脩云：爭奈三界何，猶有這箇在，藏云：爾喚甚麼作三界，南方猶可，北方更勝。

頌云：宗說般般盡強爲，今日不著便，流傳耳口便支離，衆僧莫怪，種田搗飯家常事，不可別有，不是他參人，不知要知作麼，參他明知無所求，更須請益天童一逗，子房終不貴封侯，也是靈龜曳尾，忘機歸去同魚鳥，隨流得妙，濯足滄浪煙水秋，受用不盡。

第十三則 臨濟瞎驢

示衆云：一向爲人不知有己，直須盡法，不管無民，須是拗折木枕，惡手脚，臨行之際，合作麼生，舉臨濟將示滅，喇三聖，老婆臨死三回別，吾遷化後，不得滅卻吾正法眼藏，著甚死急，聖云：爭敢滅卻和尙正法眼藏，伴小心，故大膽，濟云：忽有人問汝，作麼生對，虎口裏橫身，聖便喝，當機不讓父，濟云：誰知吾正法眼藏，向這瞎驢邊滅卻，重賞之下，必有勇夫。

頌云：信衣半夜付盧能，賊兒賊智，攪攪黃梅七百僧，上梁不正，臨濟一枝正法眼，半明半暗，全在今朝，瞎驢滅卻得人憎，心甜口苦，心心相印，販私鹽漢，祖祖傳燈，鑿壁偷光，夷平海嶽，拳倒黃鶴樓，踢翻鸚鵡洲，變化鷓鴣，翻手是雲，覆手是雨，只箇名言難比擬，猶嫌少在，太。

都手段解翻騰（正法眼藏猶在）

第十四則 廊侍過茶

示衆云探竿在手影草隨身有時鐵裏綿團有時錦包特石以剛決柔則故是逢強卽弱事如何

舉廊侍者問德山從上諸聖向什麼處去也（在彌鼻孔裏）山云作麼作麼（迅雷不及掩耳）廊云勅點飛龍馬跛鼈出頭來（家富兒驕）山便休去（饒人不是癡）來日山浴出廊過茶與山山撫廊背一下（斷送上竿頭）廊云這老漢方始瞥地（覆車同轍）山又休去（虎頭虎尾一時收）頌云觀面來時作者知（昧者不覺）可中石火電光遲（已過新羅）輸機謀主有深意（埋兵掉鬪）欺敵兵家無遠思（深入虜庭）發必中（慣得其便）更謾誰（併賊捉獲）腦後見腮（今人難觸犯）曾經蛇咬（眉底著眼）今渠得便宜（佯打不知）

第十五則 仰山插鉢

示衆云未語先知謂之默論不明自顯謂之暗機三門前合掌兩廊下行道有箇意度中庭上作舞後門下搖頭又作麼生

舉馮山問仰山甚處來（不是不知來處）仰云中來（備爲甚落草）山云中多少人（只父子兩箇）仰山插下鉢子叉手而立（放去較危）山云南山大有人（刈草驚蛇）仰山拈鉢子便行（收來太速）

頌云老覺情多念子孫（婆心太切）而今慚愧起家門（三十年不少鹽醋）是須記取南山語（貴

人多忘）鏤骨銘肌共報恩（恨心不捨）

第十六則 麻谷振錫

示衆云指鹿爲馬握土成金舌上起風雷眉間藏血及坐觀成敗立驗死生且道是何三昧舉麻谷持錫到章敬遠禪床三匝振錫一下卓然而立（可驟有禪）敬云是是（且信一半）谷又到南泉遠禪床三匝振錫一下卓然而立（來朝更獻楚王看）泉云不是不是（也且信一半）谷云章敬道是和尙爲什麼道不是（棺木裏睜眼）泉云章敬卽是是汝不是（雪上加霜）此是風力所轉終成敗壞（殺人須見血）

頌云是與不是（細腰鼓子兩頭打）好看捲襪（刺頭在裏許了也）似抑似揚（手擡手捺）難兄難弟（頭高頭低）縱也彼既臨時（翻手是雲）奪也我何特地（覆手是雨）金錫一振（孤標脫塵離俗）繩牀三遠（閑遊戲）因行掉臂（叢林擾擾）是非生子（矮子看戲）想像閻羅前見鬼（家有白澤之圖）必無如是妖怪

第十七則 法眼毫釐

示衆云一雙孤鴈搏地高飛一對鴛鴦池邊獨立箭鋒相拄則且致錫解秤錘時如何舉法眼問脩山主毫釐有差天地懸隔汝作麼生會（誰敢動著）脩云毫釐有差天地懸隔（闢百草有甚麼難）眼云恁麼又爭得（鐵山橫在路）脩云某甲只如此和尙又如何（捩轉鼻頭）眼云毫釐有差天地懸隔（將謂別有）脩便禮拜（將錯就錯）頌云秤頭蠅坐便欹傾（設他一星不過）萬世權衡照不平（斗滿秤錘住）斤兩錫鉢見端的（莫

錯認終歸輸我定盤星，領取鈎頭意。

第十八則 趙州狗子

示衆云，水上葫蘆，按著便轉，日中寶石，色無定形，不可以無心得，不可以有心知，沒量大人，語脈裏轉卻，還有免得底麼。

舉，僧問趙州，狗子還有佛性也無，（攔街趁塊）州云，有，（也不會添）僧云，既有，爲甚麼卻撞入這箇皮袋，（欸便招，自領出頭）州云，爲佗知而故犯，且莫招承，不是道爾，又有僧問，狗子還有佛性也無，（一母所生）州云，無，（也不會減）僧云，一切衆生皆有佛性，狗子爲什麼卻無，（慈狗趁鶴子）州云，爲伊有業識在，（右具如前，據欸結案）

頌云，狗子佛性有，狗子佛性無，（打做一團，鍊做一塊）直鈎元求負命魚，（這僧今日合死）逐氣尋香雲水客，（穿卻鼻孔，也不知）嘈嘈雜雜作分疎，（競鬪枯骨，唯喋嗥吠）平展演沒蹤，（歇休厮諫）大舖舒材高語壯，（莫怪儂家，不慎初）一言出口，駟馬難追，（指點瑕疵，還奪璧）白拈巧偷，秦王不識蘭相如，（當面蹉過）

第十九則 雲門須彌

示衆云，我愛韶陽新定機，一生爲人拔釘楔，爲甚有時也開門，撥出膠盆，當路鑿成陷穽，試揀辨看。

舉，僧問雲門，不起一念還有過也無，（言清行濁，漢門云，須彌山險）

頌云，不起一念須彌山，（一句便了）韶陽法施意非慳，（天童也不少）肯來兩手相分付，（只恐爾

承當不下）（擬去千尋不可攀，徒勞斫額）滄海濶，（涵天浴日無涯岸）白雲閑，（伴鶴隨風得自由）莫將毫髮著其間，（已太多生）假鷄聲韻難，（我）真不掩僞，（未肯模胡放過關）（西天令嚴）

第二十則 地藏親切

示衆云，入理深談，嘲三擲四，長安大道，七縱八橫，忽然開口說破，舉步踏著，便可高掛鉢囊，拗折拄杖，且道，誰是其人。

舉，地藏問法眼，上座何往，（羅織人作麼）眼云，（迤邐行腳，索草鞋錢去也）藏云，（行腳事作麼生，果然放不過）眼云，不知，（何不早恁麼道）藏云，不知，（最親切）就身打劫，（眼豁然大悟，險費盤纏）

頌云，而今參飽似當時，（吾猶昔人，非昔人也）脫盡羅織到不知，（猶有這箇在）任短任長休剪綴，（枉費工夫）隨高隨下自平治，（不勞心力）家門豐儉臨時用，（關鹽醋不得）田地優游信步移，（要行即行）三十年前行腳事，（沒可思量）分明辜負一雙眉，（依舊在眼上）

第二十一則 雪巖掃地

示衆云，脫迷悟絕，聖凡雖無多事，立主賓，分貴賤，別是一家，量材授職，卽不無同氣連枝，作麼生會。

舉，雲巖掃地次，（沙彌行童不得氣力）道吾云，（太區區生埋兵挑鬪）巖云，（須知有不區區者，可惜話作兩橛）吾云，（恁麼則有第二月也）豈止第二，（百千萬箇）巖提起掃帚云，（這箇是第幾月，水晶宮裏出頭來）吾便休去，（盡在不言中）玄沙云，（正是第二月）一人傳虛，萬人傳實，雲門

云：奴見婢般勤，隨邪撲簸箕。
頌云：借來聊爾了門頭，當處發生得用隨宜即便休。隨處滅盡象骨巖前弄蛇手，欲道他人見時做處老知羞。先治自己。

第二十二則 巖頭拜喝

示衆云：人將語探水，將杖探撥草瞻風，尋常用底，忽然跳出箇焦尾大蟲，又作麼生。
舉：巖頭到德山，跨門便問：「是凡是聖？」這賊山便喝：「裂破燭體。」頭禮拜，未當好心。洞山聞云：「若不是豁公，大難承當。」厚幣甘言，頭云：「洞山老漢不識好惡，卻又著忙。」我當時一手擡一手捺，我豈不知。

頌云：挫來機，風行草偃，總權柄符到奉行。事有必行之威，佛手遮不得。國有不犯之令，誰敢當頭。寶尚奉而主驕，下以風刺上。君忌諫而臣佞，上以風化下。底意巖頭問德山，雖然父子與師，一擡一捺看心行，未免干戈相待。

第二十三則 魯祖面壁

示衆云：達磨九年，呼爲壁觀，神光三拜，漏泄天機，如何得掃蹤滅跡去。
舉：魯祖凡見僧來，便面壁相見了也。南泉聞云：我尋常向他道空劫以前承當，不考自招。佛未出世時會取，和尚會也未。尚不得一箇半箇，只爲漏拴索。他恁麼驢年去，忙者不會。
頌云：淡中有味，誰教偏添鹽著醋。妙起情謂，別日再商量。綿綿若存，今象先已落第二。兀兀如愚，今道貴無人著價。玉雕文以喪淳，和尚手高。珠在淵而自媚，少賣弄十分爽氣。今

清磨暑秋，體露金風。一片閑雲，分天分水。好事多磨。

第二十四則 雪峯看蛇

示衆云：東海鯉魚，南山鼈鼻，普化驢鳴，子湖犬吠，不墮常途，不行異類。且道：是什麼人行履處。
舉：雪峯示衆云：南山有一條鼈鼻蛇，汝等諸人切須好看。提起坐具云：這箇不是倩來底。長慶云：今日堂中大人喪身失命，聞風便颺。僧舉似玄沙，壘不過三。沙云：須是我稜兄始得。
（狐朋狗黨）然雖如是，我即不恁麼。別有一條長，便請拈出。僧云：和尚作麼生。毒蟲頭上措痒。沙云：用南山作麼。只者鼈鼻，猶爲分外。雲門以拄杖擡向峰面前作怕勢。何得自傷己命。

頌云：玄沙大剛，當機不讓父。長慶少勇，見義不爲。南山鼈鼻死無用，擔條斷貫索。風雲際會頭角生，時來蚯蚓作蛟龍。果見韶陽下手弄，忍俊不禁。下手弄，弄不出即休。兩週三度，激電光中看變動。眨眼喪身失命，在我也能遣能呼。少賣弄，於彼也有擒有縱。七寸在手，底事如今付阿誰。萬松老漢，冷口傷人不知痛。阿耶阿耶。

第二十五則 鹽官犀扇

示衆云：利海無涯，不離當處。塵劫前事盡在而今，試教伊覷面相呈。便不解當風拈出，且道：過在什麼處。
舉：鹽官一日喚侍者，與我過犀牛扇子來。要且少他不得者云：扇子破也。未舉時卻完全。官云：扇子既破，還我犀牛兒來。不見道破也，何不領話者。無對。扇子猶在，雖有如無。資福盡一

圓相於中書一牛字出巧新行能做會賣

頌云：扇子破索犀牛，一不做，二不休。捲摺中字有來由，強如說道理。誰知桂穀千年魄，埋根千丈妙作通明一點秋。現世生苗。

第二十六則 仰山指雪

示衆云：水霜一色，雪月交光。凍煞法身，清損漁父。還堪賞玩也無。

舉：仰山指雪師子云：還有過得此色者麼。仰山不覺平地喫交。雲門云：當時便與推倒，不奈缸何。打破屎斗。雪竇云：只解推倒，不解扶起。路見不平，拔劍相助。

頌云：一倒一起雪庭師子，恰似箇活底。憤於犯而懷仁，識法者恐勇於爲而見義。路見不平，清光照眼似迷家。東西不辨，明白轉身還墮位。更上一層樓，衲僧家了無寄。且過一生，同死同生。何此何彼，刀斧斫不開。暖信破梅，今春到寒枝。收得返魂香，涼颺脫葉。今秋澄潦水來，搥塗毒鼓。

第二十七則 法眼指簾

示衆云：師多脈亂，法出姦生。無病醫病，雖以傷慈。有條攀條，何妨舉話。

舉：法眼以手指簾，莫道不知，莫道不見。時有二僧同去捲簾，同行不同步。眼云：一得一失，劍下分身。

頌云：松直林曲，鶴長鳧短。不得動著，羲皇世人俱忘。治亂胡蘆提繫得肥，其安也。潛龍在淵，佛眼覷不見。其逸也。翔鳥脫矰，斬願望不及。無何祖彌西來，上梁不正。理許得失相半，下

柱參差，蓬隨風而轉空。業識茫茫無本可據，缸截流而到岸。順水張帆，難逢快便。箇中靈利，消僧罵街醉漢。誰敢承頭，看取清涼手段。我這裏也有，是罕遇其人。

第二十八則 護國三愴

示衆云：不挂寸絲底人，正是裸形外道。不嚼粒米底漢，斷歸焦面鬼王。直饒聖處受生，未免竿頭險墮。還有掩羞處麼。

舉：僧問護國，鶴立枯松時如何。步步登高易。國云：地下底一場懺懺，心心放下難。僧云：滴水滴凍時如何。法身無被不禁寒。國云：日出後一場懺懺，雪消露出死人來。僧云：會昌沙汰時，護法善神向甚麼處去也。點即到。國云：三門頭兩箇一場懺懺，到即到不點。

頌云：壯士稜稜鬢未秋，恨天不到男兒不憤不封侯。貪程太速，翻思清白傳家客。已太多生，洗耳溪頭不飲牛。未後太過。

第二十九則 風穴鐵牛

示衆云：運碁鈍行，爛卻斧柯。眼轉頭迷，奪將杓柄。若也打在鬼窟裏，把定死蛇頭。還有變豹分也無。

舉：風穴在鄧州衙內，上堂云：祖師心印狀似鐵牛之機，針筍不入。去即印住，拽廻鼻孔。住即印破，截斷腳跟。只如不去不住，印即是不印，印即是泥裏洗土塊。時有盧陂長老出問云：某甲有鐵牛之機，請師不搭印。宛有逆水之波。穴云：慣釣鯨鯢澄巨浸，卻嗟蛙步驟泥沙。引魂幡子搖氣袋，敲竹思已過鬼門關。穴喝云：長老何不進語。已臨崖岸，更與一推。波擬議，許多

時節甚處去來。穴打一拂子云。還記得話頭麼。試舉看。爲人爲微。殺人見血。破擬開口。猶自不伏。燒埋穴。又打一拂子。仍少三十棒。收主云。佛法與王法一般。不會做官。看傍州例。穴云。見箇什麼。卻好與一拂子。收云。當斷不斷。返招其亂。自罵自招。穴便下座。得意濃時。正好休。頌云。鐵牛之機。哮吼也未。印住印破。鈎錐在手。透出毗盧頂額行。將上不足。卻來化佛舌頭坐。匹下有餘。風穴當衡。世情看冷暖。虛破負墮。人面逐高低。棒頭喝下。豈容分說。電光石火。不待消停。歷歷分明。珠在盤。不撥自轉。眨起眉毛。還蹉過。和聲使打。

第三十則 大隨劫火

示衆云。絕諸對待。坐斷兩頭。打破疑團。那消一句。長安不離寸步。太山只重三斤。且道。據甚麼令。敢恁麼道。

舉。僧問。大隨劫火洞然。大千俱壞。未審這箇壞不壞。愁人莫向愁人說。隨云。壞。早是那堪。僧云。恁麼則隨他去也。目前可驗。隨云。隨他去。下坡不走。更與一推。僧問。龍濟劫火洞然。大千俱壞。未審這箇壞不壞。同病相愛。濟云。不壞。打破契頭。振轉鼻孔。僧云。爲甚不壞。又恁麼來。濟云。爲同大千。生鐵鑄成。

頌云。壞不壞。佛手揀不出。隨他去也。大千界。沒量大人。語脈裏轉卻。句裏了無鈎鎖機。枯牙帶齒亦不少。腳頭多被葛藤礙。誰教懶生枝引蔓。會不會。心忙手急。分明底事。丁寧。是盲者過。非日月咎。知心拈出。勿商量。牙人見販子。輸我當行。相買賣。堂屋裏販揚州。

第三十一則 雲門露柱

示衆云。向上一機。鶴沖霄漢。當陽一路。鶴過新羅。直饒眼似流星。未免口如匾擔。且道。是何宗旨。

舉。雲門垂語云。古佛與露柱相交。是第幾機。落七落八了也。衆無語。卻與露柱同參。自代云。南山起雲。北山下雨。張翁喫酒。李翁醉。

頌云。一道神光。上拄天。下拄地。初不覆藏。淨保保。赤灑灑。超見緣。也是而無是。烈焰中休。眨眼。出情量也。當面無當。劍輪鋒外。莫迴頭。巖華之粉。分蜂房成密。神通廣大。野草之滋。今麝臍作香。變化無方。隨類三尺。一丈六。主山高案山低。拄杖長拂子短。明明觸處。露堂堂。拶破面門。無處迴避。

第三十二則 仰山心境

示衆云。海爲龍世界。隱顯優游。天是鶴家鄉。飛鳴自在。爲甚困魚止。深鈍鳥棲。還有計利害處麼。

舉。仰山問僧。甚處人。閉門刷會。僧云。幽州人。公驗明白。山云。汝思彼中麼。恰待忘了。僧云。常思。熟處難忘。山云。能思是心。所思是境。元來更立能所。彼中山河大地。樓臺殿閣。人畜等物。反思思底心。還有計多般麼。仁者自生分別。僧云。某甲到這裏。總不見有。猶有這箇。山云。信位即是。人位未是。庭前殘雪。日輪消。室內紅塵。遣誰掃。僧云。和尚莫別有指示否。便恁麼來。山云。別有別無。卽不中。射透兩重關。據汝見處。只得一玄。已得缸中月。得坐披衣向後。自看。更添帆上風。

頌云：無外而容，大無不包，無礙而冲，細無不入，門牆岸岸，莫探頭好，關鎖重重，不消彈指，酒常酣而臥客，喚醒來打，飯雖飽而積農，一坑埋卻，突出虛空，今風搏妙翅，穿開碧落天，踏翻滄海，今雷送游龍，驚蟄二月節。

第三十三則 三聖金鱗

示衆云：逢強即弱，遇柔即剛，兩硬相擊，必有一傷，且道：如何回互去？舉：三聖問雪峯，透網金鱗未審，以何爲食，不待垂綸，自上釣，峯云：待汝出網來，向汝道，逢人且說三分話，聖云：一千五百人善知識，話頭也不識，靈山授記也不似今日，峯云：老僧住持事繁，腦後見腮。

頌云：浪級初昇，雲雷相送，恨天不到，騰躍稜稜，看大用，速禮三拜，燒尾分明，度禹門，急著眼看，華鱗未肯淹，盤虀更有侯黑，老成人不驚衆，安妥帖帖，穩穩當當，慣臨大敵，初無恐，受辱如榮，視死如生，泛泛端如五兩輕，遠觀不審，堆堆何啻千鈞重，近觀分明，高名四海，復誰同，天上揀月，介立八風，吹不動，恰似不曾。

第三十四則 風穴一塵

示衆云：赤手空拳，千變萬化，雖是將無作有，奈何弄假像真，且道：還有基本也無？舉：風穴垂語云：若立一塵，家國興盛，得之本有，不立一塵，家國喪亡，失之本無，雪竇拈拄杖云：是立不立，還有同死同生底，禿僧麼？不道無只是少。

頌云：幡然渭水起垂綸，老不歇心，何似首陽清餓人，少不努力，只在一塵，分變態，拈起拄杖。

云：看高名勳業兩難泯，放下拄杖，云：雪竇猶在。

第三十五則 洛浦伏膺

示衆云：迅機捷辯，折衝外道，天魔逸格，超宗曲爲，上根利智，忽遇箇一棒打，不迴頭底，漢時如何。

舉：洛浦參夾山，不禮拜當面而立，相逢不下馬，各自有前程，山云：鷄棲鳳巢，非其同類，出去，一手推，一手拽，浦云：自遠趨風，乞師一接，探竿在手，山云：目前無閣梨，此間無老僧，影草隨身，浦便喝，盡筋截力，山云：住住，且莫草草，忽忽，會者不忙，忙者不會，雲月是同，溪山各異，斜街暗巷，生客頭迷，截斷天下人舌頭，即不無，只見錐頭利，爭教無舌人解語，不見鑿頭方，浦無語，長蛇陣前，弓梢撲地，山便打，不意夾山卻作臨際，浦從此伏膺，藝壓當行。

頌云：搖頭擺尾赤梢鱗，口貪香餌，身掛網羅，徹底無依解轉，一日拽在網底，截斷舌頭，饒有術，君方掃雪尋松子，拽迴鼻孔，妙通神，我已開榛得茯苓，夜明簾外，今風月如畫，不借三光勢，枯木巖前，分花卉常春，潛消一色功，無舌人無舌人，鼻孔裏應諾，正令全提一句親，暗裏抽橫骨，獨步寰中，明了了，真光不耀，任從天下樂欣欣，紅紅自彼，於我何爲。

第三十六則 馬師不安

示衆云：離心意識參，有這箇在，出凡聖路，學已太高，生紅爐迸出鐵蒺藜，舌劍唇槍難下口，不犯鋒鏑，試請舉看。

舉：馬大師不安，未必似維摩，院主問和尚近日尊位如何，常住事忙，少得問候，大師云：日而